

---

# **白き不屈の魔導士**

子義

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

白き不屈の魔導士

### 【Zコード】

Z7305P

### 【作者名】

子義

### 【あらすじ】

若き執務官はほんのわずかな油断から大切な相棒を失い自身も大怪我を負う。任務に失敗し、必死の思いで強奪されたロストロギアに手を伸ばすもそこで気を失つてしまう。

心身共にボロボロな彼が眼を覚ますとそこは生まれ育った街で、目の前には知らない少女。

そして何故か自身は子供の姿になっていた。

主人公は平行世界の高町なのは。性別も名も違つけど、その身に宿す不屈の心は変わらない。

## 任務（前書き）

沢山の素晴らしい絵に触発されて書きました。  
少しでも楽しんで頂ければ幸いです。

## 任務

それは三人にとつては至つて苦にならない任務になるはずだった。スクライアによつて発掘されたロストロギア、それを強奪した犯罪者の確保。言い方は悪いがそれほど大事な事件ではない。この程度の事件など日常茶飯事だ。

強奪した者は名が売れている次元犯罪者でも何でもなく、確保も至つて簡単だと思われた。

そんな事件に三人が関わったのは、現場の近くに三人が乗つていた次元航行艦がたまたま居合わせたことと、依頼をしてきたスクライアの人間が親密な友人だつたためだ。

「まあこの程度の内容だ。普段お前等が関わっているものに比べればぬるいだろうが、油断だけはするなよ」

その次元航行艦、アースラの艦長であるクライド・ハラオウン提督が一人を激励する。

「了解しました。ささつと片付けてきます」

「俊くんの補佐は私がしつかりとするので安心してください」

「アリシアと俊也は私がしつかりと守ります」

敬礼する三人。今管理局でも話題になつてゐるチームだ。

高町俊也執務官とアリシア・テスタークサ執務官補佐、そしてアリシアの使い魔であるリース。

前者は管理外世界出身にもかかわらず極めて高い魔力資質を誇り、十五歳という若さで執務官資格を取るほどのエリート。

アリシアは魔力こそ少ないものの、補佐官としての能力はかなり

高く、同時にデバイスマイスターとしても優秀で名が知れている。得意魔法は補助全般、優秀なフルバックである。

リニスは生みの親で前マスターのプレシアから受け継いだ雷変換のレアスキルを持ち、戦闘能力もかなり高い。グレアム提督の使い魔であるリーゼ姉妹と共に最高ランクの使い魔と称されるほどの力を持つているオールレンジアタッカーだ。

このチームが解決した事件は数多く、またその話題性からミッドでの注目度である。雑誌やテレビでも取り上げられ半場アイドル化しているが、本人達にその自覚はない。

チームライトニングスターズと言えばミッドチルダの住人なら誰もが知っていると言つても大げさではない。

「よし、頼んだぞ二人とも。今日は珍しくクロノが帰つてくるみたいだから、終わったら飯でもいこう」

クラウドの言葉に頷き、三人は転送されていった。  
犯人の逃げ込んだ場所は管理外の無人世界。

任務は犯人の確保及び、強奪されたロストロギア、ジュエルシードの奪取だ。

## 任務（後書き）

序章は短めです。

## 失敗

確保に至るまでは実にスムーズだった。

森林に隠れて逃げる犯人。アリシアがその位置を割り出し俊也とリースが追い詰める。

途中、魔法を使って攻撃されたが俊也とリースのシールドはびくともしないし、アリシアの防御魔法も完璧だ。非殺傷設定でも当たらなければ意味がない。

俊也の師であり親友、そして今回の件の依頼者でもあるコーノ・スクライア直伝の守りはそう簡単に崩されはしない。もつとも、敵のランクはCで対する俊也はS、アリシアはAでリースもA。これだけ差がある上に俊也はいくつもの凶悪犯罪を取り締まる執務官、苦戦する方が難しい。

「ひつ、ひい！」

「よし、捕縛完了!」

「あっけないですね」

必死で逃げ惑う犯人をショーンバインドで縛り上げる。實にあつけない。クライド提督が言うようにわざわざ執務官が出るような事件ではなかつた。

不謹慎になるが、俊也ほどの能力を持つた執務官をわざわざこの程度の事件に当たらせるほど管理局に余裕はない。

「さすが俊くんにリースだね！」

「いやいや全然大したことないって。わざわざ俺が出向かなくてもそこら辺の武装隊員で余裕だよ。手柄を奪つてなんか悪いな……」「そうですね、私達はアースラで待っていても良かつたかもしだせんね」

俊也はアリシアの笑顔に苦笑しながら、仕事なのでいつもの言葉を紡ぐ。

「……俺は時空管理局の高町俊也執務官です。抵抗しなければあなたには弁護の機会があります。と言つても抵抗できないか」

チエーンバインドでがんじがらめにされた犯人を見て苦笑する。

「このままアースラまで護送を……」

通信を繋げようとして一瞬目を離す。

そして、それが取り返しの付かない失敗となってしまった。

一瞬の氣のゆるみ。瞬き一回ほどのわずかな隙に足をすくわれた。完全に相手が抵抗を諦めたと思ったこと、最近かかわった事件に対し内容があまに規模が小さいので気がゆるんでいたこと。そしてなにより追い詰められた馬鹿の行動力を見誤っていたことが大きい。更に、犯人が薬をキめていて良い感じにいつてしまっていたことが最悪だった。

これらの要因が重なり取り返しの付かない事態を招く。

言い訳は出来ない。非殺傷設定などという甘いものに触れすぎていたせいか、完全に失念してしまっていた。人を死に至らしめる慈悲な暴力を……。

「…………」

気づいたのはアリシア。

彼女のブーストデバイス、バルティッシュのスタンバイモードを解除し、ソニックムーブで犯人と俊也の間に割ってはいる。俊也は、そしてリースは・・・・・気づくのが数秒遅れた。その時点では詰みだつた。

「アリシ・・・・・！」

最後まで彼女の名を言つことが出来なかつた。  
刹那に襲いかかる轟音と閃光と熱風と衝撃。

「・・・・・あ！」

あまりの衝撃で声も出ない。

完全に油断していた。シールドも間に合わない、バリアジャケットも吹き飛ばされた。

吹き飛ばされ、痛みと熱さにのたうちまわりながら、気力を振り

絞り必死に立ち上がる。

犯人の目の前に立つていた俊也とリースはその衝撃を真正面から受けることとなつた。ダメージは半端じゃない。即死を免れたのも奇跡だ。

視界が紅い。どうやら頭から出血している様子。

鉄の味が口一杯に広がつてゐる。口内を傷つけたか、もしくは内蔵か・・・・・。

左手は痛くて動かせない。握つてゐるデバイス、レイジングハートもボロボロで、かなり危ないみたいだ。

「うう・・・・・・ぐ、あ、アリシ・・・・・・」

またも最後までその名を言つことが出来なかつた。

田の前の光景に頭が追いつかない。

常に前線に立つ者としてその覚悟はお互いに出来ていたが、こうして田の当たりにすると思考すら停止してしまつ。考へることを放棄してしまつ。

「・・・・・」

言葉は出ない。

リニスは、居た。体毛に赤い液体が付着しているが、山猫の姿だけでも確かに居た。横になりぐつたりとしているが、確かにそこに存在した。

しかしアリシアは居なかつた。

転がっているものはアリシアの形すらしていなかつた。美しい金糸のような髪も、思わず見とれてしまつような彫刻のように整つた顔も、無い。

一面に広がる朱色と肉片。火薬と血肉の臭いが混じり合つてつもない嘔吐感に襲われる。

田を背けたくなるほどのスプラッタ。

ほんの数分前まで自分を支えてくれていた大切な相棒はこんなにも変わり果ててしまった。

「・・・・・俺達を、かばつて・・・・・」

麻痺した感覚が蘇つて来たのか、涙が溢れて止まらない。

追い詰められた犯人は質量兵器・・・・・おそらく、何かしらの爆弾使つて自爆。

犯人の行動に気づいたアリシアが俊也とリニスを庇つて爆死。これが事実。これが現実。

なんて無情、なんて非情。夢なら早く覚めろ、これは洒落にならない悪夢だ。

「ち、くしょ・・・・・・」

がくりと膝が砕け倒れ込む。涙は止まらない。

アリシアのおかげで即死は免れたものの、瀕死の重傷である事は変わりがない。

「ぐ、そ・・・・・・」

自分のミスだ。何故想定しなかった、なぜ油断した、なぜアリシアを死なせてしまった！？

前衛なのになぜ気づかなかつた？ 後衛のアリシアに底われて何をしているんだ？

どうして、何故、何故、何故・・・・・・。

悔やんでも悔やみきれない。アリシアは帰つて来ない。そして、このままだとアリシアに救われた命もすぐに尽きてしまう。リニスの安否もわからない。

レイジングハートは絶望的な状態だ・・・・・・完全に沈黙してしまっている。自動修復するにしてもかなりの時間要する・・・・・・・その前に死が訪れるだろう。アリシアが守ってくれた命を散らす方が確実に先だ。

既に詰んでいた。覆らない。どうじよつこもない。  
死にかけの体、できない通信。

すぐのでも適切な治療を受けないと確実に命を落とす。  
しかし・・・・・・の状態ではどうすることもできない。

「アリシア・・・・・・

まだ涙は止まらない。

ずいぶんと世話を焼いてくれた三つ上のお姉さん。思えば、彼女に恋をしていたのかも知れない。しかし、彼女はもういない。自分のミスで、死なせてしまった。いつも側に立つ彼女を守ることも自分の仕事なのに。

何が執務官だ・・・・・・大切な人一人守れない肩じゃないか。

「せめて・・・・・・」

せめて任務を果たさなければ、彼女に顔向けできない。

死に体を必死に這いずらせ、犯人だった肉片のそばに固まって落ちていた二十五個の宝石へ手を伸ばす。

ジュエルシードは先ほどの爆発に巻き込まれたせいなのか、淡く発色し、所々ひび割れ、かすかに震えていたが俊也は気づかない。既に意識が途切れる寸前だつたし、視界は霞んでいたからだ。

「ああ・・・・・どこで、間違えたのか」

最良の道はどれだつたのか、分からぬ。

「死にたく・・・・・ない、よ」

手を伸ばす。

「願わくば、やり直しを・・・・・」

手を伸ばし・・・・・そこで世界が光に包まれた。

アースラのブリッジでは久しぶりに対面した親子が静かに談笑していた。

「最近忙しいみたいだな」

「おかげさまでね。私みたいに優秀だと休む暇も無いわ」

「まあ人手不足はいつも悩みの種だからな」

クライド・ハラオウン提督とその娘であるクロノ執務官の二人は任務に出ていた俊也達の帰りを待っていた。

クロノは執務官としての俊也の先輩であり第一の師でもある。俊也が魔法と出会つてからの関係なので、かれこれ付き合いは八年にも及ぶ。当時十四歳だった彼女も今は立派な大人へと成長していた。

なまじ優秀な執務官であるために暇がほとんど無く、今回こうして親子でのんびりと語らうのもかなり珍しい光景だ。一人ともかなりの能力と立場があるので仕事に追われ、全然家に帰れないのだ。こうして父親とゆつくり話せる機会も全然無いのでクロノはとてもよい心地よさに包まれていた。

それに加え弟分と妹分に会えるのだ、仕事のつかれもだいぶ癒えるだろうと楽しみに三人を待っていた。

が、そんな感情は一気に消し飛ぶ事となる。

「…………！ 大規模な次元震を観測！」

オペレーターのエイミィ・ロミエッタが立ち上がり叫ぶ。

艦内には緊急のアラームが鳴り響き、一気に緊張感に包まれた。

「次元震だつて！？ 場所は・・・・・」

そう言ひクロノに対しエイミーは青を通り越し白い顔で言葉を返す。小さく震えながら。

「場所は、えつ・・・・・うそ、でしょ？ 俊也君と・・・・・アリシアちゃんど、リニスが行つた世界・・・・・」

アースラスタッフは絶句する。

「・・・・・ 第62無人管理外世界、次元震断層に飲まれ……消滅。デバイスに応答無し・・・・・三人とも、反応口スト・・・・・しました・・・・・」

エイミーの言葉に艦内は静まりかかる。けたたましいアラーム音だけが鳴りやむことなく静寂に響いていた。

## 失敗（後書き）

リースの口調合つてゐるのかな……。  
ジュエルシードの数は仕様です。

「…………今日は！」

「間違いなく魔力反応だ。近い…………というか、庭からだな」

ソファーカラ立ち上るのは桃色の髪をポニー・テールにした女性。目つきは険しい。

魔力反応…………何かしら魔力を持つたものが自分のテリトリーに存在している。主と共に過ごす平穏を乱すおそれがある。主に害成すかも知れない。断じてそんなことを許すわけにはいかない。

「何かしらのマジックアイテムか、魔法生物か。…………最悪、局員か」

ポニー・テールの女性と共に立ち上がったのは蒼い体毛の狼。知性ある瞳で人語を発するその獣は普通の動物ではありえない。

「もしもの時は分かつているなザフィーラ?」「承知しているともシグナム」

最悪命を奪う覚悟も決め、リビングを出る。

シグナムと呼ばれた女性は自身のデバイス、レヴァンティンを握り、ザフィーラと呼ばれた狼もすぐに戦闘に入れるように構えている。

「我ら二人だけで問題ないか?」

「愚問だなザフィーラ。ベルカの騎士が一人もいるのだ。敗走など考えられん」

シグナムの言うベルカの騎士は彼女等の他に一人いるが、一人は主と共に入浴中であり、一人は近くのスーパーに買い出しに行っている。

入浴中の騎士は魔力反応に気づいているだろうが、その場を動かない事が正解だ。もしもの事が合つた場合、すぐに主を守護することができる。

「しかし、ここまで進入を許してしまつとは迂闊だったな……。」

シグナムが悔しそうに顔を歪める。

常に気を張っていたつもりであつたが、日和つていたのかも知れない。

新しい主と共に過ごした暖かな日々が惑わせた。本来彼らの過ごすべき場所は戦場であり、彼らが闇の書の騎士、ヴァルケンリッターである以上争い事は避けられない。

今代の主の願いで魔力の蒐集はしていないが、闇の書が危険な口ストロギアであることに変わりはない。何かしらの方法で管理局が書の転生先を探し出し局員を向かわせてもおかしくはない。

だからこそ悔やまれる。杞憂で終わることはおそらく無い。この管理外世界で魔力を持った存在が都合よく闇の書の主の家に現れるだろうか？ 現れるわけないだろう。偶然ではないはずだ。

「素早く片付けるぞザフィーラ」

「ああ。主の平穀を乱すわけにはいかないからな」

大きな家に相応しい広い庭。月明かりもなく、虫の音もなく、暗く静か。

二人はリビングから庭に移動する。魔力を感じてからほんの十数

秒。ヴォルケンリッターである一人からしてみれば少々時間がかかり過ぎているかもしねり。

風もなく静かすぎる夜の闇に立つ一人。少しばかり緊張した表情はすぐに驚愕に変わる。

そこには予想していたものは何一つなかつた。

マジックアイテムでも魔法生物でも管理局員でもない。

「これは・・・・・

「どういう事だ？」

二人の言葉も頷ける。一人が見たものはボロボロの布きれにくるまって横たわる少年と、傷だらけの姿で同じように横たわる一匹の猫だつた。

傷は深刻だ。騎士である一人から見て、決して浅くはない傷。すぐにはかかるべき処置を施さないと命に関わる、それほどまでの大怪我だつた。

「酷いな・・・・・どういう状況かはさっぱり分からんが、少なくとも敵ではないのか？」

「流石に手負い・・・・・いや、瀕死の体で単身乗り込んでくる愚か者とは考えにくい。見たところ主はやてとそう変わらない年齢のようだが」

シグナムは騎士甲冑を解除し、デバイスをスタンバイモードに戻す。

一刻も早く適切な治療、せめて応急処置でもしなければ危険な状態だが、あいにくシグナムもザファイーラも治癒魔法は使用できない。主と風呂に入っている鉄槌の騎士も然り。ヴォルケンリッターでそういう補助を一手に担うのは買い出しに出ている湖の騎士だ。だからこそ困り果てた。二人はまぎりなりにも騎士を名乗る。目

の前の瀕死の命を見捨てるというのは彼らの誇りが許さない。

主の命ならば従つたが、見捨てろという命令はないし、あの優しい主がそんな非道なことを命ぜるとは思えない。

「シグナム、見てみる」

「どうした・・・・・・何!-?」

よく見れば少年の傷が少しづつだが塞がっていく。危険な状態なのは変わりがないが、それでも徐々に回復していつている。

「驚いた。オートヒーリングとはかなりの腕を持つ魔導士なのだな」「だが、これでこの少年が魔導士ということが確定したわけだが。・  
・・・・・どうするシグナム」

事態はややこしくなった。

「これで少年がただの一般人なら保護し治療することに惑いはないが、魔導士となれば話は別だ。  
ここは管理外世界。魔導士がいることはあり得ない。

「この少年が管理局員ならば主はやてに近づけさせむわけにはいかない・・・・」

「が、ここで放置、もしくはどこかに捨てててくる等したら確実にこの少年は死んでしまうだろう。」

「ザフイーラ・・・・」

「悩むなシグナム。俺はお前の決断に従つた。意識を取り戻す前にデバイスを確保し、バインドでもかけていれば抵抗はできまい。記憶を消すというのも一つの手だ。・・・・命を奪うこととは、避けたい」

散々血に染まっている両の手。しかし、これ以上血に染めたくはないというのは騎士四人全員が考へてゐる切なる願いだった。

血と死臭から離れた今の生活はとても幸せだ。

だからこそ、この暖かな平穏を血で汚したくはない、もう汚れたくはない。

「私はこの子を運ぶ。お前はそっちの猫を。……主はやてには私から説明する」

シグナムは瞬きほど間の間悩み、とりあえず保護することを決める。ザフィーラは彼女の決定に領き同意した。

「急がねば。主はやてから賜つた服を汚してしまつが人命にはかえられん」

シグナムは少年を抱きかかえ、ザフィーラは猫を優しく咥えリビングへと戻つていった。

そこには警戒した表情でシグナムの手に抱かれる少年を睨む鉄槌の騎士と、大怪我の少年に驚く車椅子に乗つた愛らしい少女がいた。

未だ意識が戻らぬ少年、高町俊也はこうして八神家に保護された。

これはあり得なかつた出会い。

これから始まるのはあり得なかつた物語。

一人と一匹が加わることで開かれるもう一つの物語。

世界を越えた白い魔導士の物語、始ります。

## 漂着（後書き）

シグナムとザフライアを同時に隠さりすのなんか難しい・・・・・。

## 目覚め

色々なものが暗闇に浮かび上がる。

風景だつたり、人物だつたり様々。

大切な場所、大切な人。大好きなもの。

学校、寮、アースラ、翠屋、自宅・・・・・・思い出が詰まつた場所、心休まる場所。

浮かんでは消え、浮かんでは消える

アルバムを開いて、一枚一枚写真を取り出しそれを破いて捨てている。そんな感じだろうか。アルバムから写真がどんどん、どんどん消えていく。

最初に浮かんだ大切な人は母さん。

老化という言葉を知らない、いつまでも綺麗な大好きな母。女手一つで育ててくれた心から尊敬している、世界で一番だと自慢できる最高の母親。

次は姉ちゃん。

眼鏡がよく似合っている、優しい大好きな姉。正確には従姉妹に当たるそうだが　家族であることには変わりはない。いつも世話を焼いてくれた、優しい人。

兄ちゃんは憧れの対象。強く優しい、目指すべき目標。兄ちゃんのように強くなりたかった。

家族の姿がアルバムから消えた。

アリサ　初めての友達。

ユーノ　親友にして最初の魔法の師。

浮かんでは消え、浮かんでは消える。

父のように接してくれたクライド提督。

弟のように面倒を見てくれたクロノさん。  
ミッドでの母親とも呼べるプレシアさん。

他にも、次々にアルバムから写真は消えていく。

家族、親しかった友人、魔法の師達  
そして最後に二つの写真がアルバムに残つた。

薄茶色の髪をした女性。いつも帽子を被っているのが特徴的。  
それは使い魔の証とも言える猫耳を隠すため。

大変可愛らしいと思うのだが、本人は猫耳や尻尾を見られるのを  
恥と感じているようだ。同じ猫型の使い魔であるリー・ゼ姉妹は隠そ  
うとしてないが。

母性的で、一緒にいると安心できる大切な相棒。

名をリニス・テスター。テスターの母子一代に仕えてい  
る優秀な使い魔。

美しい金髪の女性。明るく親しみやすい笑顔が眩しい大切な相棒。  
名をアリシア・テスター。大魔導士プレシアの娘にして執務  
官補佐兼デバイスマイスター。

魔力の多さや資質などは母にかなり劣るが、それでも優秀である  
ことには変わりがない。

攻撃魔法はあまり得意とせず、補助を得意とした完全なフルバッ  
ク。そしてかなり名の知れたデバイスマイスターもある。

好きだった。

それは家族に対するものか、女性に対するものか、今では確認し  
ようがないが、彼女のことが好きだった。

その大切な相棒一人が消え、辺りは真っ暗になった。  
まるで味わつた絶望を表しているようで、口が歪む。

管理局でストライカーにすら匹敵すると謳われたチーム、ライト  
ニングスターズ。

執務官、執務官補佐とその使い魔から成るチーム。結成一年弱で  
数多くの犯罪解決に貢献した管理局の期待の星。

それがたかだかCランクの犯罪者を捕縛できず、質量兵器を用い  
られて壊滅。何がストライカーに匹敵するだ馬鹿馬鹿しい。

こんなはずじゃなかつた。

考えても、後悔しても、もう遅い。

もう、アリシアは 居ない。

アリシアは もうどこにも、居ない。

「・・・・・ん」

目を覚ます。

全身の氣だるさに加え、頭に霧がかかつたように意識がはつきり  
としないが、先ほどの夢のことは覚えている。

走馬燈のようなものだったのだろうか だつたらここは天国か  
？ と思つたがそうではないらしい。

知らない天井。どうやらベッドに寝かされているらしい。電灯が  
作り出す人工的な光に満ちたこの部屋が天国であるはずがない。  
天国はもっとアレだ、花が咲き乱れ天使が飛び交うとびきり幻想的  
な所のはずだ。実際の所は知らないが。

「気がついたん？」

声をかけられた。そしてその独特なイントネーションにドキリとする。

それは俊也の故郷、地球で言つ関西弁のイントネーションに近い。まさか管理世界で聞けるとは思つていなかつた。まあ関西人の魔導士がいてもおかしくはないのだが。

地球は管理外世界のくせに管理局に関わつてゐる者が多い。俊也は当然のこと、グレアム提督はイギリス出身で、ナカジマ三佐のご先祖様は日本人だつたはず。何かしら因縁でもあるのだろうか、地球は。

「うん・・・・・・助けられたみたい。まずはお礼を ありがとう」

「気にせんでもええよ。困つた時はお互い様や！ それにしても驚いたわ～大怪我してうちの庭に倒れとつたんやからなあ」

声の主に軽く戸惑う。

くりくりとした目が可愛い、どこか動物を思わせる愛嬌のある少女だ。足が不自由なのか、車椅子に乗り心配げな表情でこちらを伺つてゐる。

しかし、幼い。おそらく小学校の低学年、九歳から十歳といったところだろう。もしかしたらもつと下かもしれない。

ミッドの就業年齢は低い。その点から言えば少女の年齢もまあ珍しくはないだろう。俊也も嘱託魔導士になつたのは十歳の頃だつた。しかし、足が不自由なのに管理局員？ いくら管理局が万年人手不足であつたとしてもこんな幼く足に障害をもつた女の子を採用するだろ？ いくらなんでも採用しないだろ？ それともどんでもなく稀少なレアスキル持ちか？

いや、その前にまだ考える事がある。此處はどこだ？

見た限りアースラではない。室内を見渡した限りでは、どうも田

本の部屋の内装にそつくりだ。そしてもう一つ、気になる事があった。少女が言つた、うちの庭に倒れていたという言葉だ。それはありえない。俊也達が犯罪者を追い詰めたのは管理外の、おまけに無人世界の森林で人間が家を建てて住んでいるわけがない。

そう、少女の家の庭に倒れているはずがないのだ。

「私はハ神はやてって言つんよ。よろしくな」

「ああ・・・・俺は高町俊也。よろしく、はやてちゃん」

驚いた。日本の姓名・・・・外見の風貌から見ても完全に日本人だ。

「はやてちゃん、一つ聞くけどここのはどこなのかな？」

「はやてちゃんて・・・・なんか照れるわあ。ここは海鳴つていつ町やけど・・・・」

更に驚く。海鳴・・・・正に故郷だ。第九十七管理外世界地球、海鳴市。高町俊也が生まれ育つた町。

驚愕に固まつていると赤い顔をした少女、はやてが更に言つて言葉で完全にフリーズした。

「しかしほんま照れるわ。同年代の男の子と喋つた事もあんまないのに、ちゃんと付けで呼ばれたらそりや照れるのも仕方ないと思わん？　いや、そもそも男の子に名前呼ぶのも初めてやわ」

本気で照れているのだろう、はやは照れくさそうに笑いながら手のひらをうちわ代わりにしてパタパタと赤い顔を扇いでいる。

そんなはやての仕草を可愛らしいと思いながらも、聞き逃せない言葉が発せられたので顔をしかめて首を捻りながらも疑問を言つ。

「同……年代？」

「せや、服とかボロボロやつたからひのパジャマを着てもうひとつ  
るんやけど堪忍してな。男もんのパジャマは流石になかったから」  
「…………はやてちゃんのパジャマ？」

思わず今自分が着ている服を見る。

可愛いデフォルメされた狸がプリントされたパジャマ。黄色い生地で、いかにも女の子が着るといった感じだ。確かにほやてのもので間違いないだろう。

問題は、十七歳の男である俊也が何故それを着ているのか、そして何故サイズが丁度良い感じなのか。

「主はやで、気になるのは仕方がないですが、夜も遅いですし彼もまだ本調子ではないでしょう。明日詳しく話すことにしましょう。今日はもう休まれて下さい」

控えていたポーテールの女性、シグナムがはやてに会つ。時計の針は十一時を過ぎていた。子供はそろそろ寝る時間だ。

「うん…………せやね、俊也君もまだまだキツイやつじ、安心したら眠くなつてきたわ」

あぐびを噛み殺し笑うはやで。目を覚ますまでずっと側にいてくれたのだろうか…………俊也は申し訳ない気持ちで一杯になつた。

「おやすみ俊也君。明日こまばーお喋りしよな

はやはは心底嬉しそうに部屋を出て行つた。その後に大きな蒼色の犬が続く。

そして部屋には先ほどから一言も口を開かずに、殺氣を孕んだ眼で俊也を睨む三人の女性が残つた。

「お話する前に、申し訳ないけど鏡を貸してくれませんか？」

三人は怪訝な顔をしつつも手鏡を渡してくれた。

「…………どうして？」

俊也が呆然と呟く。

鏡に映るのは栗色の髪をした女の子のような顔立ちをした男の子。顔の作りは全体的に母親似だが目元は兄にそっくりだ。この頃はよく女の子に間違えられていた。親友、ユーノも最初は女の子と勘違いしてたくらいだ。自分も人のことを言えないのにずいぶんと失礼だと心から思う。

映っていた姿は確かに幼い。はやてが同年代と言つていたことも頷ける。

鏡には十七歳の少年ではなく、十歳前後の幼い少年が写つていた。

「そろそろいいだろ。本題に入らうか少年」

「てめえ一体何なんだ？」

「嘘は言わないで下さいね」

シグナムと、赤い髪をした少し田つきの鋭い少女と、金髪のどこかおつとりとした印象を受ける女性。なんら統一性の無い三人だが、三人とも同じように鋭い殺氣を俊也に向けている。

執務官として修羅場を潜つてきた俊也には分かる。殺氣は本物で三人は相当な手練れだと。しかしこれが普通の反応だると納得もしている。今の自分はどうからどうみても不審者なのだから。

「まずはこの子を預けます」

枕元にあつた相棒、インテリジェントデバイス、レイジングハートを差し出す。まだ修復が完全ではないのだろう。念話を送つても返事はなかつた。

「ほう、デバイスを？ 何故だ」

「師に聞いた話ですが、ベルカにはこんな諺があるそうです。曰く、和平の使者は槍を持たない」

俊也の言葉に三人が反応した。

「俺は見ての通り完全な不審者だけど敵ではない。その証として、俺の半身とも言える相棒をあなた方に託す」

スリープモードのレイハをシグナムに渡すと三人の殺気が緩くなり、消えた。敵として即刻処分という形にはならないみたいだ。

「なかなか見上げた事するじゃねえか」

赤い髪の少女がどこか嬉しそうに口をつり上げる。

「あなたの誠意、見せてもらいました」

金髪の女性が小さく微笑む。

「俊也と言つたか。それは諺ではなく小嘶の落ちだぞ？」

そうだつたけと首をかしげると。シグナムは少し笑つた。

「…………まだ名乗つていなかつたな。私はヴォルケンリッタ一が将、シグナム」

シグナムが名乗るとそれに続き一人も名乗る。先ほどの俊也の行動がかなりの好印象だつたらしい。

「鉄槌の騎士ヴィータ」

赤髪の少女が。

「湖の騎士シャマル」

金髪の女性が。

「そして盾の守護獣ザフィーラだ」

先ほどの蒼い犬が戻ってきた刹那に名乗りを上げた。俊也が犬が喋った事に驚くが、使い魔か何かだと瞬時に理解してさほど動搖はしなかつた。

「時空管理局所属の執務官、高町俊也一尉です」

改めて俊也も身分を明かした。

管理局という言葉に反応してヴィータが飛びかかって行きそうになつたが、シグナムがそれを手で制する。

「さて、それではじっくりと話しかけとするか

どうやら一方的に襲つてくる事はないみたいだ。

俊也は話し合いの場を設けてくれた事に感謝すると同時に安心し

た。

「やつしましょ「フシグナムさん」

ひつして長い夜が始まった。

## 状況確認

「…………管理局がどうしてこんなところにいるんだよ？」

ヴィータが再び敵意を剥き出しにして俊也を睨む。どうやら管理局に良い感情を抱いていないらしい。

こうした反応はさほど珍しくはないので俊也は軽く流す。

「それは俺もよく分からんんだ。あるロストロギアを強奪した犯人を追つて…………」

そこではつとなる。

そうだ、俊也は何故だか海鳴にいる。だが、他の一人は？ アリシアは？ リースは？

「『めんなさい、一つ聞かせてもらえないかな。倒れていたのは俺だけでした？』

「あなたの他には猫が一匹ね。一応治癒は施してあるけど…………」

「・

シャマルが困ったような表情で答える。

「衰弱しきってるの。回復の見込みは…………あまり、ないわ

ベッドから少し離れた籠の中に一匹の猫が横たわっていた。包帯を巻かれ痛々しい姿だが、確かにそこにいた。

「それは彼女のマスターがし…………」

フラッシュバックする。

田を背けたくなる光景。

おびただしい血の量。飛び散った臓物と肉片。

「うう……ぐ

胃から込みあげてくものを必死で吐き出すことになりやがれ。  
口を押さえ田尻には涙が浮かぶ。鏡で見れば酷い顔をしていたはずだ。

「おっおー、大丈夫かよー!?」

俊也の変貌に慌てふためくヴィータ。先ほどの敵意もどこかに吹き飛び困惑してくる。

そんな混乱の中、シャマルは冷静に俊也の背中を撫でていた。

「ありがとうござります……樂になりました  
「いいのよ……何があるみたいね」

気分はまだ最悪だが会話する分には問題ない。

心配げな表情のシャマルに精一杯の笑顔で感謝の言葉を伝えると、痛む体に鞭打つてベッドから転がり落ちながら土下座した。

「おおー！　びびしたんだよお前ー！」  
「ちよっと、何してるのー？」

ヴィータの困惑は深まり、今度はシャマルも慌てている。シグナムとザフィーラはあまりに斜め上の行動に固まつた。

「彼女はリースと言つて、俺の……

考える。彼女は俊也にとつて何なのか。

付き合いはかれこれ七年になる。弟のように扱ってくれたと思う。いや、むしろ息子として見られていたかも知れない。基本的に未っ子の甘えんぼな俊也はよくリースに甘えたものだ。

一緒に寝たこともあるし、一緒に風呂に入ったこともある。なんだかんだ言つて知り合つてからはずつと一緒にの時を過ごしてきました。

「俺の……家族です」

胸を張つて言える。

間違えなく彼女は高町俊也のかけがえのない家族だ。

「今彼女はマスターを失つている状態なんです。使い魔に魔力供給が無い状況の今、あまり時間がない……近いうちに消滅してしまう」

彼女のマスター、アリシアはもう居ない。

認めなければならない。リースは見つかったのにアリシアは居ない。

あれは悪夢ではなく現実。

「もう家族を失いたくない……彼女と契約させて下さい。ここで彼女と契約してもあなた方には決して危害は加えません」

額を床に擦りつける。

その行動に息をのむ四人。見た目九歳の子供が土下座して半泣きになりながら必死に懇願している。その行動を一蹴するほどヴォルケンリッターは外道ではない。

「顔を上げる。お前の誠意は十分に見せて貰っている。家族を救うのだろう？早く契約をすませるといい」

シグナムの言葉にもう一度深く頭を下げ、リニースを優しく抱きあげる。

本来、敵か味方かも分からぬ俊也に使い魔を与えるのは危険だ。しかし、使い魔を家族と呼びここまで必死になれる俊也に対して四人は先ほどまでの不審感は雲散していた。これが使い魔を道具として使うような輩だったら、すぐさまにたたき斬られてしまうだろうが。

家族のために必死になれるその姿に好感が持てた。四人にも今やそのように必死になれる家族がいるのだから。

「リニース・・・・・・」

抱き上げたリニースは軽かつた。思えばこうして猫の状態をじっくりみるのは初めてかも知れない。猫耳と尻尾を見られるのを恥じるような人だ。こうして素体の猫の姿を見られるのは裸を見られるのと同じくらいの恥ずかしさに違いない。

「契約内容はアリシアと同じ、ずっとそばにいて」

何故かすっからかんな魔力を総動員してリニースに送る。

「リリカル・マジカル、仮契約 完了」

男が言うには恥ずかしい呪文を唱え仮契約を完了する。これでリニースの同意を得て本契約である。まあしぶつても無理矢理契約するが。

とにかく、これですぐさま消滅という事態は避けられる。

「…………」

「おじおじ、ほんとに大丈夫かよお前」

リースを抱いたまま、前のめりに倒れそうになつたところを、ヴィータに支えられる。

「ありがとうヴィータちゃん」

「お、おひ。でもちゃんと付けはできればやめてくれ」

何か恥ずかしかつたのだろう。ヴィータはすこし頬を赤らめてそっぽを向いた。

「魔力がほとんど無いのに無茶するからよ」

「…………ほんとにすいません」

シャーマルに俗に言つてお姫様抱っこ状態でベッドに寝される。

「さて、辛いだろうが話を聞かせて貰つん」

シグナムの鋭い視線に少し息をのみつつ口を開く。元々衰弱していたのに加え深刻な魔力不足で体調の悪さが尋常じゃないので早く済ませたい。

「もう一つすいません。新聞ありますか？ 朝刊でも夕刊でもいいので、今日の分を…………」「新聞？ 何だかよくわからんがいいだろ？ 取つてこよ？」「なら俺が持つてこよ？」

ザフイーラがのっそりと立ち上がり、前足でドアノブを捻りドア

を開け出て行つた。何とも器用である。

ガチャリとドアが閉まる音がし、部屋には何とも氣まずい静寂に包まれた。

腕に抱くりニースの暖かさに安心しながらも考える。

この状況を・・・・・何故こんな状況に陥つたのか仮設を立て、推測し、結論を出す。

正直訳が分からぬ。夢と言われれば納得してしまうが、あいにく現実なのは確認済みだ。

地球とミシードの知識や常識、執務官の経験を持つとしても意味不明。

いや、そんなに考える必要はなかつた。原因と言われて思い浮かぶのは一つしかないじやないか。

「ジュエルシード・・・・・・か」

ロストロギアが原因なら説明は付く。といつも、ロストロギア絡みなら全部ロストロギアのせいです間違いない。

効果は外見年齢の退行と次元移動といったところだろうか。断定はできないが間違いないだろ？

「ほら取つてきたぞ」

「ありがとう」「それこまか」

退室時と同じように部屋に戻つてきたザフィーラ。口にはしつかりと新聞を加えている。テレビで時々見るお利口さんな犬みたいだと思つたが、決して口には出れない。

「・・・・・うん？」

いつもの癖でまずテレビ欄から目を通す。執務室になつても変わらなかつた癖で、よくからかわれたものだ。

そしてそのテレビ欄で懐かしい番組を発見した。昔からよくある特撮番組、いわゆる戦隊ものといったやつだ。

俊也はよく女の子に間違えられていたが、中身はれつきとした男の子。年相応にこういう戦隊もの、怪獣や光の宇宙人が大暴れする特撮、アニメなど大好きであり、夢中で見たものだ。

再放送かなと思ったが、そうではなかつた。

その戦隊ものだけではなく、アニメ、ドラマ、バラエティ番組、その全てが見知ったもの、そしてそのほぼ全てが現在では番組終了している。そう、今日の新聞のテレビ欄に載ることはありえない。まさかと思いながら日付を確認する。本当ならテレビ欄を見る前に確認しなければならない事だが・・・・・。

そして、改めてロストロギアという規格外のロストテクノロジーの出鱈目さを思い知る。

「にやはは・・・・・まいったな、斜め上過ぎるよ

子供の頃の口癖が思わず零れた。

日付は、年、九月二十八日。

俊也達ライトイニングスターズがコーノの要請を受けジュエルシード奪取の任についてから、およそ八年前の日付だつた。

「外見年齢の退行、次元跳躍に加え時間旅行とは。にやはは・・・・・  
・・さすがロストロギア、何でもありなんだな」

俊也はあまりの予想外の現実に叩きのめされた。



## 時を越えた迷子

「…………状況が把握できました。自分でもいまいち信じられないし、あくまで憶測の域をでないけど聞いてもらいますか？」

シグナム達は無言で頷き、俊也もまた頷き返す。

リニースを枕元に優しく寝かせ、頭の中で纏まつた考えを口に出す。

「まず初めに、俺の実年齢、だけど十七歳です」

「おいおい、いきなり嘘ぶっこくなよ」

ヴィータが突っ込むが、俊也はそれを黙殺し話を続ける。

「今の外見年齢は多分九歳くらいだと思います。原因はロストロギアで間違いないです。俺とリニース以外には何か落ちていなかつたですか？」

「あつたぞ。そのジュエルシードとはこれのことか？」

シグナムがはやてのものなのだろう、ウサギの形をしたポシェットから取り出したそれは間違いなく強奪されたジュエルシード。ひび割れているものもあるようだが、確かに二十五個そこには一つも欠けることなくあった。

「並々ならぬ魔力を感じていたが、よもやロストロギアとは……」

「暴走の心配はないように処置はしているので安心して下さい。これが原因なんですか？」

シャマルの問いに答える。

説明するのはここに至るまでの過程。あくまで推察だが……。

任務の失敗、犯人の自爆と相棒の死。

痛み、悲鳴を上げる心を精神力で押さえ込み、何とか表情に出ないようにする。アリシアが死に至るまで説明するのはあまりに辛すぎた。

「…………今説明したとおりです。おそらく、ジュエルシードの力は外見年齢の退行と次元跳躍に加え時間旅行だと考えられます」

俊也は自分の考えを述べたが、部屋の空気は死んでしまった。  
説明に驚き、考える表情を浮かべたが、一番大きなリアクションを起こしたのはアリシアの死を話したとき。悲痛な表情を浮かべる騎士達は思った以上にお人好しのようだ。

「お前は…………辛くねえのかよ？」

冷静に話す俊也に対し思うことがあったのか、ヴィータが声を上げる。

「俺もアリシアも管理局員、いわば軍人です。それも執務官と補佐官となれば危険が伴うのは当たり前。覚悟は出来ていた…………出来ていたはずなんんですけどね」

声が段々と小さくなり、視界が滲む。

「すまねえ…………」

ぱつが悪そうに、ヴィータが俯く。

辛くないはずが無い。辛いに決まっている。

大好きな人が目の前で肉片になつた。しかも自分をかばつてだ。  
女から守つてもらつてのうのうと生き延びる。酷く情けない。

彼女を守るのは他でもない自分の役目だったはず。それが逆に守られるとは何と不様なことであろうか。おまけに守つてくれた彼女は死んでしまつた。笑い話にもならない。

「にやはは・・・・・」めんね、こんなに泣き虫のはずじやない  
んだけどな、俺」

袖で涙を拭う。拭つても拭つても溢れてきて止まらない。  
涙をこらえきれないのは小さくなつてしまつたからだろうか？  
どうも口調も幼く感じる。魂が肉体に引っ張られるというやつだ  
ろうか……それは後々考える事にする。それ以外の問題が今は山積  
みだ。

「辛い話をさせたな・・・・・そして、お前はこれからどうする  
とこうんだ？」

「はは・・・・・どうするにも何も出来ないですよ。重傷を負い、  
頼れるものは何もない。まさにお手上げ状態です」

「・・・・・管理局や親に頼るという選択肢は無いのか？ いや、  
管理局に連絡されたら困るが、この時代にもお前の親族は居るのだ  
らう？」

「それは出来ません。この時間軸に高町俊也という存在は一人いる  
ことになります。この時代の俺と、未来からやつてきた俺の二人で  
す。もし俺が俺に会うよつなことがあればどんなパラドックスが起  
こるか想像できません。ドッペルゲンガーに会つたら死ぬといいま  
すし、良い方向には行かないでしょう。

管理局も駄目ですね。いずれこの時代の俺は管理局に入ります。  
そこで確実に不都合が起きる・・・・・

九月、俊也が魔法の練習を必死に頑張っていた時期だ。

ユーノの指導の下鍛錬に明け暮れていた、楽しくて楽しくてしうがなかつた日々。

もちろんこの時期にもう一人の自分と出会つた記憶のなどない。ならば、関わらない方が良いに決まつている。もちろん、大好きな母と兄と姉にもだ。

「いわば俺とリースは次元漂流者、それも管理局どころか誰も頼れない」

「この時期はリースとアリシアとも出会つていない。

アリシアから聞いた話だとこの時期はプレシアさんが入院したりとミッドで色々とバタバタしていたらしい。執務官補佐としてもまだ新米で覚えることも多く、本当に日が回るほど忙しかったとか。

地球上には居ないはず。アリシアとリースと出会つのは俊也が十歳の頃、季節は冬・・・・つまりは現在より一年以上後だ。

「・・・・そう考えるのが妥当なのか。にわかには信じられないが」

「肉体の退行はともかく、時間移動は聞いたこともあります。まあロストロギアに常識なんか通用しないでしようけど」

リースを撫でながら考える。

理解の範疇を超えてしまつていて、時間を跳躍したのは紛れもない事実。

それに伴い様々な問題が浮上してくる。

頼れる存在は無い。住むところもお金も無い。パラドックスを避けるためこの時間軸の自分と遭遇することは避けなければならない。そうすると下手に外を出歩く事も出来ないし、戸籍も無いと考えて

良いだろ？ ならば病気になつて医者に行くことも出来ないし、学校や就職だつて不可能だ。

「……既に詰んでるか」

何もできやしない。

俊也は考えれば考えるほど悪くなつていく状況に絶望しながら顔を俯かせる。

「シグナム、そろそろいいんじゃないかしら。この子はまだ体力も回復しきつてないのだし、早めに休んだ方がいいわ」

シャマルの言葉にシグナムが頷く。

「そうだな。俊也、詳しいことは明日主も交えて改めて話そう。今日の所はもう休め。気がついていないだろ？ が尋常じゃないくらい顔色が悪いぞ」

「そんな白い顔しやがつて、あたし達が悪人みたいじやねえか。ほら、寝てろ」

ヴィータが俊也をベッドに寝かしつけ布団をかける。

「お前に悪意が無いことは既に皆承知している。何、悪じようにはせんさ。今は身体を休める事だ。監視の公用も無いだろ？ シグナム、我らもそろそろ休もう」

ザフフィーラの言葉がきつかけで、この場は解散となつた。

不審者である俊也に対する措置としては随分甘いと思うが、俊也にとつては大助かりだ。

このまま家の外にでも放り出されていれば、最悪死んでいたかも

知れない。

「ありがとう・・・・・本当にありがとう」

彼等に心からの感謝を。

涙をこらえて目を閉じると直ぐに深い眠りについた。

## 疑問

「ん……」

窓から差し込む朝日で自然と目が覚めた。

不思議と目覚めはいい。妙に頭がスッキリしている。

転む体に鞭を打つて上体を起こす。何故か全力で走った後のように気だるい。頭はスッキリしているので妙な気分だ。

見慣れない部屋、一瞬此処がどこだか分からなくなるが、すぐに昨日のやりとりを思い出す。

「・・・・・夢じや、ない」

「さうや、夢なんかないよ

聞き慣れない声の方を向くとそこには昨日の少女、はやてがいた。いつからいたのだろうか？ 寝顔を見られたと思うとビックリが恥ずかしい。

「おはよう俊也君、疲れはちゃんととれた？」

「うん、何だか夕々にぐっすり眠れた気がするよ

執務官とデバイスマイスターを兼任していた俊也の毎日は多忙だった。

休みはほとんど無く、毎日夜遅くまで仕事をしたり、デバイスの研究をしたり、徹夜する事も少なくない。

「それなら良かつたわ。お腹空いてへん？ 何か消化の良い物がいいと思つておじや作つとるんやけど食べれそつか？」

「ありがとうはやてちやん。うん、貰うよ

素直に好意に甘えるとする。前日瀕死の大怪我を負つたのが疑わしいほどに身体は健康そのもの。胃袋も先ほどからぐりぐりと血口主張を開始している。

「ちゃんと付けせんでええよ、何か恥ずかしいわ。じゃあちょっと待つててな、すぐに取つてくるさかいに」

そういうのはやでは眩しいほどの笑顔を見せて部屋を出て行つた。

「…………しつかりした子だな」

正直な感想。

自分がはやてくらいの年の時はどうだつただろうか？ 嘴託魔導士になつて多少は改善されたが、ひどい甘えん坊でこんなに大人びた空気は纏つていなかつたはずだ。

「頭が上がらない。なアリース、レイハ」

返事は無い。

リースはまだ眼を覚まさないし、レイハの応答も無い。  
大事ないことは分かつてゐる。レイハは自動修復が済むまで、リースはおそらく誰かが回復魔法をかけてくれたのだろう。もうほとんど外傷は見あたらない。  
俊也が魔力供給しているので消滅する心配もない。じきに眼を覚ますだろう。

「アリシア…………俺たちどうにか生きてるよ」

視界がぼやけてきたので慌てて眼をこする。

「おいで泣いたらはやは心配するだろ。あんな小ちな女の子で心配をかけさせるわけにはいかない。」

「お待たせや俊也君。我ながらの自身作やでー。」

「おう、起きたのか。どこか痛かつたりしないか?」

涙の痕跡を完璧に消し去つた頃に、ヴィータを伴つてはやてが帰つてきた。

車椅子のはやは食事を運びつつドアの開閉は難しいので、お盆を持つてこるのはヴィータだ。

「猫の方はまだ起きねえみてえだけど心配すんなよ。シャマルの回復魔法はかなりのもんだからすぐ眼を覚ますぞ」

昨日のやつとりで完全に警戒は解かれたよう、ヴィータはかなり気さくに話してくれる。

正直にこいつ態度で接してくれるのはかなり嬉しい。

「ほら、飯だ。はやての飯はギガうまだから驚くなよー。」

お盆にはお椀に入ったおじやと牛乳の入ったコップ。ミッドで米食はあまり普及していないので、こつして米を食べられるのは日本人の俊也にとってとてもありがたい。

「ありがとうございます」

「礼はあたしじゃなくてはやてに言えよ。あとひやん付けはやめろ」「分かったよヴィータ、俺の事も俊也でいい。はやてひやんありがとうございます」「はい召し上がる。だから私の事も呼び捨てでかまわへん言つともやん。何か恥ずかしいんよ」

「うん、わかつたよはやー」

ほんのつと頬を紅くするはやーをかわいいと思いながら、おじやを口に運ぶ。

「つまー・・・・・・・」

あつさりとした和風の出汁で食べやすい。卵も半熟になつていてかなりいい具合だ。

「口に合つたみたいで良かつたわあ！ 私つてこいつして身内以外の人に手料理食べて貰つて初めてやねん。いやあ美味しい言つてくれてほんま嬉しいわー！」

「うん、その年でこれだけ料理できれば大した物だよ。やっぱり料理の出来る女の子つていいなあ」

何故か俊也の周りの女性は料理スキルを持っている者が少なかつた。

姉である美由希を筆頭に、アリシア、クロノ、ランスター提督に姫殿下。ちゃんとした料理と呼べる物を作れるのはリースにルシエ少将くらいか。

箸を進めながら思う。今思い描いた人物達とはもう一度と会つことは出来ない。

世話になりっぱなしで、なにも恩返しできていない。申し訳なく思つが、どうしようにもない。

「ううそつきさま。本当に美味しかつた」

「お粗末様でした。これでも一人が長かつたら料理は得意なんよ」

空いた食器はヴィータがお盆に乗せて運んでいった。

ヴィータに感謝の言葉を述べつつ、先ほど聞き逃せない単語を口にしていたので聞いてみることにした。

「一人が長かつたって？」

「うん、私随分と長い間一人暮らししつたんよ」

「一人……暮らし？」

「一人暮らし？ 小学生の女の子が一人暮らし？ それも長い間？ その事を何でもないように語るはやてに驚愕する。どこか照れくさいのか、少しばにかみながらも嬉しそうに話すはやて。

「それでも今は一人やないからな、ここの毎日が本当に楽しいんよ。無駄に鍛えられた家事スキルを思う存分発揮できるしな」

「はやて……その、ご両親は？ それにシグナムさん達と暮らしてたんじゃないの？」

「おとんもおかんも、だいぶ前に死んでしまってな……。あ、そんな顔せえへんでもいいよ、私はとっくにふつまれてるから。気にせんでいいって」

苦笑しながら呟つはやて。おやいく言葉通りに気分を害してはないのだろう。

「ぶっちゃけた話、もう両親の顔もよく覚えてないんよ。薄情やろ？」

「そんな事……シグナムさんやヴィータ達とは？」

顔を思い出せないほど昔から一人暮らし？

疑問が次から次へと浮かんでくるが、今ははやてとの話を優先させる。

「シグナム達とは今年の六月四日、私の誕生日に家族になつたんよ！」

嬉しそうに話すはやてとは対照的に俊也は混乱していた。表情は冷静を装っているが、はやての話には突つ込み所が多い。

「私ついわゆる魔法少女らしいんよ。シグナム達から聞いたんやけど、俊也君も魔法使いなんやろ？」

「うん、今は修復中だけどこの宝石が俺のデバイス……魔法の杖だよ」

沈黙している相棒、レイジングハートをはやてに見せる。

「その宝石が俊也君のデバイスなんやね。私はこれや！」

「こいつとした笑顔ではやてが取り出したのは一冊の本。そのハードカバーのしつかりした本を大事そうに腕に抱きながら、本当に、本当に嬉しそうに話す。

「この子な、闇の書つちゅう物騒な名前なんやけどな。物心つくころから家にあつてな、鎖が巻かれとつて読まれへん変な本やつたんやけど、今年の誕生日にえらい光つて鎖が解けてな」

「……そしてシグナムさん達が現れたと」

「そりなんよ！ 最高の誕生日プレゼントやつたわ！」

テンションが上がりきやいきやいとはしゃぐはやて。その幸せそうな顔をみるとこつちまで心が温かくなる。

そんな姿を微笑ましく思いながら考える。はやての話は驚くことばかりだ。

まず足の不自由な小学生女子が一人暮らしをしている点。それなりに長い期間保護者が必要な子供を一人で放置し、現状を維持していた点。周りの大人はどうしていたのか。はやてがこの異常事態を異常と認識していない点。正直後はこの現状、そしてはやての今までの生活が信じられない。

「シグナム達はヴォルケンリッターって言つてな、この闇の書の主を守る騎士らしいんよ。私が主つて事になつとるんやけど、そんな堅苦しい主従関係やなくて今は楽しく家族やつくる。みんなええ子達やで」

「うん、俺も良くしてもらつたし皆優しい人だね」

「そうやろ！ 最初は堅苦しい所もあつたんやけどなあ……」

それから惚氣るように家族の事を喋る。

ヴィータはアイスが大好きで最近ゲートボールにはまっている事。シャマルが塩と砂糖を間違えて甘いおにぎりを作ったこと。ネタでザフィーラにペティグリーちゃんを『えたといひ美味しそうに平らげた事。

シグナムは服の上でもすゞいのが分かるが脱ぐと更に凄い事。色々つっこみたい話も合つたが、本当に楽しい田舎だつた事はやっての顔を見れば分かる。

「あはは、なんか一杯しゃべつてもうたな。『めんな、まだしんどいやひ？』

「はやての笑顔を見たらしんどなんかどつか行っちゃつたよ。こつちまではやての元気を貰つたみたい」

そう言い笑いあう。

この数十分でかなり打ち解けたと思つ。

不幸な生い立ちからせ難えられない世に置かれてしつかりした子だ。とても好感が持てる。

「俊也君とお喋つしてるとおもひこね。男の子と話すんやからひつけと緊張しどたんやナビ」

「俺は見た目が女の子っぽいからね……あんまり男として意識していないのかもね」

「あはは、正直に云うと最初は女の子かと呟いたんや。わやナビ、シャマルが汚れを拭いて着替えたせる時にな……」

赤くなれるやで。じゆせんじゆせんと見られたらしげ。

「あ、あはは。じゅんな。せやー。今お風呂洗かしとんやー。や  
つぱつね風呂入つてわつぱつしたこやー。うよつと洗いたか見て  
くれわー。」

赤い顔をしたまま慌てて部屋を出でこくやで。じゅりの反応

は年相応らしい。……いや、ちょっとませていいか?

俊也としては小学生に裸を見られたくらいで別に羞恥心など沸かないが。

## 疑問（後書き）

俊也の世界と原作世界の違いはいつか纏めて掲載したいです。

あの後すぐに部屋に戻ってきたはやては風呂が沸いていた事を伝えてくれた。

「昨日も言ったかもしけんけど、男の子の着替えはないんよ。おとんの服着るにしても大きすぎるし……申し訳ないけど私の服を着てもららうしかないんやけど」

「服を貸してもらえるだけでも十分だよ。幸いにしてサイズはぴったりみたいだし」

はやての服がぴったり事実に苦笑する。

子供の頃の俊也は小柄だった。子供の頃は女の子の方が生長が早いと言つたが、その点を除いても小さかった。アリサより身長が高かつた事がないくらいだからよっぽどだ。

ちなみに下着までは借りないので現在ノーパンだつたりする。

「ほんますまんな、堪忍してや。今日にでも買いに行つてくるから。俊也君はブリーフ派でよかつたんかね？」

「俺はボクサーパンツ派で……いや、わざわざ服を買いにいつて貰うのも……」

「遠慮は無しやで。しばらくなつちで暮らしへいくんやし服が無いと困るやう?」

何でもないよつて言つたはやてに驚いた。声も出ない。

「なんやえらい驚いた顔して。簡単な事情はシグナム達から聞いたよ。事故で別の世界からやってきたんやろ? うちの庭に倒れとつたのは偶然やうつけど、行く場所もないやうつじ困つた時はお互

「これまで遠慮せんと甘えてここんよ

「はやて……」

なんと頼もしい言葉か。この小さな女の子に頼らなことだけない現状を情けなく思つが、ここは好意に甘えるしかない。

魔法とかかわっているからか、別の世界からやってきたといつ嘘みたいな話を信じてくれてこるのはとてもありがたい。

「ありがとう……絶対にこの恩は返すから……」

「うかじこまいるでや、恥ずかしいわ。そのかわり一つお願ひがあるんだナビ……」

少しひかれて少し恥ずかしさに俯き、意を決したように後退の眼を見て可愛らしいお願いをする。

「その、な。私と友達になつてくれへんか？ 異性の友達はもううんやけど、同年代の友達もおらへんねん」

恥ずかしいのだりう、顔を真っ赤にするはやてを見て自分の顔も赤くなつてこくのを感じる俊也。

( 可愛すぎるはやて…… )

精一杯の勇気を振り絞つての言葉だつただりう、まるで告白を終えた後みたいに赤くなるはやてを素直に可愛ないと思った。

「そ、それで、どうやろか？」  
「もううん、俺なんかで良ければ

断る理由なんか無い。」んな可愛らしく女の方と友達になれるな

ら願つたりかなつたりだ。

友達ゼロ発言の後だけど、こんな暗い発言は色々とおかしいはやての現状のせいだ。

同年代の友達、と言つていたからおそれべシグナム達は俊也の実年齢が十七という事を伝えていない。

違う世界からやってきた男の子……それがはやての認識だひつ。実際は色々複雑な事情を抱えている俊也だが、はやてが知る事情はこの程度でいいだろひつ。アリシアの死なども知つてしまふと色々つかわせてしまう。

色々詳しい事はシグナム達と話し合つて決めなけらばならないだろひつ。もしさやはてが外出した時にこの時代の俊也と出会つてしまふと田も当たられない事態になつてしまひつ。

「よ、よかつたわあ。ああ緊張した……これで私達お友達やね！」

「断るわけないのに。よろしくはやて」

右手を差し出すと嬉しそうに手を握りぶんぶんと思いつきり握手する。

嬉しそうなはやての顔を見ると自然と顔がほころんでくる。友達とこゝは大切だ。俊也もそれはよくわかっている。俊也は友達とう存在に救われたのだから。

「あら、随分と楽しそうね」

「シャマル！　あんな、俊也君と友達になつたんよー！」

「良かつたですねはやてちゃん！　ふふ、とっても嬉しぃやつ」

バスタオルと着替えを持つてきたシャマルは、はしゃぐはやてを見て微笑む。

「はい、タオルと着替えです。はやてちゃんのパジャマだけ文句

は言っちゃダメよ？ スカートを履くよりいいでしょ」「う？」

「俊也君スカート似合いそうやもんな」

「あんまりからかわないでよ。女装にはトラウマがあるんだから」

タオルとティフォルメされた猫がプリントされたピンク色のパジャマを受け取る。

見た目が女の子っぽい俊也は、たまに理不尽なゲームを吹っかけられては罰ゲームとしてよく女装させられた。

主な首謀者は枕元で寝息を立てているリニスとクロノ執務官、たまたまにランスター提督も。ちなみにユーノも被害者だ。

「早く入ってくるとええで。しつかり温まってゆっくりと疲れをとるんやで」

「お言葉に甘えて……つと」

「大丈夫！？」

ベッドから立った所でバランスを崩して倒れそうになつた。すんでのところでシャマルに支えられて倒れる事はなかつたが、なぜか膝が震えていて上手く立てない。

「まだ体が本調子じゃないみたいね。一時的なものではあると思うけど……お風呂場で倒れて頭でも打つたら大変ね」

「うーん……お風呂は好きだから入りたいけど……」

死因が風呂で滑つて頭を打つたなどギャグ漫画でしか見た事がない。さすがにそれはごめんこうむりたい。

「大丈夫やで俊也君、すつじい解決策を思いついた！」

にま」となんとかとても良い顔で笑う。

「シャマル、シグナム達はもう家出たか？」

「はい。シグナムは道場に、ヴィータちゃんはザフィーラと散歩に行っています。おじいちゃん達に顔を出すでしょうから少し遅くなるでしょうね」

「なら大丈夫やな。皆には内緒でけよっとした贅沢や！ シャマル、私も俊也君と一緒に入ればいいねん。朝風呂なんて久しぶりや！」

「あら、いいですね！ それなら心配ないです」

俊也を置いてけぼりにして盛り上がるはやとシャマル。俊也は一呼吸分呆けたから慌てだす。

「何言つてんだよはやと、俺は男だよ？ 恥ずかしくないの！？」  
シャマルさんも止めて下さいよー！」

「いや、私としては友達と裸の付き合いをするつちゅうのも一つの夢でな……」

「同姓としてよー、シャマルさんはなんでそんな聖母みたいな目でこつけ見てるんですか！」

「いや、はやとちゃんも慌てる俊也君も可愛いなと思つて」

頭を抱える。

はやはまだ大丈夫。可愛らしいといつてもまだ子供、どう頑張つても妹のようにしか見れないし、女として見たら捕まる。しかしシャマルはまずい。控え目に言つても美人だし、上品でどこかおつとりしている空氣をまとっている彼女は大変魅力的だ。

(シャマルさんは俺が見た田の年齢が退行してることを知つているはずなのに……)

女の子っぽいと言われる俊也も立派な男の子なわけで……シャマ

ルと一緒に風呂に入らうものなら色々とのつべきならない状態になるのは仕方がない。

どうにかしてくれ、と田でシャマルに訴えかけるがシャマルの返答はますます俊也を不利にする。

「あら、私は気にしないわよ。はやてちゃんと同じ年くらいですし

どうやら男として見られていないようだ。内心色々複雑である。

「家長命令やから拒否権はないよ俊也君

「するいよはやて……」

それを言われたら従うしかない。

今俊也ははやての機嫌一つで路上の人になつてもおかしくないのだから逆らえない。

「それには、実は私弟とかほしかったんよ。だから弟とお風呂に入るみたいで楽しそうやん！」

「なん……だと」

はやてからは友達兼弟分として見られているらしい。これはまさすがに予想外だった。

友達（後書き）

ちなみに俊也はなのはと違いアリサにぶん殴られたのがきっかけで友達になっています。

## 家族（前書き）

文章力が……欲しいです。  
そして中々話が進まない……。

「かゆいところは無いですか？」

「大丈夫です。気持ちいです……」

「ふふ……それは良かつたです！」

真つ裸で椅子に座り、優しく丁寧に頭を洗われている。洗ってくれているのはシャマル。時々鼻歌が混じるためかなりご機嫌のようだ。

「よかつたな俊也君。役得やで、こんな美女一人とお風呂に入れるなんてな」

はやはては湯船からかいの言葉をかけてくる。実際にシャマルは美人だ。はやはては美人と言つよりは可愛いという表現の方が合っているが。

「はい、流しますね～。ちゃんと目を閉じてないと染みますよ？」  
「だから・・・・・あまり子供扱いは・・・・・」

今の俊也は正しく子供だ。体格だつてはやてと同じくらいでとても小さい。

しかし、心は十七歳の少年である。子供扱いは勘弁してもらいたいのが本音だが、どうやら望み通りにならないらしい。

詳しい事情を説明していないはやはては仕方がないかもしけないが、シャマルには事情をちゃんと説明しているのだが・・・・・。嫌がらせか、単に男として見られていないだけか・・・・・。どちらにせよ俊也の心境は複雑だ。

はやはては変な所で律儀というか漢らしいというか・・・・・』

お風呂ではタオルを巻かないのがマナー』や『言い、顔を赤くしながらもタオルを巻かずに生まれたままの姿を俊也にさらけ出した。シャマルもはやてに習いタオルを装備していない。

俊也もそれに従い嫌々タオルを手放した。当たり前だが裸を見られるのは恥ずかしい。しかも体が子供だからそれによりいつそう拍車がかかっている。

つるつるな自分の局部に、完全に子供な自分のモノを見たときは何故かショックを受けた。

はやては幼いながらも男のモノに少しばかり興味があるらしく、真っ赤になりながらもチラ見して『その、なんか可愛いな』という感想を言い俊也を落ち込ませた。

アリシアと初めて一緒に風呂に入った時も同じ感想を貰ったはずだ。

しかし、その時は身も心も正真正銘の十歳で、今は体は子供心は大人のコーン君状態。今とは状況が違う。とてもなくご立派とうわけでは無かつたが、さすがに可愛いと評されると少し落ち込む。そして何より俊也を落ち込ませたのはシャマルだ。

シャマルは十人いたら十人とも美人だと答えるほどの美貌の持ち主だ。それに加えてプロポーションも良く、白い肌や形の良い胸など男を惑わす要素を大量に持っている。

俊也も男だ、こんな美女と混浴すれば当然男としての機能が働くが・・・・・それが働くなかつた。

子供の体なのだから当然だが、問題は感情面。シャマルの体を見て綺麗だとは思うが、少しも興奮できなかつた。詳しく言えば性的な目で見ることができなかつたのだ。この事実は俊也を揺さぶつた。正しく心が体に影響されているのだろう。しかし俊也にしてみれば十七歳にして完全に性欲が失せて涸れているような状態である。それは落ち込みもする。

「はい、綺麗になりましたね！　体も洗いましょうか？」

「あ、それなら私も混ぜてや。二人で洗いつこじよー。」「いいですね！ 裸の付き合いにはつきものですよねー。」

さあこまちこと楽しそうにほしゃべ女子一人。俊也はおこてけばりだ。

体の洗いつこじても興味がそそられる魅力的なフレーズだが、実際は背中を流すだけだ。さすがに前は自分で洗う。

「シャマルが俊也君を、俊也君は私をお願いや」

はやてはシャマルに抱えられて湯船をでると、俊也の前に座った。ちなみにお風呂用の椅子はシグナム達が来てから買い足したらしく、計二つもある。

「いやあ実はこのうの少しあこがれとったんや。ほひ、漫漫画とかドラマとかでこいつのあるやん？ 子供が親の背中を流すってな「なり、はやての背中を流す俺ははやての子供と言つことになるけど？」

「私が養いつてこいつ意味では子供ではあると思つなどな？」

そう言われたらぐうの音も出なー。

「何だか楽しいですね。背中の流し合いなんて初めてですかー。俊也君、しつかりとはやちゃんを洗つてあげて下さいね

「任せとよ、これでも時々姪っ子の背中を流してたから」

末っ子の俊也は姪を下の兄妹ができたよとに喜び可愛がった。姪も俊也に懐き、たまに里帰りすると無邪気に甘えてくれた。

「姪っ子かあ。 それなら俊也君はもう叔父さんなんや？」

「叔父さんと言わると何だか複雑だけね。兄ちゃんの子供で零つていう名前なんだ。とても元気で明るい子だよ。それに将来は間違ひなく義姉さんに似て美人になると思う」

月村零。兄恭也とそのお嫁さん、月村忍との間に誕生した女の子。夜の一族の身体能力に兄、恭也と姉、美由希から御神の英才教育を受けていて、将来間違いなく最強の御神の剣士に成長したであろう愛すべき姪。魔法抜きにして陸戦ランクはどのくらいのものになつただろうか・・・・・。ちなみに兄と姉は間違いなくストライカーランス。俊也は剣の才能はなかつたために純粹な体術、剣術では二人の足下にも及ばない。

姪の成長を見てみたかってが・・・・・それも叶わない。

「一度会つてみたいなあ。あ、でも別世界なら無理か・・・・・・・・

はやては別世界の人間という話を信じている。騙しているようでも悪いが、別の世界という表現はあながち間違いではないだろう。

尚更だね「

タオルを泡立て背中を流す。小さな背中、華奢な体、それを宝物を扱うように優しく洗つていいく。

「ん・・・・・・良い気持ちや。私な、下の兄弟が欲しかったんよ。そしたら一人で寂しい思いすることもないやろ?」

「今は一人じゃないですよ。はやでちゃんには私達がいます」「うん、今は寂しくないよ。毎日幸せや」

絆を再確認している一人。とても心温まる光景だ。

はやての話が本当なら家族が出来て口が浅い。半年も経つていな  
いのに加え、おそらくシャマルは・・・・・はやての家族は人間  
ではない。

魔導生命体・・・・・詳しきは分からぬが使い魔ともまた違  
つた存在なのだろう。

しかし、はやての顔を見れば幸せといづ言葉が嘘じやないことが  
わかる。あんな笑顔を浮かべている少女が不幸なはずがあるわけが  
ない。

「シャマルもシグナムもヴィータもザフイーラも、大切な家族や」  
「ふふ、ありがとうはやでけやん」

そしてそれはシャマルも同様。

顔をのぞき込んでみると見惚れるような笑顔を浮かべていた。

背中の流し合いは中々に楽しかった。

途中向きを変えたりもしてみた。はやては小さな手で一生懸命背  
中を洗ってくれた。その一生懸命な姿は何か心にくるものがあった。  
シャマルに背中を流された時は時々やわらかな感触を背中に感じ  
た。無論、一糸まとわないシャマルの持つ女性の象徴なのが・・・  
・・・一切興奮できなかつたのが少し悲しかつたのは内緒だ。

逆向きになるとそんな感触が襲つてくることもなく、気を張らず  
にシャマルの綺麗な背中を流すことができた。はやてはまだ女性特  
有のふくらみが無いため安心できる。

はやての提案でこうして裸の付き合いをしたが、はやての思い通

りにすっかりうち解ける事ができた。

広めの浴槽なため三人で湯船に入ることが出来、肌は密着してしまっているが割とゆつたりと入る事ができる。

シャマルが俊也を抱きかかえ、俊也がはやてを抱きかかえる形だ。背中にシャマルの胸が当たつているがもう気にならなくなつた。思考は大人のはずだけど、体は子供の反応をしてしまう。

そうやって肌を密着させながら、色々話をした。

はやはて俊也の事を聞きたがつたので聞かせても構わない事を話して聞かせた。

好きな食べ物や趣味、得意な魔法など、何でもない世間話だ。

「はやてちゃん、そろそろ上がった方がよくないですか？」

「せやな・・・・・結構長湯しとるな。俊也君、のぼせてないか？」

？

「俺はもともと結構長湯する方だから大丈夫だよ」

「それならよかつた。じゃあそろそろ上がるつか」

友達とのお喋りが楽しいかつたみたいでそこそこ長く話した。はやての楽しそうな顔を見ると俊也も楽しくなる。どうもこの少女を放つておけない、ついついかまつてしまいたくなる。

「俊也君、頭拭いてあげる。じつおりでや」

はやはては俊也のことを完全に弟分として見ている。

本来なら俊哉の方が年上なのだが、はやはての好きなようにさせること。

弟の世話を焼けるのがうれしいらしい。

ちなみにヴィータは妹じゃないのか？ と聞いたら。

『ヴィータはちよいと氣の強い娘やな。シャマルはドジっ子母さんでザフイーラはまんま犬やし、シグナムはお父さんやな。ソファー

に座つて新聞読みながら「コーヒー飲んでる姿はほんまに中々に様になつとるで』

という言葉が返ってきた。

中々愉快な家族評だ。しかし、そう語るときのはやての笑顔、必死にドジっ子部分を否定しようとするシャマル。じゃれあう二人を見て改めて仲が良い素晴らしい家族だと思った。

もつとこの家族と仲良くなりたい。そう心から思えた。

今は悲しい記憶を仕舞い込み、この明るい家族の下で生きていこう。

(母さん、兄ちゃん、姉ちゃん、忍義姉さん、すずか義姉さん、コーン、クロノさん、クライドさん、エイミィさん、オリヴィア姫殿下、ティーダ、ティアナさん。・・・・アリシア)

様々な人の顔を思い浮かべる。

今まで関わってきた人、お世話になった大好きな人たち。

(・・・・・さよなら)

その人達に別れを告げる。もう一度念うことはできない。ある意味では高町俊也は既に死んでしまっているのかもしけない。

(俺はここで生きてみる。この温かな家族の元で、リースと一緒に・  
・・・・・)

はやてに髪拭いて貰いながら、ばれないように、これで最後と心に決めて、静かに涙を流した。

## 家族（後書き）

原作世界と俊也世界の差異を少し説明します。

クライドさんは御存命。

クロノの性別。

恭也、忍、年齢が原作よりも上。  
すずかが美由希と同じ年で親友。

俊也とすずかは盟約を結んで一生の友達。

ティーダは俊也の二つ年上で同期の執務官。

ティアナはティーダの姉、クロノの士官学校の先輩で次元航行艦の  
艦長。

聖王の血筋は絶えず残っていて、日本で言う天皇のような地位。

と、色々と考えています。

ある程度投稿が進んだら番外として設定集も投稿したいです。

感謝（前書き）

思つよりは話が進まない . . . . 。

「ただいま」

「主、遅くなりました」

ヴィータとザフィーラが帰ってきたのはお昼少し前。

ヴィータは朝早くから仲の良い近所の高齢者とゲートボールを楽しんでいた。ザフィーラはその付き添いで、お爺ちゃんお婆ちゃんに撫でられたりエサを貰いながらスポーツに励むヴィータを見守っていた。

自身のデバイスであるグラーファイゼンとゲートボールのクラブの形が似ていることから興味を持ったのだが・・・・試しにやつてみたところ結構面白く、現在では老人会のゲートボールチームに所属するほどはまりこんでいる。

「少し顔を出すだけだと言つたのに、結局まじつて遊んでいたな」「いいじゃねえか。爺ちゃん達がどうしてもつて言つんだから」

ザフィーラはヴィータがいつもしてスポーツをする」とはとても良いことだと思つていて。

ヴィータのような小さな少女は血生臭い戦場に立つよりも、無邪気に笑つていてる方がずっとといに決まつていてるからだ。

「老人の方々はとても可愛がつてくれて・・・・本当に優しい人達ばかりだ。孫のように扱つてもらえ、ヴィータも照れながらも居心地良さそうにしている。

闇の書の騎士として・・・・うとまれ、恐怖の、憎しみの目で見られたことは数え切れないほどあるが・・・・いつも暖かく接してもらえるのはいつ以来だろつか。

記憶はない。だからこそ今の日々に感謝する。暗い記憶ではな

く幸福の記憶を刻み込む。

今の主には感謝してもしきれない。こうした穂やかな日々を過ごせるのはあの小さな主のおかげなのだから。

「はやてお腹空いた…………、寝てるのか  
む…………状況が読めんが

帰宅した一人が見たものは居間で川の字になつて寝ている三人。シャマル、俊也、はやての順で並んで寝ている。別に昼寝をしているのは良いのだが、そこに俊也が混じつていることに多少は驚いた。

「随分と仲良くなつたようだな

はやてと俊也は手を繋いだまま寝ている。その姿はさながら中良い姉妹のようで微笑ましい。可愛らしくピンク色のパジャマを着てこる俊也は女の子にしか見えない。

「あたし達が出ていた間に何があつたんだか…………

ヴィータもザフィーラも、昨日の一件から俊也を怪しんだりしていない。明確な敵対行為をとらなければ結構仲良くやつていけるとも思っている。複雑な事情を持っているが、それは自分たちも変わりない。はやてが保護を決めたのだ、賛成はしても反対はしない。

「起しちゃうのは悪いな…………アイスでも食べてるか

「ヴィータ、アイスは一日一本までだぞ

「わかつてるつて

「この世界の菓子はとても美味しい。特にヴィータはアイスクリー

ムに魅せられている。

今代の主の元に顕現して初めての食事、主自ら振る舞つてくれた温かな手料理に感動し、口にして更に感動を重ね、食べ終わり、満腹感と幸福感に包まれていてるところに食後のデザートとしてやつてきたバニラアイス。ヴィータは一瞬にして虜になつた。

鼻歌を歌いながら冷蔵庫へ向かうヴィータ。ザフイーラは窓際へ移動して伏せる。窓から日光が当たりとても気持ちが良いのだ。のんびりと田舎ぼっこをする姿は完全に座敷犬、守護獣の威儀とかはどこかに忘れて来たらしい。

「ん・・・・あれ、二人とも帰つてたなんですか？」

「おう、起きたのかシャマル。それにしても随分仲良くなつたみたいじゃねえか」

丁度カップのバニラアイスを食べ終えた頃にシャマルが目を覚ました。時計を見て慌てている。もう時間は一時に近い。いつも昼食は十一時頃に頂くので普段より少し遅い時間だ。

「大変！　お腹空いたでしう？　すぐに支度しますから」

「いや、お前は手を出すんじゃないとしていろ」

「俊也はまだ体調も万全じゃないだろう。お前の料理など食べたら治る怪我も治らない」

「ちょっと！　失礼すぎないですか一人ともー？」

シャマルの家事スキルに全幅の信頼を寄せる一人だが、料理だけは別だ。

甘いおにぎりから始まり、スクランブルエッグという名の消し炭を作り上げ、ご飯を炊けばべちゃべちゃだし、レンジを使えば爆発させる。そのような過去の武勇伝があるためにシャマルは一人で台所に立つことを許されない。

はやでがいれば別に問題ないのだが、当のはやはては現在熟睡中。劇物を作らせるわけにはいかない。台所を壊させるわけにはいかない。

「仕方がねえからカップ麺でも作るわ。確かホームラン軒の味噌があつたはず・・・・」

「いや、今朝主が作ったおじやが残っているはずだ」「お、じゃあそれ食うか。温めるだけでいいもんな」

シャマルの手料理よりカップ麺の方がまし。そう言われてさすがにプライドが傷ついた。

「くつ・・・・・・・・いつか絶対見返してやるんだからー」「あ、声大きいぞ・・・・・・・・めり、はやでが起きちやつたじゃねえか」

寝そべて皿を擦りながら上体を起こすはやはて。俊也はまだ眠っている。

「ふあ・・・・・・・・よつ寝たわあ。一人とも帰つとつたんやね。すぐお昼用意するからちょっと待つてな」

小ちなあぐびを一回してからしつかりと皿を覚ます。

車椅子に座るためシャマルに抱えてもらおうとしたところ、自分の片手が塞がつている事に気がついた。

「ふふ・・・・・・・しつかりと手え握つて可愛いなあ。違う世界から迷い込んで心細かつたにきまつとるもんな・・・・・・・。でも安心してええよ、寂しい思いはさせんからな」

優しく俊也の頭を撫でるはやての姿は幼いながらも聖母のよづ。まるで絵画のように惹きつけられる美しい光景だ。

「まるで弟ができたみたいや。なあヴィータもそつ思ひやう?」「うふ、確かに可愛い寝顔してる」

しかしヴィータは俊也が正しくコナ、君状態である事を知つて、るため、可愛いとは思いながらも弟扱いに少し同情するのだった。

お皿はやはり食べやすいものがいいだん?とこいつ」と、こやうめんに決まった。

簡単に作れるし夏に買つていた素麺が大量に残っていたので丁度よかつた。

俊也はあれから直ぐに田を覚まし、いきなり眼前に飛び込んできたはやての慈愛溢れる表情に驚き頭を撫でられている事に赤面した。

はやてが調理し、シャマルがその手伝いをする。サポートに徹底し、味付けに手を出さなければシャマルは劇物を作らない。手伝うだけならヴィータにも出来るが、それは口に出してはいけない。

はやはては皆で食卓を囲むことを望んだためザフィーラは人間形態になつたが、俊也はさして驚かなかつた。この女所帯に黒一点はキツイのでぜひとも仲良くやつていきたいと心から思った。

何故か俊也の周りには綺麗どころが多くいて、男が少ない。

その異常さにはティーダと友人になり指摘されてから気がついた。彼曰く。

『お前の環境羨ましすぎるだろ。どれだけの男性局員が羨望と憎悪の眼差しを向けているか』

俊也の友人について考えてみよう。

チームを組んでいたアリシアとリースは女性。魔法の指導をしてくれたクロノとランスター提督も女性。直属の上司であるオリヴィア姫殿下、後輩であるマリエルも女性。出向している陸上警備第75部隊の部隊長であるカンナ三佐、出向先の相棒であるトレーニア一尉も共に女性である。

親しい男の友人と言えばユーノとティーダしかいないのでないか？ クライド提督は上司だし、幼い頃からよくしてもらっているので父親のような感じだ。お世話になり親しくしてもらっているゲンヤ三佐とゲイズ中将もやはり父子ほど年が離れていて友人とは言えない。

見事に女だらけ、男友達はユーノとティーダのみという驚きの事実に愕然としたのも記憶に新しい。

「へえ～オールラウンダータイプは珍しいな」

「その年で執務官にデバイスママイスターの資格を持つとは優秀だな

はやてとシャマルとは風呂で語り合つたが、この二人とはまだあまり話せていない。

食事ができるまでの時間、俊也はヴィータにせがまれたため自身の事を話している。

「元々機械いじりが好きだからデバイスママイスターは趣味と実益を兼ねてる感じかな。執務官は師匠の一人に勧められて・・・・・  
試験には三回落ちたんだけど」

魔法の話は結構もりあがつた。俊也は独立汎用型に分類される魔

導士で、攻撃、防御、補助をそつなくこなす万能タイプである。

ユーノから基礎と防御、結界魔法を学び、クロノから更に応用と戦い方を学び、ランスター提督から幻影と射撃を学んだ。

「師が有能だつたから・・・・」

思えば恵まれた環境だつた。指示してくれた人達は皆その道のエキスパートだ。

「それで武装隊に出向していたという話だつたが」

「うん、俺の本来の所属は時空管理局本局技術部魔法研究開発課だから

「長い名前だな」

本来の所属はあくまで技術部。元々訓練校をでて武装隊に一年ほど所属していたのだが、課長であるオリヴィアに引き抜かれ技術部に転属になつた。

元々機会いじりは好きだつたし、オリヴィアも親切丁寧に指導してくれた。それに加えアリシアにも色々教わったためデバイスマインスターの資格もわりとすんなりと取ることが出来た。

そして数年かかつて執務官の資格を取ると補佐官にアリシアを指名し、人手不足の地上部隊に出向になつた。そこでアリシアとリニスと共にチームを組んだのだ。

「あたしも万能に近いけど補助とか結界とかからつきしだからなあ

「俺は近接は出来ても遠距離は得意ではないからな」

俊也のようなオールラウンダーは珍しく重宝される。

俊也のチーム、ライトニングスターズが大きな功績をあげられたのは俊也の魔導士タイプによるところが大きい。攻めて良し、守つ

て良し、補助に回つても良し。苦手な距離が無く、弱点が見あたらぬ相手が敵にいるとかなりやつかいだ。

「お前を敵に回したらやつかいそつだな  
まあ俺が敵に回ることはないけどね」

笑い合つ。この短時間でこの一人ともかなりうち解けた。はやて血漫の家族はやはり眞心優しいみたいだ。

「お前の使い魔……リースだけか？ 早く目を覚ますといいけどな」

「デバイスの方も修復も大体終わっているみたいだ。お前も明日には体力が戻るだろう」

「うん……リースもレイハも大切な家族だから。俺も、魔力は戻つてきてるし完治も近いと思います」

万全な状態に戻つてから改めて今後の事を考えよつ。この先ずつとこの家にやつかいになるにしてもならないにしても、色々と問題が山積みだ。

リースとレイハと、よく話さなければ。

「あたしらの事はシグナムが帰つて来てからだな。管理局員のお前にはあたしらの事情に色々思うことがあるかもしれないけど」

「今の我らは主との平穏を望んでいる。それだけは誓つて本当だ」

二人の真剣な目に思わず息を呑み、そして頷いた。

「おまちどおさまや！ 我ながらめつちや美味くできたで！  
「少し遅くなつちゃいましたけどお昼ご飯にしましょつ」

はやての声で先ほどのはじめの真剣な空気が散した。

「もっと深い話は夜だな。今ははやてのギガつまな飯を食おう」

「うん、俺もお腹ペーぺーだよ」

テーブルに五人分の器が並べられ、シャマルとはやても席に着いた。

「いただきます」

「はい、召し上がり

手を合わせ、色々なものに感謝してから麺を啜る。

今まで関わった人達に。生き残った幸運に。身を挺して守ってくれたアリシアに。暖かく迎えてくれたはやてとその家族に。心からの感謝を。

「美味しい・・・・優しい味だ

「ほんまか？　おおきにな」

はやてが作ったにゅうめんはどいか懐かしい味がした。

## 感謝（後書き）

なのはは砲撃型だけ俊也は汎用独立型。戦闘タイプはクロノに近いです。

純粋な砲撃の撃ち合いではなのはにあります。

75部隊の一人は半オリキャラです。俊也世界の住人なので本編には絡んできませんが。

恋の娘（前書き）

色々とおつまみ造りですが、あくまで平行世界という事で。

## 母と娘

夢、夢を見ている。

懐かしい夢、幸せな夢。

私が生まれて初めて見たものは満面の少女の笑みでした。

『 あなたは、初めて。 今日から私があなたのママよ』

その少女こそ私の主。 そして姉であり、同時にお母さん。大切な記憶。いつまでも色あせることがなく、死してもなお記憶に残るであろう幼き母の笑顔。

『 お母さん……？』

『 そうよ。私がママ。これからよろしくね、リース』

『 リース？』

『 そうよ、リース。それがあなたの名前』

『 リース……私はリース』

母はいわゆる孤児院で過ごしている孤児でした。

三歳の頃に両親を亡くされてからずっと孤児院で過ごしてみると語ってくれました。

そんな母に私は生み出されました。

少し勝気で、けれども面倒見がいい。頭が良く、読書が日課で…

…とっても悪戯好き。そんな人が私の母。

母と共に駆け回り、お腹いっぱい食べて、ぐっすりと寝て、時々悪戯をしたり、勉強したり。共に笑い、泣き、喜びも悲しみも分かち合い……幼少時代は本当に恵まれていました。

転機はいつ頃だったでしょうか……そう、確か私が生まれて丁度十年。私の外見は既に成人女性のそれと大差なく、母も少女から大人の女性へと徐々に成長していたそんな時でした。  
母の魔力は極めて高く、さらに魔法技術も一流。簡単に言つと天才でした。

孤児院から学校に通い、飛び級を重ね最高学府を首席で卒業。そしてある論文が管理局技術部の目にとまり、局員扱いの外部協力者という待遇で管理局に迎えられました。

この事に園長や孤児院の沢山の兄弟達はとても喜んでくれて、笑顔で送り出してくれました。兄弟達との別れに私も母も涙したもののです。

新しい生活に母は生き生きとしていました。かくいう私も新生活はとても楽しく充実した日々でした。

母は技術部に所属してから完全に才能を開花させたよう……生体義肢の研究、デバイスの容量の増加、演算の高速化、ベルカ式カーボリッジシステムの最適化、ロストロギアの解析等、その他にも数多くの功績を残しました。

それと並行して魔法の研究も進んで行い、数多くの魔法を習得しついには大魔導士と呼ばれるようになりました。あくまで技術者でありながらもランクは条件付きとはいえ破格のSSS。模擬戦で難ぎ払われた武装隊は恐怖を込めて『雷の女帝』と呼び、その大層な二つ名に頭を抱えていたのを覚えてています。

私は母の助手を勤めながら同時に体術や魔法を学びました。これは母を守る力を付けることが目的……というのは建前で、実際に強くなつていくことが楽しかったからだつたりすることが本音です。

同じ猫の使い魔ということで意気投合したリーゼロッテとリーゼアリアの姉妹がよくしてくれて、他にもベルカの古武術家にも稽古をみてもらい、私自身空戦Jというかなり上のランクに認定されました。

母が天才なため、必然的に生み出された使い魔である私も優秀であつたらしく、母と同じ雷変換のレアスキルの評価も高かつたみたいです。

リーゼ姉妹と共に管理局最強の使い魔とも呼ばれました。照れてしまいますが、嬉しかったのは本当です。

時が経ち母も部下を持つようになり、私はいつの間にか母のことを探して呼ぶようになりました。技術部に所属して五年、母は今や技術主任。あくまで外部協力者という形でありながら重要なポストを用意されている・・・・母はそれだけ手放したくない人材という事でしょう。

外見年齢は早い段階で母を追い抜いた私ですが、母が私の外見年齢を完全に追い越した頃一度目の転機が訪れました。

女性としての幸せを手に入れたのです。

才女で高嶺の花という認識が強く、人気はあるものの男性からの声が全然かからなかつた母。

研究三昧という寂しい青春時代を過ごしていたのですが、ようやく春が訪れました。

お相手はデュアリスというスクライアの青年。綺麗な金髪に紅い瞳をした優しい人でした。

母より一つ年下で、魔法の資質はあまり良くなく、どうしても母と並ぶと見劣りしてしまつ……そんな人。

しかし、母を思う気持ちは誰にも負けていなかつた。何度もアタックを繰り返し、ようやくデートに誘えた時は嬉しそうに私に報告にきました。

デュアリスは中性的な顔立ちで、背も高くスラッシュとしていてモテル体型。簡単に言えば大層なイケメンです。そんな彼にお誘いを受けたプレシアは慌ただしく化粧品やら服やら買い揃えていました。

忘れていた青春を謳歌している母はどこか恥ずかしそうでいて、それでも幸せそうで……私の知らない笑顔で彼と共に歩き続けました。彼なら母を任せられると砂糖を吐きながら思つたのも懐かしい思い出です。

彼と出会つてから三年で入籍。私の胃が壊れそうなほどにしゃついて、結婚一年目で待望の子供が生まれました。

二人の愛の結晶、アリシア。

どちらかといえばお父さん似の、大変可愛らしい子供……。

生まれたばかりの彼女を抱いた時は不覚にも涙が溢れて止まりませんでした。

私にとつてもアリシアは娘同然。使い魔たるこの身は子を成す事が可能か分かりませんが……それでも、私もまたアリシアの母親であつたと自負しています。

母が注いでくれた以上の愛情を注ぎ、共に笑い共に泣き、一緒に時間を幸せに過ごしていった……。いつまでも幸せが続くと思つていました。

しかし、その思いも叶わない。

アリシアが四歳の頃、首都クラナガンでテロが発生。

テロリストは早急に捕縛されましたが、怪我人多数、死傷者多数の大惨事となりました。

陸の局員は最善を尽くしました。海や本局が難癖付けようと彼らは最善を尽くした。人員を際限なく吸い上げられ、少ない人材で本当によくやつてくれた。それは私も母も理解しています。

しかし、失つた人は帰つてこない。この怒りを、悲しみをどこにぶつけていいのか分からぬ。

この日、母は最愛の人を失いました。

この日を境に母は研究に入れ込み、家にいる時間が極端に減りました。

アリシアは聰い子だったので、理解して我慢していましたが……やはり寂しかつたのでしょう、今思えばあの頃の笑顔には影があったような気がします。

人員不足の解消、動ける魔導士がもつといたらあの人には助かつたかもしだれない。

そう言い、ある研究を進めました。

デバイスコアに人工的なリンカーコアを組み込み、非魔導士でも魔法を使えるようにする。この研究が完成すれば人員不足は解決され、涙を流す人が減る……。寝る間も惜しんで研究を重ねていきました。

管理局の全力のバックアップを受け、プロジェクトは進行。母のもと様々な技術者が集まり研究を重ねていきました。

研究を始めてから数年、アリシアも大きくなり母の助手を務めながら勉強に励む毎日。

長年の過労のせいでしょう、母が病に倒れたのは必然だったのかも知れません……。

新しく発見された管理外世界、そこから未知のウイルスが持ち込まれミッド中に病が広がりました。特に体の弱っている人や子供、お年寄りを中心に爆発的に広がり一時期パニックになりました。

一度発症してしまうと数時間おきに発作を繰り返すこの病気……幸いワクチンはすぐに作られましたが、母はもう手遅れでした。

症状を和らげる事は出来ますが、完治は難しい。この診断結果にアリシアと抱き合って泣きました。

この病で多くの人が亡くなり……名だたる管理局員も少なくない数が逝き、更に人手不足が深刻化しました。

プロジェクトは事実上凍結。あと一步という所で完成のめどはついたのに……抑えきれず悔し涙を流したことは決して忘れません。

その後アリシアと私は勉強を重ね、アリシアは「デバイスマイスター」としてそれなりに名が知られるようになりました。

母親ほど魔力が多くないアリシアは主に技術者兼のフルバックの魔導士として成長していき正式に局入りすると、執務官補佐の資格を取る研修として次元航行艦アースラ所属の執務官、クロノ執務官の補佐としてアースラに乗り込みました。

アリシアが補佐につく前にある事件を民間協力者の協力のもと解決していたみたいで、その事件経過を見るために再び現地に行くという事で私とアリシアは彼女に同行しました。

行先は第97管理外世界地球。

俊也と出会ったのは雪が降る十一月の頃。忘れられない思い出です。

そこである事件を俊也と共に解決して、私達は親交を深めました。甘えんばな俊也はとても可愛くて、アリシアは弟ができたみたいと喜んでました。

翌年春、正式に俊也が管理局に入局。母と俊也が合ったのは丁度その頃。

娘の次は息子が欲しかったと告白した母は俊也を自分の子供のように可愛がりました。

俊也はよく病室に通ってくれて、よく母の話し相手になってくれました。

一年経ち、俊也が技術部に転属になると母は自らの知識を俊也に教えて行きました。

さながら病室は講義室のようになり、俊也も熱心に話を聞き、理解し、少しずつ知識を吸収していきました。物覚えのいい俊也はとても優秀で、私やアリシアを驚かせました。

母は嬉しそうな顔で俊也に自らの知識を教え……思えば後継者を育てようとしていたのかもしれませんね。わりとすんなりとデバイスマイスターの資格を取った俊也をよく褒めていました。

そして俊也がデバイスマスイターの資格を取り一年半、とうとうその時がやってきました。

病室には母にゆかりのある人達。

孤児院の院長先生。

クライド提督。

クロノ執務官。

エイミィ・リミエッタ。

オリヴィア姫殿下。

レジアス中将。

グレアム提督。

リーゼ姉妹。

ユーノ。

俊也。

アリシア。

そして私。

『院長先生……わざわざありがとうございます』

『いいのよ……あなたは私の自慢の娘なのよ』

『クラайд提督、クロノ執務官、エイミィちゃん……アリシアの事、

よくみてあげて下さい』

『ああ……任せてくれ』

『アリシアは優秀ですから何も心配いりませんよ』

『クロノちゃんもやつ置いてこますから安心してください』

『オリヴィア……あなたは本当に立派になつたわ。これからも、俊也を良く見てあげてね』

『はい、先生。姉弟子として、上司として……つが、頑張つていきます……つ』

『中将、力及ばずプロジェクトは未だ完成していません。申し訳ありません』

『いいんだ、君はよくやつてくれた。想像以上の働きだった。君と共に仕事ができて誇りに思う。ゆっくりと休むといい。』

『グレアム提督とリーゼ達にはどれだけお世話になつたか……』

『いいんだよ。君にこそ色々助けられた。ありがとうございます』

『私は楽しかつたよ。出会えてよかったです』

『私も……絶対忘れないから、小さなリースのママ……』

『ユーノ、来てくれてありがとうございます。あなたなうい学者になれるわ。私が保証する』

『あ……ありがとう……』『やれこまゆ』

『俊也……あなたに教えられることは全部教えたわ。頑張つてね、あなたとオリヴィア、アリシアとリースがいれば大丈夫。私の研究は完成するわ』

『はい……』『お母さん』

『アリシア、駄目なお母さんで』『めんね？ 全然がまつてあげられなくて』

『「つづん！」 そんな事ない！ 母さんは……世界で一番、だか……』

『うー』

『リース』

『なんですかプレシア』

『あなたを生んで本当に良かった。あなたは私の誇りよ、私の可愛い最初の娘……』

『…………いや！ 田を開けて！ お母さん！ お母さん！ いやだ！ いやあ…………』

夢が覚める。

懐かしい夢。悲しい夢。

母との別離。

私を誇りと言ってくれた大好きなお母さん。

夢が覚める。

残酷な現実がやつてくる。

「アリシ……ア。しゅん……や」

「つ……ヒー」  
「ん？ どうした？」

現在ヴァイータとゲーム中。

はやては食料や俊也の衣服を買いにでかけ、シャマルはその付き添い。ザフィーラは荷物持ちだ。

ヴィータが留守番役で、暇だからと俊也と共に対戦格闘ゲームで遊んでいた。

「よし、またあたしの勝ちだな！」

「ああっ……ヴィータって地味に強いなあ」

ヴィータの操るレッドサイクロンが俊也の操るヨガマスターを投げてKOした。対戦を始めてから俊也は一度もヴィータに勝っていない。

「魔力が急激に持つて行かれた。リースが起きたのかも「お、なら見いくか。困惑してるともしんねーし、説明しねえとな

ゲームの電源を落とし、部屋を出て行く一人。

俊也より一日ばかり遅い目覚めだが、リースは確かに目を覚ました。

何よりつらい現実が彼女を待っている。

## 母と娘（後書き）

俊也世界のプレシアはいい人。超いい人。娘を亡くして狂つていませんから。

レジアス中将もいい人。超いい人。裏で犯罪者となんか繋がつていません。

アリシアの金髪は父親ゆずりと思つので、父親をねつ造してみました。

スクライア出身にしたのはテスター・ロッサ姓を残すため。ユーノもなのはとくつつけば高町家に婿養子ですよね？

守護騎士と使い魔（前書き）

デバイスは日本語でしゃべります。

## 守護騎士と使い魔

目に入ってきたのは感情的な光景だった。裸の女性がベッドで半身を起こし、呆然とした表情で両手を眺めている。

豊かな胸も綺麗な肌も、隠すことなく曝け出し、ただただ静かに絶望している。

リニスは目覚めてから時間をかけずに現状を理解した。さすがに俊也の身に起こった退行は予想できていなかつたが。

自分が愛娘に底われたことを。あの爆発に巻き込まれては無事では済まない事を、正しく理解してしまった。

「……」

俊也も、ヴィータも、無言で立ち尽くす。  
かける言葉が見つからない。それほどまでにリニスの絶望が二人に伝わってきた。

あまりに虚ろな目、生氣を欠いた表情。抜け殻という表現が当てはまるようなん……そんな姿。

俊也はリニスの弱い面をほとんど見たことが無い。プレシアが亡くなつた時に初めて彼女の涙を見たと言つて間違いではない。だが、今のリニスはプレシアが亡くなつた時よりも酷い。泣きわめいていた方がまだましと思えた。今の彼女は、感情の全てを無くしたかのようである。

「見てられない……」

耐えられず目をそらす。

俊也の知つてゐるリニースは……知的で優しく面倒見がいい、姉のような、母のような強い人。それが今は見る影もない。

俊也も立ち直つたわけではいが……リニースの受けた心的ショックは俊也の想像の遙か上を行つてゐるらしい。

もう泣くまいと決めたのに、リニースのあまりに弱い姿を見ると涙がこぼれそうになる。

ヴィータはリニースを見た瞬間にまずいと思った。

あの表情はまずい、全てに絶望して生きる気力を失つた人間のする表情だ。

長く戦場にいたヴィータは何度もあの表情を見てきた。

夫を失つた者、妻を失つた者、子を失つた者、親を、友人を、恋人を、大切な人を、物を、心の拠り所を失くし……全てに疲れ切つた人間のする空っぽな顔。

大抵は生きる屍のような酷い状態になつてしまつ。

戦乱の世ではそういうた者は真つ先に命を落とす。生きる気力が無いのだから、死を拒む力もなく、すんなりと自らの最期を受け入れる。……リニースは既に死人の表情をしていた。

何とかしなければいけない。だが、生きる希望を失つた者に希望を持たせるのは難しい。

大抵の人間はここで折れてそれでお終い。それはヴィータにとてもあまり後味のいいものではない。

【マスター……】  
「レイハ……！」

沈黙を打ち破つたのは俊也にとつては聞きなじみのある機械音。

「デバイス……治ったのか

俊也の相棒、インテリジェントデバイス・レイジングハート。自動修復の完了はリニースの目覚めとほぼ同時だつたらしい。

【状況が分かりかねます。マスターのお姿、隣の女性、この場所はどこなのか。……リニースの状態は良くありません】

疑問をぶつけるレイハだが、アリシアの話題は出さない。……レイハもまた、アリシアがどうなったのか……正しく理解しているみたいだ。

「詳しくは後で話すよ。この子はヴィータ。俺達が保護してもらっている人の……娘さん？」

「家族なのは確かだが、娘という表現が正しいかは分かりかねるな。……あたしの事は今はどうでもいいだろ、今はこの姉ちゃんの方が先決だ」

「レイハ……リニースの様子は？」

【すみません、私も先ほど再起動が完了したばかりですので……私が起動したときには既にリニースはこの状態でした】

おそらく田が覚めたリニースは人型に変身し、辺りの様子を窺つたのだろう。

そしてある残酷な現実に至つた。何度も何度も否定しだらう。俊也もそうしたが、現実は変わらない。逃避してもそこにある残酷な現実には何の変化も無い。

アリシアは死んだ。

この事実は揺るがないし覆らない。

「リニース……俺だよ、俊也だ。分かる？ お願いだからこ

つちを向いて・・・・・！」

俊也が語りかけるとリースは虚ろな目で、だがしつかりと俊也の方を向いた。

「・・・・・俊也？　ああ、懐かしい姿です。ふふ、やはり夢なのですかこれは。よかつた、悪夢でも覚めない夢は無い・・・・・・。この悪夢も終わりが来る。アリシアが居ないなんて、最上の悪夢です。早く目を覚まさないと」

それは逃避の言葉。

夢だと思いこむ事で心が壊れる事を防いでいるのか・・・・・・。しかし、逃げたところで現実は変わらない。

「リース・・・・・・・俺のこの姿はロストロギアのせいだよ」  
「・・・・・・・私達は、庇われたのですね」  
「うん、そしてこうして生き延びてる」

顔を歪ませ涙を流す。

俊也が生きていたことは嬉しい。子供の姿という予想外の状況だが、生きているだけ十分だと、生きていてくれてよかつたと思う。が、アリシアが居ない。

大事な大事な家族が欠けている。

「あ・・・・・・なんて事、アリシア・・・・・・。どうして？どうしてあの子が！？　どうして私は気がつけなかつたのです！なんて不様、何が最強の使い魔ですか！　主を、大切な娘を守れなかつた！　それどころか庇われて生き延びるなんて・・・・・・私が死ねばよかつた。何故こうして生きているのです？　俊也、教えて下さい・・・・・・おしえて・・・・・・」

手で顔を覆い、声を上げて泣く。

その姿にヴィータは顔を歪ませる。

あれはもしかしたら自分の姿かも知れない、と。

主を亡くし、しかもその原因が自分を庇つてとなると……。なるほど、あのような絶望に包まれた姿になるのも納得出来る。

自分を庇つたことが原因ではやてが死んだらヴィータは自分を決して許しはしないだろう。

泣きわめき、絶望にうちひしがれ、先ほどのリニースと同じような死人の表情を浮かべ、ゆっくりと機能を停止していくに違いない。リニースの絶望は理解できる。

だが、少し安堵もしていた。

(感情を表に出せるなら、まだ間に合つ……！)

親近感を感じた。

同じ主を持つ存在だからか、同情からくる感情なのは分からない。

しかし、彼女の主は自分を犠牲にしてまで使い魔を生き延びさせた。本来なら逆だ。そこまで彼女は思われている。そして、彼女の事を家族と言い土下座までしてみせる友がいる。

恵まれた使い魔だと思う。

最近の事情はよく知らないが、ヴィータの古い記憶では使い魔は人並みの扱いを受けてはいなかつた。道具として扱われ、半場奴隸のような立場だつたと記憶している。

全ての主従がそうであったとは言わないが、互いに信頼を寄せ合っている事、あまつさえ俊也のように家族と言い使い魔のために自身体を張る事は希有だった事は確かだ。

それはプログラム体であるヴォルケンリッターも然り。

盲目的に主に従うヴィータ達だが、扱いに不満が無いと言つたら

嘘になる。

道具、兵器として扱われて良い気持ちがするほど壊れてはいない。騎士の本領を發揮できる場が戦場であることに否定はないが、騎士道を重んじてくれる主が何人いたか・・・・・両手の指より多くはないだろう。

優しい人が一人もいなかつたわけじゃない。歴代の主やその周囲の人間が皆悪人だったわけではない。しかし、良い記憶と悪い記憶、どちらが多いと尋ねられれば後者と答えるだろう。

両の手は血がこびりつき取れはしない。

だが、優しいはやての元に居る限り血を塗り重ねる事はないだろう。

はやはヴィータ達に希望を与えてくれた。家族と過ごす日常という奇跡。

幸せを噛みしめている。これほどまでに優しい時間を、ウォルケンリッターは知らなかつた。

この幸せと同じ幸せを感じていたある「ニース」。しかし、彼女の幸せは壊れた。

(他人に思えねえ・・・・・どうにかして、助けてやりたい・・・  
・・・・・)

あそこにはE.Fの自分が。

はやてを亡くしたら、今のリニスのようになるか暴走してしまうだろう。

助けてやりたい。ヴィータだけではなく、シグナム、シャマル、ザフィーラも同じ意見だろう。

絶望するにはまだ早い。リニスには思つてくれる友が居る。一人ではない。

「おい、あんた」

「…………」

ヴィータの言葉に返答はない。ただただ手で顔を覆い、嗚咽をもらす。

しかし、ヴィータは諦めず言葉をかけ続ける。

「あたしは、ヴィータ、お前等を保護してゐる主の家族だ」

近づき手を握る。

リニースは涙で濡れた顔でヴィータを見る。

綺麗な顔をしている。顔立ちはなんとなくだがはやてに似ていると感じた。はやてが大人の女性に成長したらリニースのようになるかもしれない。ますます他人に思えない。是が非でも助けたい。助けれる命があるのなら手を差し伸べる。奪う事ばかりだった人生だ。たまには救う事があつてもいい。

「あたしは、ヴォルケンリッターが鉄槌の騎士、闇の書の守護騎士プログラマ。人間じゃねえし厳密に言うと生命体ですら無いのかもしない」

その言葉に驚く二人。

俊也は何かしらの魔導生命体とは思っていたが、プログラムとは予想できなかつた。

「あたしには主がいる。こんな人間でもないあたし達にとても優しい。あたしはそんな主が大好きだ。だからあんたが主を亡くしたその心の痛み、理解できるんだ。もし主が死んだと思うとぞつとする。だけど、主はあんたを守つたんだろ？ だったら死んだ方がよかつたなんて言つもんじやねえよ。主の気持ちを無駄にしちゃいけねえ。

・・・・・ なあ、あたしはあんたが他人に思えないんだ、だから  
生きていて欲しいと思う。初対面で大層なこと言つたけど、どうか  
死んだ方がよかつたなんて言わないでくれ

ヴィータの言葉を受け、更に涙を流すリニス。

「リニス…………死んじゃ嫌だよ？ 僕を一人にしないで……  
・・・」  
「うひ…………しゅん…………や…………。うひ…………  
・・・あ」

俊也とヴィータを抱き寄せ、ぎゅっと力を込める。

歯を食いしばり、嗚咽を漏らさないようしながら涙を流し続ける

リニス。

ヴィータは安堵した。

この様子なら時間はかかるだろ？ けど立ち直れる。救えたのだ、  
ヴィータの言葉がリニスを救つた。

「アリシア…………私の可愛い娘…………ごめん、ごめ  
んなさい。『めんなさい…………』

きつと一生後悔し続けるだろ？

しかし、彼女はきっと命を無駄にはしない。死ぬなんて言葉は口  
に出さないだろ。

アリシアの分まで生きなければいけない。  
リニスは既に死人の顔をしていなかつた。

## 今後

「契約内容はずっと俺のそばにいる事。姿を消す事は許さないし、死ぬなんてもつてのほか」

「契約内容了解しました。決してあなたのそばを離れません。俊也

……マスター、私達は永遠に一緒にです」

「リリカル・マジカル 契約完了」

何とか泣きやみ、生きる気力を取り戻したりニース。シャマルの服を借りたりニースと俊也は手をつなぎ、契約を結びなおした。

ミッド式の魔法陣が展開し、俊也の魔力がリニースに流れ込む。仮契約の時も結構な量が持つて行かれたが、本契約になると更に多くの魔力が流れしていく。

「確かに魔力のラインを確認しました。さすがに上質な魔力です。プレシアにひけをとりません」

「……さすがリーゼ姉妹と一緒に最強に数えられるだけあるね。結構しんどい……アリシアはこんなに魔力を持つていかれてたのか」

「アリシアは俊也とプレシアに比べれば魔力量は少なかつたですから……」

魔導士として俊也やプレシアが規格外なだけで、アリシアは一般的な魔導士レベルの魔力は持っている。

規格外に生み出されたものもまた規格外であつただけの事。強大な力を持つが故存在の維持に大きな魔力を必要とする。一般的な魔導士が維持するにはかなりしんどい。アリシアは普段から結構無茶をしていた事になる。

「無事に終わったみたいだな。ほら、温かいミルクだ。飲んだら落ち着くだろ」

「ありがとうございます」

「ありがとうヴィータ」

ヴィータからホットミルクを受け取る。

ヴィータはかなり好意的だ。ホットミルクを渡すなどとこいつ小さな気配りにも助けられている。

実際、彼女がいなければリニスの心は死んでいたままだったかもしない。この小さな女の子は命の恩人だ。

「中々いい光景を見せてもらつた。私達の立場からしてみると俊也

とリニスの関係はとても好ましいな」

「だな。使い魔に優しい主人は珍しかったからな」

この部屋にはヴィータの他にシグナムがいる。

道場での指導を終え、帰宅した時管は四時くらい。ちなみに昼食ははやて特製のお弁当を頂いた。

泣くりニスにつられて、ヴィータも泣きだしてしまい、ヴィータが泣きだした事で我慢の限界に達した俊也も泣いてしまった。

結果、ベッドの上に抱き合つて泣く三人がいるという（そのうち一人は全裸）カオスな部屋に踏み込んだシグナムはしばらく固まつた。

「さて、まだ本調子でないところ悪いが丁度いい機会だ、今後の事を話し合おう」

シグナムとリニスは一通り自己紹介も済ませている。ちなみにリニスにシャマルの服を貸したのはシグナムだ。

簡単な自己紹介を済ませた後、シグナムははやてにリニスが起き

た事を連絡し、ヴィータはホットミルクを作りに行き今に至る。

【まずは現状の確認です。】「は海鳴市、私達から見て八年前の世界】

「新聞で確認したし、テレビも見た。信じられないけど事実だよ」「私も確認しました。にわかには信じられませんけど……」

レイハが進行役を務め俊也達とヴォルケンリッターの話し合いが始まつた。

俊也とリースがベッドに腰掛け、対面に椅子を持ち込んだシグナムとヴィータがいる。その間に待機状態のレイハがふよふよと浮かんでいる形で話し合いは進む。

【当面の問題は……】

「まず第一に衣食住だね。ある意味次元漂流者である俺とリースはどこも頼れない」

「そしてその問題は主はやてがお前たちを保護すると明言している。私達は悪意のないお前たちをどうにかしようとは思わない」

「つまり衣食住の問題は解決してるわけだな」

まず問題一つ問題が解決した。小学生の少女の紐だが背に腹は代えられない。リースはなんとかしてバイトはできるだろうからまたおこおい考える事になるだろう。

「その前に一ついいか？ 私はヴィータ達と違いまだお前たちの事をよく知らない。簡単にだが説明してくれないか？」

「ああシグナムさんには説明する機会がなかつたですね」

そういう言い次の問題に移る前に自身の事を簡単に説明することにした。

今回までは一スモレイハも田覚めているのよつ詳しへ説明できるだ  
らう。

「まづは……レイハ」

【はい、表示します】

レイハが表示させたのはミッドでの身分証や資格の類。それなりの数シグナムとヴィータの前に映しだした。

「管理局のID・・・・・うん、やっぱこか女っぽいけど男だ  
な。今じゃどう見ても女なんだけど」

ヴィータはIDの顔写真を見て感想を言つ。

IDの写真は十七歳の時のもの。童顔で確かに女の子っぽい顔立ちだがちゃんと少年に見える。現在の九歳の顔は・・・・・残念だが女の子にしか見えない。

「やはり優秀なのだな。見慣れないものもいくつあるが・・・・・

・

管理局のID、執務官、A級デバイスマスター、メカニックマイスター（生体義肢）、医務官（生体義肢）、小隊指揮、無限書庫司書。

多くの資格を有している俊也。シグナムが優秀と言つたが、その評価は間違いではない。俊也は多才だ。プレシアクラスと比べればどうしても劣つてしまふが、十分秀才と言つて言いレベルだ。現在は執務官として出向しているため前線での戦闘が主になるが、本来俊也は技術官よりの局員だ。執務官の資格を有しててるが、出向するまでは執務官の役職にはついておらず前線から離れてそれなりに年月も経っていた。それでも修練はかかさず行つていたので執務

官の役職についても何も支障はなかつたが。総合ランクは伊達じやない。一般的な武装隊員と比べると頭一つ飛び出た強さを有している。

技術官でありながら一般武装隊を凌駕する戦闘力を持つ俊也。

『さすが『雷の女帝』の弟子、『歩く理不尽』の弟弟子だけのことはある。どこかおかしい』

などと武装隊員によく言われたものだ。

管理外世界出身でありながら戦闘では一般武装隊員を凌駕し魔導士ランクはS。技術面では最高レベルの頭脳を持つプレシアとその弟子であるオリヴィアに技術を叩き込まれ、年少ながらA級デバイスマスターの資格を有し、局全体でもかなり希少な生体義肢を扱える資格も取つた。

戦闘とメカニックの技術は抜きんでており、それに加えて容姿もよかつた。管理局が広告看板にしようとするのも頷ける。実際雑誌の表紙やインタビューなどの効果は大きく、本人達は知らない事実だがアイドルとしてプロデュースするという話が実際にあった。

「生体義肢つていうのは何なんだ？ 聞いた事ないけど」

「生体義肢つていうのは簡単にいえばすごく高レベルな義手の事ですよ。機械で基礎フレーム……手の骨格なんかを作るんだ」

「へえ……最近はそんな事もできるのか」

「人工骨格に人工筋肉や血管などを用いて本物と変わらないような高度な義肢を生体義肢つて言つんだ。神経も繋げてるから痛覚もあるし怪我をすれば血だつて出る。デザイアつていう博士が完成させた技術だよ」

あらかた説明を終え、本題に戻る。

まだまだ問題は山積みだ。

【では、今後の私達について決まったことを纏めます】

話し合いによって決まった事。

まず第一に八神家に敵対しない事、はやてを裏切らない事。

管理局に連絡はしない。また、存在を知られないように行動する事。

この時代の俊也達、知り合いと出会わないように細心の注意を払う事。

「今あげた事は絶対条件ですね。私も俊也もあなた方を裏切る事は無いと誓います」

「結構辛いけど、はやて達と過ごすなら寂しくはないよ」

俊也は既にこの家族に不信感は無い。むしろ信頼している。

優しい家主の少女にその少女を心から慕う家族。絶望に覆われていた心が晴れるほどにここは温かい。

【そして目的……】

「過去に来たのなら未来は変えられる」

「私達がここにいる。未来を知る私達がここにいる。……この時代の私達を、私達と同じような悲劇を味あわせない……！」

アリシアを死なせない。  
アリサを死なせない。

どうにかして介入して最良の結末に導く。悲劇を見るのは自分たちだけで十分だ。悲しい思いをするのは自分たちだけでいい。

「そして、研究を完成させる。ここにはこの時代から見て八年進んだ研究データがある。何とかして完成させたい……」

「その研究とやらは何なんだ?」

「研究データ。あと一歩という所でプレシアが倒れたために事実上凍結となつたプロジェクトのデータだ。」

プロジェクトが凍結されてもオリヴィアやリニース、アリシアと俊也が纏めていたためプレシアが倒れた時よりも完成には近付いている。その研究データがレイハの中に記録されている。

「この研究データはプレシア母さんの悲願。魔導士不足を解決することが目的で発足されたんだ。リンクーコアを持たない人でも魔法が使えるようにする事が最終目的」

「デバイス自体に疑似リンクーコアを取り付けて魔力精製させる事が一番手っ取り早いです。色々案はあるのですが……実用までには至つていません。私と俊也は技術的に八年先にいます。怪我の功名といえばいいのか……たつぱりと時間ができたので、少しでも完成に近づけるように努力します」

フレシアの悲願。フレシアをバックアップし全面協力してくれたレジアス中将の悲願。

研究に関わつたりニス、アリシア、オリヴィア、シャーリー、マリー、俊也の悲願。

「……実用化されれば素晴らしい成果を得られるだろうな。争いごとや犯罪も減るだろ?」

シグナムの言つ通り万年の人手不足が解決すれば犯罪は一気に減るだろ？

救助隊などにも多くの人員が割かれ、救われる命もずっと増えるはず。テロによって夫を失ったプレシアの思いが込められたプロジェクト。あと一步、ほんの少しで完成する。

理論はほぼ完ぺきだ。疑似リンク・コアになり得る物質が見つかればすぐに実用化できる。

「戦いしか能がないあたしが言つのもアレだけど、争いが減るのはいいことだ。……血なまぐさいのは正直もうこりこりだよ。そうだ、そのプロジェクトの名前は何ていうんだ？」

「発案者、フレシア母さんの思いがこもったプロジェクト名だよ」

傷つき涙を流す人が減るように、自分のように大切な人を失くす人が少しでも減るように。

理不尽な運命から一人でも多くの人を救えるように、理不尽な運命に嘆く事が無いように。

その悲しい運命を変えてしまえるように そういう思いを込めてつけられた名前。

「プロジェクトFATEっていうんだ」

## 今後（後書き）

アリサは俊也世界では既に亡くなっています。シャリオとマリエルの年齢設定が異なります。シャリオは俊也の四つ上でマリエルが二つ下です。

デザイア博士とはもちろんあの人の事です。

## 幸せ

「リース～サラダの盛りつけお願ひな  
「わかりました。任せて下さい、はやて」

俊也とリースがハ神家に保護されてから一月ほど経つ。  
十月も終わりに近づき、最近は段々と肌寒くなってきた。  
リースとはやての顔合わせは問題なく終わった。ザフィーラの件  
があつたので人の姿にそれほど驚かなく、終始笑顔で自己紹介など  
を済ませた。

それぞれの第一印象は。

リース曰くはやは『しつかりした子供』  
はやて曰くリースは『えらいべっぴんさん。あといにおっぱい』

後日聞いたらそのような感想が返ってきた。  
その頃はもうほとんど家族の一員のようなものだったので、はや  
ても遠慮はしていない。

家族に遠慮するのは可笑しいので、はやての態度は嬉しいのだが、  
胸を揉みしだくのはやめてほしいとリースは言っていた。

別に嫌なわけではないが恥ずかしいとの事。

リースはちょっとした恐怖の対象だったので、こうしたスキンシ  
ップをとつてくる者はあまりいなく免疫がないらしい。

はやての生い立ち等を聞いたときは眉間に皺を寄せたリースだが、  
今のところ何の問題もなく仲良くやつていている。

はやは基本家にいる。行動範囲は家に病院に図書館、近所のス  
ーパーとあまり遠出はしない。はやてが外出する時は家族の誰かが  
付き添うので、この時代の俊也が居そうな場所を避けるようにお願

いしてある。今のところこの時代の俊也に鉢合はせはしていない。

俊也も子供の時車椅子の女の子と合った記憶はないので、このまま行けば案外大丈夫な気がする。

問題も何もなく、俊也とリースは日々にゅっくりとした時間を過ごすことができている。

戦闘も無く、デスクワークも無い。毎日はやてと遊び、勉強を教え、趣味も兼ねたデバイスの研究をする。ここ数年でこんなに心落ち着いた日々は無いというほど、優しい時間を過ごしている。

そして時々ふと思うのだ。管理局員になつて自分は何がしたかったのだろうか、と。

天才だと言われた。ユーノに、クロノに、クライド提督に。魔法との出会いは偶然。たまたまその力があり、助けを求めるユーノに応える事ができた。

当時九歳にして魔力ランクAAA、魔導士ランク推定空戦AA。入局しそれなりの事情が分かる今になつて考えると自分がいかに異常だったのかわかる。

嘱託から正式に局入りして武装隊に配属された時は空戦AAA+。十歳にしてエースクラスの力を持つ・・・・・それも管理外世界の人間が、だ。

珍しさもあつただろう、周りから可愛がられて・・・・実際に自分の力が役に立つことが嬉しかった。

思えばここからか、子供っぽさが抜け出したのは・・・・。

時空管理局所属、いわば軍属。ミッドでは低年齢での就職は珍しくはないが、日本では考えられない。自覚は無かつたが、どんどん年相応の姿からかけ離れていつたと思う。

自分の力が人助けになる事が嬉しかった。

御神の剣の才能はなかった。それがたまらなく悔しくて、悲しくて・・・・・兄と姉とは別の力が、才能があることがわかつた時

はそれはそれは喜んだ。

学校が終われば魔法の練習。休みの日はシンドヘードへ。要請がかかれば授業中でもシンドヘドへと跳んだ。

みんなと接する時間はどんどん減つていった。今になつて振り返ると母は寂しそうな顔をしていたように思える。

管理局に入つて何がしたかったのか。今ではプロジェクトの完成とこう確固たる目的があるが、オリヴィア姫殿下に引き抜かれるまでは只単に周りに流れていただけのようだ・・・・いや、実際そうだったのだろう。

今までの人生を否定する気はないが・・・・今のこのんびりとした時間を過ごすとどうしても思つてしまつ。

管理局に入らずに過ごすTFの自分。

優しい母、兄、姉と大好きな友人達と過ごす日常。

その場合はどんな将来を目指していただろう。翠屋の二代目だろうか？姉が嫁に出てしまえば必然的に継ぐことになるだろう・・・

・・・・それも悪くない。

「俊也君、どないしたん難しい顔して」

「ああはやて・・・・ちよつと考え方をね」

テーブルに料理が並べられていく。

メインははやて特性のハンバーグ。俊也の隣ではヴィータが目を輝かせている。

「将来・・・・はやはて将来の夢とかある？」

「ん~夢かあ」

はやても席に着く。料理はシャマルとリースが分担して運んでくれている。

「せやね、お料理は好きやし得意やからひつとしたレストランや

定食屋みたいな事できたら樂しいやうつなあ」

「はやてに料理は絶品だから繁盛間違いなしだね」

「あはは、あんま褒めんでよ照れるわあ。でも、夢は夢や。こんな足やしまともな職につくのはあきらめとるしな。どしたん急に？」

はやての少々自虐の入った返答に冷や汗をかきながらも笑つ。

「いや、俺の実家は喫茶店なんだけど・・・・・・管理局に入局せずにはいたら実家を継いでいたのかなって」

「喫茶店か、初耳や。だからお菓子の類を作るのが上手かつたんやね」

小さい頃からある程度母から教えて貰つていたのでひつとした菓子類を作るのは得意だ。

クッキーやマフィン、頑張ればケーキだって作れる。以前みんなに振る舞つたチョコレートのマフィンはとても好評だった。

「うん、ええな喫茶店。せやね・・・・・・お昼は普通にお菓子や軽食、夜はファミレスが出すような料理を出すような店ばんじやろ？ 夜に限つてはお酒も出したりしてな」

「お、なんか良い感じのアイデアだね」

「せやろ？ 昼は俊也君にまかせて夜は私の出番つてわけや！」

「二人で喫茶店やつてる設定になつちやつてるよ」

「ええやん、可愛い主人に美人の奥さんつて評判になるで

「はは、それ俺と結婚しちゃつてるよ」

「せやね、あはははは！」

何氣ない話で盛り上がる。

はやてと切り盛りする喫茶店・・・・・きつと楽しいだらう。

お菓子作りと紅茶には多少心得がある。お客様に提供できるレベルだと自負している。まだまだ母には遠く及ばない腕前だが。

はやは料理の才能がある。本当に美味しくどこかほっとする味はお客様も満足するレベルだ。実際に下手な飲食店で食べるよりずっと美味しい。教えればお菓子も直ぐに美味しいものを作れるだろうし、紅茶やコーヒーも同様だろう。九歳にしてはずば抜けた料理スキルだ。実際に経験してみたら上手いくのではないだろうか？

「・・・・・結婚かあ」

急に真顔になりぱつりと呟く。その真剣な表情にドキリとした。

「なあ俊也君、結婚は女の幸せやいうけどほんまやうか？」

いつになく真剣な表情。無邪気な子供の表情も、女性陣の胸を揉みしだく時の邪な表情もしていない。初めて見る真剣だけどどこか寂しげな表情。

「私は足にハンデもつとるし、学校にも行けてへん。友達かつて一人もおらへんかった。いつも独りぼっち。病院に行つて、図書館で本を借りて一人で読んで、お腹が空いたら自分でご飯を作つて一人で頂きますと」馳走様。ずっとそんな生活やつた

「・・・・・」

はやはの独白を静かに聞く。口は挟めない。

「正直な、寂しかった。一人の『飯は味氣ないし、一人でゲームをするのも飽きた。本を読むのは好きやけど、やっぱり一人は寂しかった。うん、私はね、ずっと寂しかったんや。」

せやから、今はめっちゃ幸せなんよ。家族がいる、友達もできた。家に帰つたら『おかえり』って声が聞こえる。私が作つたご飯を一緒に食べてくれる人がいる。一緒にゲームをする人がいる。みんなに優しい。・・・・・私は今までの人生の中で一番の幸せを噛みしめとる

独白は続く。

「正直言つと、結婚できるとは思つてない。石田先生は頑張つてくれとるけど『足は治りそうもないし・・・・・こんなハンデ抱えたる女貰つてくれる人なんておらへんやろ』しね。でもな、結婚なんかできなくていいんや。今の時間がずっと続けばそれで満足や！」

大切な家族と、シグナム、シャマル、ヴィータ、ザファイーラと一緒に過ごすこの家には、今は大切な友達・・・・・俊也君にリースがある。私一人だけやつたこの家に今は七人もあるんや。もう毎日楽しくて楽しくてしゃあない。女の幸せを一生知ることが無くても私は満足や！」

そういう切ると寂しそうな表情とは打つて変わり幸せそうに顔を綻ばせる。

「せやからな、ずっと友達でおつてな、俊也君・・・・・・

俊也の手をそつと手を握り微笑むはやで。

対する俊也は絶句していた。

そしてはやての温もりをもつと感じじられるよつと元氣元気と手を握り替えした。

そしてそれははやての話を聞いていたヴィータも同様。

ヴィータははやての足を治すことの出来ない自分の不甲斐なさに奥歯が碎けるほどきつくな歯を噛みしめた。

(大人びては思つたけど、これは早熟とかいうレベルじゃない。達觀すぎる)

子供らしくなかつた。

いや、子供だつたら環境に耐えられなかつたのか。急にでも大人にならなければ寂しさに耐えられなかつたのか……。  
ならば原因是大人にある。はやてが子供らしさを失つたのはこのありえない環境を作り出し放置した大人のせいだ。

(保護者……確か、『グレアムおじさん』)

送金は確認した。通帳には毎月大金が振り込まれている。  
しかし、金は送つっていてもはやてに一人暮らしをさせるのはありえない。はやてが一人だつたのは何かしら意味があつたはずなのだ。

(グレアム……ただの偶然?)

俊也の頭の中には管理局でお世話になつた上官の顔が思い浮かぶ。

「俊也君……あのな、最初に握つたのは私なんやけど……ちょっとはずかしいわ」  
「あ……ごめん」

あわてて手を離す。

照れているのか顔を紅めるはやは謙遜なしに可愛い。思わず見惚れてしまうくらいに。

「まあこざといつ時には俊也君に貢つてもいいから心配ないかな?」

「……うん、はやってだったら俺も大歓迎だよ」

「おっ? これはアレやで幼馴染ルートでよくある『子供の頃に将来を誓い合つた』つていうフラグや!」

「……そんなの良く知ってるね」

「ゲームは色々手え出したからなあ。RPGにマスゲー、育成、パズル、サウンドノベル……もちろんギャルゲーもや!」

声を上げて笑うはやてを見て苦笑する。

今日ははやてのまた違つた一面を見る事ができた。

(寂しがり屋か。案外、似たもの同士なのかもしれないな……)

しかし俊也とはやてでは環境が違う。

俊也は寂しいと訴えかけるかこができる家族がいた。はやてには訴えかける家族すらいなかつた。寂しさの度合いでははやての方がずっと大きい。

(だから、せめてこれからは……)

これからははやてが寂しい思いをしなによつて、やぱこいつといと、そう思つた。

寂しげな表情は似合わない。

向日葵のような笑顔こそあの愛らしさに少女にはよく似合つ。もつとはやての笑顔が見たい。この感情が何なのかは良く分からぬ。

だけど、これだけは確実だ。

高町俊也は八神はやての笑顔が大好きなのだ。

**幸せ（後書き）**

ヒロマツはまだやつてあります。

最初の出会い？ せやな、正直相当インパクトのある出会いいかたやたつたな。

その時俊君は気絶しどったから、私が一方的に知つとつたつていうのが正確やな。

一緒にお風呂に入つとつたヴィータが険しい顔したかと思つたらすぐにお風呂上がろう言つたんや。

私は結構長湯する方やから、正直まだ入つときたかつたんやけど、しゃあないから上がつたんよ。そしてリビングまで行くとビックリや！ ザフィーラが猫咥えどるのは百歩譲つてええとつして問題はシグナムや。血まみれの子供を抱えとつたんやから驚くなと言う方が無理や。

正直めつちやてんぱつたなあ。救急車？ 警察？ 殺人事件なんか！？ 黒の組織の仕業なんか！？ とパニくつてたわ。後から俊君がコナ 君状態やつたとわかつて心の中で吹き出したのも懐かしいわ。

え？ コナ 君つて何かつて？ そりが、ミッドでは知られてないし知つてないのは当たり前やね。ちょっと口すべらしてもうたわ、コン君の事は忘れてや。

話を戻すで？ 俊君は血まみれやつたけど怪我はして無くてな、とりあえず安心しろ言われてどうにか落ち着きを取り戻したんや。

私たちがリビングに集まつるとタイミング良くシャマルが買い物から帰つてきてな、俊君とザフィーラが咥えてた猫・・・・・・まあリニースの事なんやけど、二人を見て貰う事にした。知つての通りシャマルは治癒のエキスパートやからな。当時の私は魔法の知識もなかつたし、ただ心配して眺める事しかできんかった。

ん？ 魔法の知識が無い事が不思議か？ 前になのはちゃんが言つてたと思うけどやな、私もなのはちゃんも魔法に出会つたのは偶然やからな。出身は知つての通り地球やし。流石に子供の頃からランクSSSなんて馬鹿げた事はないよ。当時の私は只の九歳の女の子やつたからな。

シャマルが言つのは氣絶しているだけらしく、一安心した私は俊君をベッドに寝かすこととした。小さい頃住んでた家は無駄に広くてな、使つてない客間もあつたから丁度よかつた。

ベッドに寝かしてまず体を拭いてあげよう思つてな、なんせ血まみれや。気持ち悪いやろうしちょと血が怖かつたしな。

シャマルが洗面器にお湯を入れて持つてきて・・・・体を拭いつと身に纏つていた布きれを取つたときや、私に衝撃が走つたのは。

ここで当時の俊君の容姿を説明しとくね。

そりやあもうなのはちゃんそつくりでな、相当可愛らしい顔しつた。ショートカットのなのはちゃんを想像してみて？ そんで、なのはちゃんは垂れ目やけど俊君はちょと釣り目気味で・・・・まあそんな容姿や、女の子にしか見えへんかった。

身長は私より小さくて、手もちつちゃくて・・・・なんて言えぱいいのかな？ 保護欲というか・・・・いや、今考えると母性本能か？ ともかく、いつ、心を驚づかみされるような子供やつた。将来は間違いなく美人さんになると確信できるやつやつた。男の子なんやけどね。

ん？ そうやね、今でも中性的で綺麗な顔立ちしとるもんね、俊君は。本人はちょっと気にしとるみたいやけど。

そんでや、当然私も女の子やと思つた。それも普通の女の子やない美少女や。

子供の頃の私は足が不自由でな、交友関係はほぼ無いも同然で、

友達もおらんかつたし、人と喋ることもあんまなかつた。

あ、そんな顔せんでええつて、昔の話や、気にしてへんよ。

そんな私の前に現れた美少女、正直ドキドキしたわ。

起きたら何話そつかとか、もしかしたら友達になつてくれるかなとか思いながらシャマルの作業を見守つてた。

まず上半身が露わになつた。当然やけど、胸なんて無いな。まあその頃は私も無かつたけどな。せやから何も疑いも持たんかつた。シャマルは丁寧に体を拭いて、次に下半身の布きれを取つた時にそれが目に飛び込んできた。

思わず叫んだわ、いやあほんまあん時はビックリしたんやで？  
ついてたんや。なんや、何がかつて？

さて、ここで問題です。女性の象徴とはなんでしょう？

恥ずかしがらんと言つてみいや・・・・はい、スバル正解。  
女性の象徴とはすばり『おっぱい』や。む、なんや赤い顔して。は  
あ、みんな初心やなあ可愛らしい。

それなら男性の象徴とは何でしょ？

ふふ・・・・押し黙るんやないよ赤い顔して。エリオの股に  
ぶらさがつとるもんや。

なんや、みんなほんまに初心なんやな。この程度で恥ずかしがつ  
とつたらこの先身が持たへんよ？ ん？ 私は恥ずかしくないかつ  
て？ 私は乙女やなくて大人の女やからな。恥ずかしくもなんとも  
ないよ。

ああまた話が脱線してもうた。

今は恥ずかしくも何ともないけど、九歳の私にはなかなかに刺激  
が強くてな、相当混乱したわ。

女の子と思つていたら男の子やつた、そんでもつて男のモノを初  
めて見た。そりやあもうてんぱつたよ。

考えてみいや？ なのはちゃんとおんちんがくつことじるや。

もうわけがわからんかったね、ほんま。

そこで男の子やつたつて気づいて慌てて目をそらしたんや。

中々衝撃的な出会いやろ？ 忘れられへんわ。もつとも、この時点で俊君はまだ目を覚ましてないんやけどな。

俊君が目を覚ましたのはそれから四時間くらい経つてからやつたな。私はその間心配で離れることができんはずと部屋におつた。目え覚ましてからちよつとした自己紹介してすぐに寝たけどな。

そんで、次の日や。何故か早く目が覚めた私は俊君の様子を見に部屋に行つたんよ。昨日と違つて安らかな寝顔しどた。まさに天使のような顔やつた。ドキドキしつぱなしやつたよ。

ずっと部屋におつてもしゃあないし、私達の朝ご飯とは別に俊君用に消化のいいもん作つてな、朝ご飯を頂いてからまた俊君の部屋行つて寝顔眺めてた。

俊君が目え覚まして、私のご飯を美味しい言つて食べててくれて、色々話して友達になつた。今でも鮮明に思い出せる、心から嬉しかつた。

ん？ なんやスバルにティアナにキヤロ、その顔は？

なんや、九歳の私が恋する少女みたいやつて？ ふふ、あんな、今から考えると多分一目惚れやね。自分の中の感情が上手く理解できてなかつただけであれば初恋や。

すずかちゃんと友達になつた時とはまた違つた嬉しさやつたもんな。

初めて友達ができた私はどうも距離感をつかみかねててなあ、何故かは知らんけど一緒にお風呂に入ろうつて誘つてな、実際に一緒に入つたんよ。その時はシャマルも一緒にやつたけどな。え？ 私が大胆やつて？ セやね、今思うとめっちゃ行動的やつたわ。さつきも言つたけど距離感がわからんかったんや。でも、お

互い九歳やつたし問題ないやろ? ほら、スーパー銭湯でエリオも女湯入つたん。

「へり、顔を赤らめるんやないよエリオ。思い出しどるんか?

まあええわ、俊君も言つとつたけど役得や役得。

俊君もリース、シグナム、シャマル、ヴィータにフロイトちゃん、アルフ、忍さん、すずかちゃんとアリサちゃんと随分役得しどるんやから。

あ、当然全部子供の時の話やからな。

そして、お風呂でいわゆる裸の付き合いをしてな、俊君の事何も知らんかったから色々教えてもらつたんよ。

今でも覚えとるし、忘れもせん。

好きな食べ物はモンブランと丸ごとバナ。基本甘いものが好き。苦手なものは義理のお姉さんの妹さん。苦手なだけで決して嫌いではない。

趣味は機械いじりで、得意な魔法は圧縮、縮小、変身。

一つ名は白い魔獣にカミカゼ。

好きな女の子のタイプは家庭的な人。

ちやつかり好きな女の子のタイプまで聞いとつたなあ。

ん? 一つ名が気になるか? せやね、俊君今はバリバリの技術者やもんね。フォワード陣は俊君が戦つとるとこ見たことないか? ・・・。

今は訳あって総合Aやけど、俊君の全盛期は総合Sや。なんたつてあのなのはちゃんの家族やで? 普通なわけあるかいな。今のフオワード陣が戦つたら瞬殺されてしまうよ。

俊君の戦い方はすごいで。なのはちゃんみたいなパワーでのぐり押し、殲滅と違うからな。一回模擬戦でも頼んでみたらいい勉強になると思うで。

ん? どしたんキヤ口、眠いんか? ああいつの間にか結構な時

間にないとな。

よつしゃ、今日はこれでお開きとしさか。フォワードは朝の訓練あるやう? しっかりと体休めとかんとね。

じゅあお休みや。紅茶おいしかったで、おおきにな。

## 番外 少し未来の話（後書き）

時期は *strike rs*、海鳴出張からティアナが O HANASH Iされるまでの間。

談話室ではやてがフォワード陣に俊也との出会いを話しているというシチュエーションです。

はやての俊也の呼び方は仕様です。

このはやはては仕事以外でも積極的に新人達と話す機会を設けて原作より親密な関係になつている設定です。

俊也の容姿は目つきが鋭くない星光の殲滅者を想像して頂ければ大体合っています。

「なあはやて聞いてくれよー！」

時刻は既に夕刻、はやてとリースが夕食の準備を開始したころにヴィータが帰宅した。

妙にテンションが高く、興奮した様子で顔も生き生きとしている。リビングでノートに研究を纏めていた俊也とソファーに座つてレヴァンティンの手入れをしていたシグナムは作業を止め、何事かと顔を見合わせる。

「おかえりヴィータ。えらい嬉しそうやなどないしたん？」

「ただいまはやて。今日じいちゃん達とゲートボールの大会があつたんだけど」

そこで話を切り、彼女のお気に入りであるのりこつわざのポシーツトから何かを取り出す。

「見てくれ！ メダルだ！ あたし優勝したんだぜ！」

誇らしげにはやてにメダルを見せる。相当手作り感を感じるものだったが、けっこうしつかりとした作りだった。そのメダルを宝物のように扱い、台所に立つはやてとリースに自慢するように見せる。普段は無愛想なヴィータも、今は完全にはしゃいでいる子供だ。ここまで興奮した様子を見るのは俊也がはやての世話になつてから初めてだった。

「おお！ すばらしいやんヴィータ！ 優勝なんてそういうことができるもんやないで！」

「まだゲートボールを初めて日が浅いのに・・・・・・あつとじわい一タには才能があるんですね」

料理の手を一端止めて、ヴィータを祝福する一人。  
どこからどうみても家族のそれだ。リースもすっかりハ神家の一員となつてゐる。

「よつしゃ、今田はちよつとしたお祝いやな。リース、メニュー・エンジヤ」

「了解です。ピーマンの肉詰めからハンバーグに」

「それに田玉焼きものせるで。花丸ハンバーグや!」

「おおつ! はやで、リース大好きだ!」

一瞬にして騒がしくなる台所。

喧噪の方を向きシグナムは頬を綻ばせた。

「嬉しそうな顔をしてるね」

「そうか? いや、そうなのだろうな。あれがあんなに年相応の姿を見せるのでな」

「そつか、優しいねシグナムは」

「ん・・・・・そうでもないさ」

俊也は家族に敬称をつかわない。故に、シグナムもシャマルもザフイーラも呼び捨てだ。

すでにハ神家と俊也は他人ではない。同じ屋根の下で暮らす家族だ。

保護されてからもうすぐで一ヶ月。そんなに時間をかけずに家族と呼べる関係を築き上げる事ができた。

「ヴィータには笑顔が似合つね

「やつだな。普段はむすっとしている奴だが笑うと中々に可憐だ」「やっぱり妹は可愛い？」

俊也の質問に一呼吸置き。

「ああ、可愛いな。妹・・・・・・と呼べる存在であるかは分からぬが、主はやて曰くあれは『我が家の末っ子』らしいからな。幼い子供が笑っていると自然と暖かい気持ちになる。・・・・子供扱いすると怒るがな」

そう答えるシグナム。

その答えに満足し、ノートを片付け始める俊也。

「まあ末っ子といつてもお前が来るまでの話だ。今はお前が『我が家の中の末っ子』だからな」

「ぐつ・・・・・毎回同じネタでいじらないでよ」

にやりと笑うシグナムに苦笑する俊也。

実際に俊也の扱いは末っ子だ。はやてからは完全に弟分として見られている。

しかし、はやて以外からも弟分として見られているのはいかがなものか？ シグナムやシャマル、ザフィーラに弟分として見られるのはまだ納得できる。俊也が退行していくなくても外見年齢は三人の方が上だ、文句の言いようもない。

しかし、ヴィータからも弟として見られているのは何故だ？ いや、そこは完全に俊也に非があるのだが。

簡単に言つと、九歳の俊也の身長よりヴィータの身長の方が高かつたのだ。

同級生と比べても発育が遅く小柄だった。更に母親似の顔でかなりの童顔なので小学一年生に間違われる事など頻繁にあった。

自分より小さい俊也に保護欲が沸いたらしいヴィータは何かと俊也の世話を焼きたがつた。

末っ子扱いに不満があつたらしいヴィータは自分よりも小さい存在が現れた事が相当嬉しかつたみたいだ。今までの不満をぶるつけるように『姉』として振る舞つた。

元々俊也は末っ子だ。世話を焼くより焼かれる方が馴れている。そうした俊也の目から見てもかいがいしく世話を焼くヴィータは中々様になつていた。

こうした二人のやりとりを他の家族は生暖かい目で見守つている。それがここ最近の八神家の日常風景だ。

「」飯は私はやてに任せて下さい。疲れたでしょう？ お風呂が沸いてますよ」

「先に入つてくるとええ。上がる頃にはハンバーグも出来上がつるよ」

「そうか？ なら先に入つてしまふか・・・・・・。俊也と一緒に入ろうぜー」

上機嫌なまま俊也を風呂に誘つヴィータ。

「好かれているな」

「嫌われるよりは全然いいよ。しかし、これでも中身は十七歳なんだけどな」

「今更だ。私だって十七歳の男の扱いはできないさ。見た目はヴィータより幼いんだ。いちいち気にしてられん。そうでなければ一緒に入浴などできないからな」

シグナムとの混浴も何度か経験している。

無駄な肉が無く引き締まつた健康的な体に他者を圧倒し、はやて

に『至高』と言わしめる大きな胸部を持つシグナム。

例の」とく微塵も興奮できなかつたが……。

最初は俊也と入浴するのに抵抗を見せたシグナムだが、俊也が本当に九歳の子供と変わらないと分かると抵抗も無くなつたようだ。バスタオルを巻かずその圧倒的な肉体を曝け出しても俊也相手なら何も気にしないようになつた。

「丁度いいですからシグナムも一緒に入つてはどうですか？ 小さな子一人だけでは心配ですし」

「そうだな……うん、私も先にお風呂を頂くとしようか」

「あたしは子供じゃねえよ！」

「リースも俺を子供扱いして……」

ふてくされるヴィータと俊也の手を引いてシグナムは脱衣所へと向かう。

「それでは主はやて、お先に」

「うそ、ゆつくつつかつて温まるんやで」

脱衣所へと向かう三人を見送つたはやてとリースは中断していた食事の準備を再開した。

「よつしゃ、ちよつとばかり氣合を入れて作ろか

「ほっぺたが落ちるようなものを作りましょうね

「どう? カゆいところ無い?」

「おひ、無いぞ。いい感じだ。気持ちぞ」

ヴィータの髪を洗つてるのは俊也だ。

手慣れた手つきで丁寧に優しく洗つていく。  
のんびりと湯につかっているシグナムはそんな一人を微笑ましく  
思いながら眺めている。

ヴィータは子供扱いされる事を嫌う。

ヴォルケンリッターの外見年齢と実年齢には大きな開きがある。  
外見年齢は小学生程度のヴィータだが、その実ゆうに数百年の時  
を生きている。

無愛想で感情表現が下手、主の意見には従つが反発的な態度をと  
る所もあった。

「ふう……ありがとな。ほら、今度はあたしが洗つてやるよ」

それが今のヴィータはどうだ。

主に甘える事を覚え、趣味を見つけ、毎日笑顔で過ごしている。  
家事もある程度手伝えるようになり、料理に限つてはシャマルを  
凌駕している。

(いつもしてみれば普通の少女だな)

照れて拒否しているが、はやての髪を洗う時の練習だと結局洗わ  
れている俊也。

(うそ、本当に私達は変わった)

騎士として、将として、そつなくこなしていたと自負している。

誇りもある。矜持もある。誇りを捨てず、どんな外道な主の命も忠実にこなしてきた。

騎士たちを纏め、指示を出し、どんな難敵であろうが切り捨てるにあた。

騎士として、将としては優秀だつただひつ。しかし、家族としてはどうだ？

考える。

震んで途切れ途切れの記憶を呼び起こし、繋ぎ合わせる。  
そこに現れたのは正しく闇の書の騎士である自分達。  
道具、兵器として扱われ、その事を是として感情を殺し、必要最低限の言葉しか発しなかった。

（家族……それ以前の問題だつたな）

長いヴォルケンリッターの歴史の中で異常なのは今なのだ。  
戦いとは無縁、血の匂いも剣戟の音もない。あるのは温かな笑顔  
とひたすらに優しい時間。

（だが、今では胸を張つて家族といえる）

仲間意識はあつた。

しかし、それはよく分からぬがおそれく職場仲間や同僚のよう  
な意識に近かつたと思う。  
だが、今は違う。今はやてとこつ主の元生活する正真正銘の家  
族だ。

感謝してもしきれない優しい主。

意外とドジでお茶目なところがあると判明したシャマル。  
寡黙なところは相変わらずだが、ずっと雰囲気が優しくなつたザ  
フィーラ。

無邪氣に笑いつぶつになつたヴィーダ。

(時間はかかつたが……ちゃんと家族になれたな)

八神はやてとこつ至上の主の元に顯現できて幸せだ。もつ何度もなくそつと思つてきたが、これからも変わらずわかつ思つて続けるだらう。

「おい、シグナム」

「ん？ どうした？」

何故かぐつたりとしている俊也の背を叩きながらヴィーダがシグナムに声をかける。

「」によ、今度はお前の髪を洗つてやるよ」

一瞬あふとんと呆けてしまつがすぐ」正氣に戻り返事をする。

「やうか、頼む」

おそらく笑顔であるつ血分が一番変わつたのかも知れない。そういうシグナムは思つた。

じある伊謹騎士の初恋（前書き）

念話はへへで表現します。

## じある守護騎士の初恋

風呂を出ると散歩に出でいたシャマルとザフィーラも既に帰宅しており、テーブルに座つて三人を待っていた。  
ヴィータが優勝の事を伝えると一人も褒め、夕食時は大盛り上がりだ。

ハンバーグを美味しそうに食べ、「ご飯も一杯お代わりしたヴィータは満足そうだった。

「あ、はやて、明日だけじこちゃんたちがお祝いしてくれるので、うん。だからお皿ごはんは爺ちやん達と食べるから」「ほんまか？ ヴィータは好かれどるなあ。了解したで、明日の晩御飯は今日よりも豪勢にいくから楽しみにしてな」「おお！ やつた！ 楽しみだ！」

賑やかに食卓をかこむ。八神家の食卓は笑顔が絶えない。

「一度私も挨拶に行つた方がええんやろか？」うちのヴィータがいつもお世話になつていますってな」「それじゃあ思いつきりお母さんだよはやて」「俊也君、その通りや。ヴィータは私の可愛こ娘やからな～」

そういうヴィータの頭を撫でるはやて。ヴィータは顔を真っ赤にして照れている。

「……ふふ、可愛いですね。プレシアと小さな頃のアリシアもあんな感じでしたよ」「多分俺もあんな感じだったと思つた。母さんや姉ちゃんにベタベタに甘やかされてたからなあ」「

サラダのブチトマトを口の中へ転がしながら昔を思いだす。

……もしかしなくとも、相当なマザコンの上にシステムだったのではないか？

他人の目なんて考えていなかつた幼少期。第三者の目から見たら相当恥ずかしい事をやらかしていたような気がして冷や汗をかく。今日も八神家の食卓は終始笑顔だった。

「よし、またあたしの勝ちだな！」

「また二位か、ヴィータってゲーム上手いよね……」

「それにしてもさつきから順位が変わらんな」

「うう……みんな上手すぎです……」

食後、はやはリースと風呂へ。

残ったメンバーでテレビゲームをしていた。ザフィーラは見学だが。

国民的人気な髪の配管工のカートレース。先ほどから数回レースをしているが順位は変わらない。ヴィータがトップで僅差で俊也が二位、その後ろにシグナムが続き、ビリはぎつとシャマルだ。

「それにしても最近はやはリースと一緒に居る事が多くねえか？」

「確かに。主はやはリースに懐いている

「あ、私もそう思います。はやはりやん、結構リースには甘えるのよね

力チャカチャとコントローラーを動かしながら会話する。

「うーん、多分無条件に甘えられる年上の人だからと思つよ

「私達には無条件に甘えられないんですか？」

「ま、はやては眞の『主』だし。はやて自身も甘えてるけど、シグナム達の保護者のつもりでいるんだよ。そりゃあたまこは甘える事もあるだろ？」「基本お母さん役だからね」

俊也の言葉にどうか思つところがあるのか考え込むシグナム達。

「ヴィータが優勝した報告聞いてるときとかさ、何ていうか……そ、う、学校であつた出来事を子供から聞いてるお母さん、そんな表情してたし」

「あたしつてそんなに子供っぽいかな？」

ヴィータはシャマルの方を向いたがシャマルは眼をそらした。

「主としてちょっと気を張つている所があるんだと思つよ。本当に子供らしくない、大人っぽい女の子だ。それに親しい年上の人、石田先生だけ？ その先生ともやっぱり主治医と患者という立場もあるし、はやはては子供ながらに迷惑をかけてると思つてゐるみたいだから、やっぱり甘えられない。その点リースはしがらみもなく接しやすかつたんだと思うよ。リースは子育ての経験あるし、母性も感じられたんだと思う。リースが言つてた、はやはてが胸を揉むのは母性を求めているからだつて。……やっぱり、どんなに大人びいて母親は恋しいみたいだね」

俊也が話すとちょっとぴりしんみりした空気が流れた。

守護騎士たちは俊也の言つ事は尤もだと思い、ふがいなさを噛みしめ、本の少しだけリースに嫉妬した。

「ゲーム、という雰囲気ではなくなつたな。ここにりで止めるか

「なんか空氣かえちゃつてごめんね」

「俊也君が謝らなくていいんですよ。ちやんとはやひやんの事見てくれて、心配してくれてありがと！」

少し和やかな空氣に戻ってきた。

「……あたしはおっぱい揉まれた事ないけどな」

ヴィータの恵きには皆聞こえないふつをした。

翌日、ヴィータは朝食を頂くと早々に出かけ、シグナムも道場へと向かった。

【マスター、やはりそれ相応の施設が無ければこれ以上は厳しいかと思います】

「うーん……レイハの処理だけじゃ限界があるもんね。このロストロギアを詳しく調べてみたいんだけど」

ジュエルシー。ド

子供の姿になり過去に飛んだ原因。

おそらく相当な魔力を使ったにも関わらず、いくつかの球からは魔力を感じる事ができている。

「使い捨てではないという事ですね。魔力を収集しているのか自製しているのか……。電池の代わりになるようなものだつたら、ほぼ完成に近いのですが」

研究はここにきて完全に手詰まりだった。やはりそれなりの設備が伴つていないとちゃんとした研究は難しい。

「二人ともお茶が入ったから休憩にせえへんか～？」

はやての提案に従い、とりあえずコンソールを閉じてリビングへ向かう。

「お疲れさまや。順調なん？」

「いや、手詰まりだよ」

お手上げのポーズをするとはやては苦笑した。

「まあ氣長にいこうや。それよりも俊也君がいたところ……魔法研究開発課やつたつけ？ 実際に俊也君が作った魔法とかあるん？」

「俺が開発したのもあれば、共同開発したものもあるよ」

「これでいて俊也は優秀ですかね」

何気ない会話をしてのんびりとした時間が過ぎていく。

「そや、晩御飯はすき焼きにしてみとと思ひんやけどな～いやひ？ 御馳走イコールすき焼きとか安直かと思ひけどな」

「俺はすき焼き大好きだから問題ないよ」

「私も久しく口にしていませんね。桃子の作るすき焼きは絶品でした」

「私も久々に食べたいし、すき焼きで決まりやね。私とシャマルはお買いものに行くけど、留守番よろしくな。お昼はんまでには帰るから」

時刻は十時を少し回ったくらい。

朝食を食べてからすぐに作業を開始したので、一時間ほど「ソソソ」とこりめつこりめつしていたみたいだ。

「すみません、私も荷物持つくらいできればいいのですが」「気にせんでいいって。つむには荷物持つに定評を持つザフイーラがあるからな。俊也君とリースは留守番をお願いや」

俊也とリースは保護されてから家を出でていない。

細心の注意を払うならそれで正解なのだが、やはりどこか気持ち的にいいものではない。なんせただ飯くらいの紐だ。それも一人。これは気まずい。

リースはバイトでも見つけよつかと思ったがはやてに止められた。そのかわりシャマルと同じく家事を請け負っているが。

「だから俊也君もそんな顔せんでいいからな！ もうカワええなあ！」

「ちよつはやめて、くる……」

抱きつかれ頬ずりされる。

もう完全に弟として見られている俊也。何かと世話を焼いてくれるはやてはありがたいし、嫌な気持ちなど一つも抱かないが……恥ずかしいものは恥ずかしい。

ヴィータも何かと世話を焼きたがるし……何か年上に好かれるフロモンでも出でているのだらうか？

「いっ子に待つててな？ お菓子買つてくるからな」

「うぐぐぐ……リース、シャマル、その温かい眼は止めて……

はやての可愛がり方はすさまじい。

しかし良く考えてみると姉達のスキンシップにそつくりだったと気づいて何とも言えない気持ちになつた。

「さて、ちゃんと行くかな。ザフイーラ、こつもすまんけど今回も荷物持ち頼むな」

「そのくらいお安い」用です

人型になつて準備万全のザフイーラに微笑みかけ、さて出かけようとしているはやてに声をかける。

「あ……」めん、置つてきてほしいものがあるんだけど

「うん？ 俊也君がおねだりとは珍しいな！ よつしゃ置つてみー」

何故か嬉しそうなはやてに置つてあけほじこものを並べる。

「えつと、#めん……」

「それじゃあ、改めて、ヴィータおめでとうといふ事で、乾杯やー。」

はやての首頭で乾杯をとりちよつと豪勢な夕食が始まつた。

「うんめーーー ギガうまだ

肉をほおばり皿を輝かせるヴィータ。

確かに美味しい。味付けもある」とながら奮発して良い肉を買つてきたみたいだ。

久々に食べる日本の御馳走はとても美味しく懐かしかった。  
リニスも何年振りかに食べるすき焼きに大満足らしく可愛らしく  
尻尾を振っている。

食卓は毎度ながら家族団欒。

ふーふーと豆腐を冷ましながら食べるはやで。

肉をほおばりほっぺを抑え幸せ一杯という表情のヴィータ。

春菊をつつくシグナム。

熱々の豆腐を頬張つてもがくシャマル。

黙々と白菜を口に運ぶザフィーラ。

リニスはちゅるちゅると白滝を食べている。

いつもと変わらない食卓。

いつも変わらず笑顔がある食卓。

改めてこの家族は素晴らしいと再確認した。

しめのうどんも食べ終え、満腹感に浸つていてる時に俊也は行動を開始した。

「ヴィータ、改めておめでとう

「おう！ 何度もありがとうな

ヴィータはかなり上機嫌だ。

無理もない。シグナムから聞いたがこうして祝い事をしてもちつた事など記憶にないといつ。

ヴォルケンリッターというものがどういう存在かはよく分からな  
いが、だからこそこうして自分の為に祝ってくれる事が堪らなく嬉

しいみたいだ。

「俺からもささやかなプレゼントがあるんだ」

「お、本当か！？」

驚くヴィータに笑いかけあるものを取りに行くため席をはずす。

「ヴィータが羨ましいわあ。よかつたな、好かれとるで？」

「ふふふ、今回はヴィータちゃんが主役ですものね」

「祝いの席だ、褒美があつてしかるべきだしな」

「……なんの話だ？」

事情を知る三人は表情が変わらないザフィーラ以外は笑顔だ。  
事情が飲み込めずに箸を加えて首をかしげているシグナムにはリ  
ースが事情を説明する。

「お待たせ。こんなものしか作れなかつたけど  
「おお……すっげえ」

俊也が持つてきたのはケーキだ。しかし、ただのケーキではない。

「アイスクリームケーキっていうんだ」

「アイスクリーム！？ アイスなのかこれ！？」

ヴィータのリアクションに満足する俊也。

「田代のお礼もかねてちょっと気合い入れて作つてみたよ。ヴィ

ータのために作つたんだ」

「あたしの為に？」

「そうだよ。みんなには感謝している。はやてもシグナムにもシ

ヤマルにもザフイーラにも

アイスケーキをテーブルに置き、ヴィータの方を向き話す。

「でもヴィータには特に感謝してるんだ。リースを元気づけてきた事、色々俺達の世話を焼いてくれた事。便乗みたいな形になるけど改めて言つよ、ありがとう」

「お、おう」

顔を紅くするヴィータ。

「色々ヴィータには救われているんだ。ヴィータの笑顔とか大好きだし、一緒にいるとそれだけで救いになる。ヴィータにはいつも笑つていて欲しい」

「う、うん」

どんどん紅くなるヴィータ。

「そんなヴィータの事が大好きなんだ。改めておめでとう、そしてありがとう」

真っ赤なヴィータはただただ頷く事だけしかできない。

>シグナム、シグナム……<  
>どうしたヴィータ?<  
>どうしよう……あたし、こんな告白されたの始めてで……<  
>あの言い回しではそもそも受け取れるな<  
>その……すゞくうれしいんだ。うん、嬉しい。なんだかこの気持  
ち。ドキドキする<

ヴィータのシグナムの念話は他人には聞こえない。

そんな初々しい反応をするヴィータをとても愛おしく思いながら  
シグナムは小さく微笑んだ

ヒロイーンははやて。  
でも、ヴィータがすぐ可愛い。

うちのザフィーラは頻繁に人型になります。

## ヒロイーンははやて。 でも、ヴィータがすぐ可愛い。

## うちのザフィーラは頻繁に人型になります。

開幕（漫畫版）

アーニャはのせかえ出せた。アーニャはあたま。

平穏とはとても尊く得がたいものであり失つてからその大切さに気がつく。

あたりまえに訪れていた毎日が簡単に崩れ去る。そうして一度崩れ去ったものを元通りにするのは難しい。

八神はやての願いは欲が無いものだった。

家族と、友達と、ただ毎日笑つてすごせればそれで満足だった。自分が作ったご飯を皆で食べて、一緒にゲームをして遊んで、お風呂に入つて体を洗いつこして、隣り合つて眠る。

ごくごく普通な一般的な家庭の日常風景。なんのひねりもない普通の生活を望んだ。

孤独だった。ただ孤独に一人耐えていた。

そんなはやての願いは叶つた。忘れもしない誕生日、神様からのプレゼント。

真面目でとつつきにくい所があるが根は優しいシグナム。

口が悪く、見た目通り子供っぽいが、たまに大人びた姿を見せるヴィータ。

優しく面倒見がいいが、たまにうつかりとドジを踏むシャマル。寡黙で静かだが気が利き頼りになる存在なザフィーラ。

四人の個性あふれる家族をがてきて……。

小さく可愛らしい弟のような存在である俊也。とても優しく温かな母を感じさせるリース。

二人のかけがえのない友達もできた。

はやては幸せだった。

今までの孤独がまるで嘘のよつた笑顔の絶えない毎日。そんな楽しい日々がずっと続くと思っていた。信じて疑わなかつた。

一度そんな幸せな日々を体験すれば孤独の日々に戻るのは耐え難い。今までは耐えられたが、前の状態に戻れば今度は絶対に耐えられない。

どんなに大人びていてもまだ九歳の少女だ。まだほんの子供。親に甘え、我儘を言って過ごす……そんなあたりまえが『えられなかつた子供でしかない。

はやては明るく振舞つていたが、どこか根つこの部分でネガティブ思考があつた。

『おとんもおかんもおらんのも、うちが悪い子やからや……』

そんな思考。大人びて、頼れる大人もいなかつたため、知らず知らずに自分ひとりで抱え込むようになつていった。自覚は無いが。実際にはやてに非は無い。はやてもすぐにそんな考えを振り払つていつも通りの一人で過ごす日々を送つっていた。寂しさを押し殺して。

しかし、そんな忘れていた思考が完全にはやてを支配する出来事が起こつてしまつた。

ヴィータの優勝祝いをしてから三日後、はやては倒れた。

一時大パニックになつた八神家だが、幸い症状は重くなく一日だけ大事をとつて入院したが次の日からは普段の生活に戻つた。

いや、普段の生活は正しくない。この日から八神家の日常はがら

りと変わってしまったから……。

守護騎士の四人は家を空ける事が多くなつた。

普段家に居る事が多いザフィーラでさえもほとんど家を空けてい  
る。ヴィータはゲートボールに顔を出さなくなり、シグナムは剣術  
道場に向かう時間が極端に減つた。

シャマルは家事をする表情に明確に疲れが見えうつかりが多くな  
つた。

はやてを一人にさせないために常に俊也とリースは家にいるが、  
守護騎士たちと過ごす時間は明らかに、そして大幅に減つた。

夜遅くに帰宅、ひどい時は朝に帰つてくる事もあり、当然はやは  
ては相当心配した。

しかし、当の本人達は心配するな、何もない一点張り。何か隠  
し事があるのは明白なのだ。ただ、それをはやてに打ち明けようと  
しない。

家族と言つてもプライバシーはある。当然知られたくない秘密の一  
つや二つあるだろう。

だが、目に余る。

はやはては急にこのような態度を取られ戸惑つていた。

自分を除けものに、仲間外れにされたようで疎外感を感じてしま  
つた。

しかし優しい彼女は守護騎士を問いたださなかつた。主の命令と  
いう絶対権限があるにも関わらず、四人を信じて話してくれるのを  
待つ事を選んだ。

目に余る四人の行動に俊也とリースは何をやつているのか聞いた  
だしだが、返ってきた言葉は『危ない事は無い、主にもお前たちに  
も迷惑はかけない。だからどうか黙つて私達の事を見守つていいく

れ』といふもの。シグナムは土下座をする勢いだつたので慌てた一人は黙認するしかなかつた。

守護騎士たちはこうもいつた『主のそばには一人がいてくれ』騎士達ははやての事を嫌つてゐるわけではない。

いや、嫌うわけがない。それならこうして家を空ける事が多くのたのは何かしらはやての為のはずなのだ。

騎士たちは主至上主義。しかし、何が目的で、何をしているかが分からぬ。

「……シグナム達今日も帰つてくるの遅いんかなあ」

ただはやてが寂しがつてゐる事実がそこにあるだけ。

笑顔の絶えなかつた食卓は見る影もなく寂しいものへと変貌してゐた。せつかくの美味しい食事もどこか味気なく感じてしまつ。今日も朝早くから出掛け行つた四人。素人のはやての目から見ても疲れてゐる事が眼に見えて分かる。つまり、休めていない。休む間も惜しんで何をしてゐるのかはまだ話してくれない。その事がはやてをよけいに苦しめる。

「「ひちそうさまや。うん、我ながら美味しかつた、最高や!…まつたく、こんな美味しいご飯を食べんでもうちの不良たちはどこをほつつき歩いてるんやろな?」

明るく振舞う姿が痛々しい。

「ああ、三人でお風呂入るつか

それに何か怖がっているようにも見える。

多分、このままシグナム達が自分から離れていくてしまつかもしれないと考えているのだ。

「今日も三人で寝よな」

以前にもましてはやはてはリースに甘えるようになった。

リースだけではなく姉として振舞つていた俊也にも甘えるようになった。……このまま悪い方向へ進めば依存してしまつまうぞ」と

はやてに甘えられるのは嬉しい。

可愛らしく、一緒に暮らしてとても良い子だと知っている。守りあげたい……そう心から思える女子。

「…………かして現状を変えないとね」

隣で眠るはやての頭を撫でながら囁く。

「やうですね……このままじゃはやてが可哀そつ」「ひいが娘

はやての寝室の大きめのベッドで三人は眠つて居る。こつからこうして眠りはじめたのか……守護騎士達の様子がおかしくなつてからだから一ヶ月以上も経つ。

「何をしてるんだろうね」

「分かりません。危ない事じゅなればいいんですけど

心配しているのは俊也とリースも同じ。

守護騎士たちは既に大切な家族だ。何が何でも守り通す、そう思えるほどだ。

「ごめんな付きあつてもらつて。ほんまやつたらリースもあんま外出するのはあかんのやろ?」

「いえ、私は大丈夫ですよ。俊也は理由があつて外に出る事は難しいですが」

守護騎士達は朝早く帰つてきて仮眠をとるとまた出かけて行つた。ここ最近はひくに会話すらしていない。寂しそうなはやてに心が痛む。

そんな寂しそうなはやてに気分転換をとりリースが外出に誘つた。俊也は万が一姿を見られたら不味いので家にいるが、今日一日はリースがはやてのそばに付きつきりになる。

外出と言つても車椅子生活のはやてに入ごみは辛い。なのでしばらく行つていなかつた図書館へと行く事に決まつた。

静かに本を読むだけだが少しでもはやての気分転換になれば目的は達せられる。リース自身、日本の本は大好きなのでリース本人も楽しみだつたりする。

はやは幅広く本を読む。

推理、サスペンス、恋愛、ファンタジーから料理本まで。だが、自身が魔法に出会つてからは魔法が登場するファンタジーをより多く読むようになった。

リースは意外にライトノベルなどの娯楽本を好む。

海外でも注目されている日本のアニメや漫画などの娯楽は次元世

界でも群を抜いており正直面白いのだ。

次元世界で幅広く使われている魔法は科学の発展上有るようなもので、ファンタジー やオカルトの類からくる魔法は存在しない。あくまで術式をくみプログラムし計算し結果、魔法を行使する。日本のアニメや漫画などでよくみられる『心の力』など『精霊が宿つた武器』などといった考えは無く、そういった非現実的なものが逆に新鮮だつた。

それに多種多様の引き込まれるストーリー や可愛らしいキャラクターなどにも惹かれあつという間にのめりこんでしまつた。

そのアニメやゲーム、漫画などの娯楽が魔法研究開発課では大いに役立つた。

俊也が大きな功績を残せたのも日本出身だった事とアリシアトリニスが日本に滞在した期間があつた事が大きい。

図書館につき、好きな本を取り読む。

リニスはよくある剣と魔法の異世界ファンタジーもののライトノベルを、はやはては興味があつたのか北欧神話の本を読んでいた。

「あかんわ。やっぱり原典に近いのはよくわからへん。もうちょっと分かりやすく書いてあるやつ取つてくるわ

「一緒に行きましょうか？」

「ええって。図書館は良く一人で来とつたからな。リニスは今日中にそのシリーズ読破するんやろ？」

「そうですね、続きが気になります」

ちょっと照れたように笑うリニスが妙に可愛くて図書館に来てよかつたと思つはやて。

車椅子を器用に動かし目的の本棚へ。

「うーん見つけたのはええけどどいかへんなあ。あと・・・・・・

もつひよこ・・・・・

必死に手を伸ばす。

リニースに着いてきてもらえばよかつたと後悔していたら横からひょいと目的の本を取られた。いや、正確には取つてくれた。

「「」の本でいいのかな？」

「あ・・・・・・そうです。おおきに、助かりました」

本を渡してくれたのははやてと同じくらいの年の女の子だ。紫がかつた長い髪でどこかほんわかした雰囲気を持つ少女。はやてにひとつでは滅多に触れ合つ機会がない同世代の女の子。

「お礼なんていいよ。困つた時はお互い様だよ」

「おおきに。私ってこんな有様やから結構困ること多いんよ。ほんまに助かりました」

「敬語なんて使わなくともいいよ。年も同じくらいだと思つし。私は、結構この図書館に通つていてね、何度か貴女の事見たことがある。何度も話しかけようと思つてたんだけど中々きつかけが掴めなくて・・・・・」

「そんな気にせんでも話しかけてくれればよかつたのに」

一人で笑い合つ。

「丁度いいきつかけになつたね。良かつたら私とお友達になつてくれないかな?」

「え? う、うん! めっちゃ嬉しいわ! 大歓迎や! 私ね、ハ神はやつて名前やねん。足がこんなやから学校も行けてなくてな・・・・・だから新しい友達、すつごく嬉しい」

「そんなに喜んで貰えて私も嬉しいよー。私の名前はね・・・・・

「

「はやてなんだか嬉しそうだね」

「顔にでてもうとるか？ えへへ～ちょっと良い事あつたんよ」

夕飯は相変わらず三人で頂く。

しかし、いつもと違いはやはては上機嫌だ。たまに思いだしたように笑顔になる。

【私から見ても上機嫌だと分かります】

「レイハから見てもわかるんか？ 結構顔に出やすいんかなあ私

ぐにぐにとほっぺを摘む。その表情もとても嬉しそう。

「今日図書館で友達ができたらしんですよ」

「そりなんや！ 私と同じ年でめっちゃ可愛い子なんよ！」

なるほど、と俊也は納得した。

はやての友人関係はとても狭い。友人と呼べるような関係は俊也とリースくらいのものだ。

それが同じ年の女の子の友達ができた。ヴィータともリースとも違う、同じ屋根の下に暮らしていない友達。そんなあたりまえの人気がはやてには逆に新鮮なのだから笑えない。

「まだ私も名前を教えてもらつていないんですけどね。私が読みふけっている時に随分仲良くなつたようです」

「またラノベ？」

「やつですよ。この国の娯楽は次元世界の宝です」

生真面目で管理局じや名が知れていて一種の恐怖の対象であるリース。

だが、そんな彼女がアニメ、漫画、ゲーム、ラノベなどを好むと知ると一気に親近感が沸いてくる。もつともその事実を知る局員は少ないが。

「それでな、その子もめっちゃ可愛いねん。私の周りは可愛い子や美人さんばかり集まってるから不思議やね。

シグナムやシャマルやリース、石田先生は美人。ヴィータや俊也君は可愛いし」

「はやて、俺は男で……」

「その子も可愛い系やね」

はやては俊也の心の叫びを黙殺し話を続ける。

「そんでな、その子の名前やけどな……」

そしてはやてが言った友達の名前を聞いて一人と一機は絶句した。

はやてに新しい友達ができた日、時刻はPM七時四十五分。ヴィータとザフィーラは海鳴市のはるか上空にいた。

「封鎖領域……展開」

目的は蒐集。闇の書のページを埋めるため。

主に蒐集行為は禁じられている。よつてこれは重大な裏切りだ。

しかし、裏切りでもこの行為は止めるわけにはいかない。闇の書を完成させなければあの優しい主が死んでしまう。

寂しい思いをさせている事も承知している。そばにいてくれる俊也とリニスに闇の書を説明してない事も後ろめたく思う。

「でも……止めるわけにいかねえ」

シャマルとシグナムは別の世界に蒐集に行っている。

二人とは別行動でヴィータとザフィーラがこの魔法文明のない地球に留まっているのは理由がある。

「近頃たまに感じる大きな魔力反応……蒐集できればいっさに二十ページは埋まりそうなんだけどな……」

そう、時々感じる大きな魔力反応。

魔法生物から蒐集する以上に効果をあげられる。

人から蒐集することは気が引けるが……はやての命にはかえられない。何しろ時間が無い。

「手分けして探そう」

「そうだな。ザフィーラも気をつけてな」

二手に分かれる。

結界を察知されてこの時間軸の俊也が現れる懸念があつたが、俊也からはそのような事を聞いていない。

ヴィータ達とは初対面だった。即ち俊也とはち合わせる事はない。

「……！ 魔力反応！ ついに見つけた！ ……いくよグラーフア

大きな魔力反応。

俊也の魔力と違う事も確認済み。

おそらく、無自覚な魔力持ち。せめて痛い思い、怖い思いをさせないように素早く終わらせる。それがヴィータのできる最善だ。

魔力反応の元に飛びぶ。

驚く事に魔力反応はヴィータに少しずつ近づいてきている。

「……魔導士か？ 管理局員ってわけじゃないだろ？ けど。無自覚な一般人である線は消えたか」

目標がいるビルにたどり着く。

屋上に人影。魔力反応は人影から。……蒐集する目標は目の前にいる。

「……っ」

油断しないようにグラ フアイゼンを構え、目標の顔が見える位置まで降下する。

そして、ヴィータは己の眼を疑った。

その目標は自分が慕う少年にあまりに似ていたから。

「あの……あなたは？ あなたも魔導士なんですね？」

どこか不安げな顔。その顔も、髪の色も、瞳も、何もかもが似ている。似すぎている。

「な……嘘だろ？」

ヴィータは動搖を隠せない。

鼓動も早くなる。完全に予想外な展開に頭が追いつかない。

「私……私の名前は高町なのは！　あなたのお名前は？」

「たか……まち」

その苗字に何故かぞくつと背中が震えた。

対峙する二人。

闇の書を巡る物語の幕開けはそんな光景からだつた。

高町なのは（前書き）

「うちのヴィータちゃんは猪じやないです。」

## 高町なのは

たかまち。高町。タカマチ。

何度もその言葉を頭の中で呴く。

目の前の少女は高町なのはと名乗つた。

可愛らしい少女だ。

栗色の髪、大きな瞳、そのどれもが少女を映えさせる。しかし、彼女は似すぎていた。

「あ……あの」

「……高町なのはと言つたな？ お前、高町俊也といつ名前に聞き覚えはあるか？」

「え？ 俊也？ ううん聞いたことないなあ

「そうか……」

他人の空似だとと思う事にした。

俊也は男。目の前の少女、なのはは女。別人だ。

「……悪く思うなよ。抵抗してくれてかまわない。こちらに非があるのは分かつている」

動搖する心を押さえつけ改めてグラ ファイゼンを構える。

できれば戦闘は避けたかった。知らないと言つたとはいえここまで容姿が似ている上に姓も同じ。無関係なはずがない。

しかし、それは俊也も言える事。俊也の口からなのはなどという人物名は出てきた事が無い。

お互いがお互いを知らない。そんなことがあり得るのか？ 双子といつてもおかしくないほど似ている二人がそれぞれの存在を認識

していない。

「わけがわからねえと思つがそれはあたしも同じでな。だけど見つけちまつたからにはやる事は一つだけだ」

「こりに妙なしこりができた感覚がする。

鼓動もまだ激しい。しかし、当初の目的は果たす。

「じつかつと受けひ、手加減はするから」

ヴィータは手のひらほどの鉄球をぽんと頭上に投げ……。

「シユワレベフリーゲン！」

グラーフアイゼンでそれを思い切り叩きつけなのはに飛ばした。

「……！ 誘導弾！？」

とにかくシールドを張つたなのはだが突然の攻撃に驚いているようだ。

「なんなのー？ ビリヒト！ なん」とするのー？

わけがわからないだろう。突然襲われたのだから。

「よく防いだな」

「いやつ！？ わやああああー！」

シールドは誘導弾を防ぐので精一ぱい。これ以上の攻撃は耐えられない。

ヴィータはグラ ファイゼンを思い切り振りおろし、鉄球の上からシールドに叩きつける。当然シールドが耐えられるはずもなく砕け散りなのはは後方へ吹っ飛んで行つた。

(……上手く蒐集するには弱らせて動けないようにしてないといけねえ。抵抗されたら上手く蒐集できなくて大事になりかねない)

闇打ちと同じ。騎士道も糞もない行為。  
だが外道になり下がろうと成さねばならぬ事がある。矜持を捻じ曲げても成さねばならぬ事がある。

「……恨んでくれてかまわねえ。回復役も来るから……」

氣絶したものと思つていたがヴィータの考えは外れていた。

「おいおい……手加減したとはいあたしはヴォルケンリッターだぜ？」

顔が引きつるのが分かる。

ヴォルケンリッター、雲の騎士。数多の戦場を駆け抜けてきた戦士。

経験は常人のそれを遥かに上回る。素人が戦つて勝てる相手ではない。

ヴィータはこの虫も殺せなさそうな少女に戦闘の心得があるとは思つていなかつた。

管理世界ならまだしも地球は管理外世界。そしてここは平和な国日本。魔力があるうが無からうが、普通の子供がヴォルケンリッターと”戦闘”できるなどあるはずもない。

(見た目通りの年齢ではない？ あたしと同じような？ ありえねえ。ならば何故？ 純粹に戦闘能力がある？ それこそまさかだ。

魔法文明の無い世界、おまけにこの国には戦場もねえ、兵役もねえ。住人の身体能力が異様に高い？ いや、はやってや俊也は一般的なミッドやベルカ人と大差ない。ならばこの線も却下。何かしらの武術を習っている？ ありえるが武術をかじつたくらいの子供にあたしの鉄槌は防げねえ。魔法で身体能力の強化？ あり得る。シールドの強度も眼を見張るものがあった。素人がとっさに張ったにしては強固すぎるし術の練りも上手い。……魔法に慣れ親しんでいる？ 昨日今日関わったわけではなさそうだ。独学？ 限界がある。指示する人物がいる？ 魔法文明のないこの世界に？ 誰だ？ 魔法陣を見るにミッド式。まさか管理局員？ いや、仮にも法を守る組織、管理外世界には手を出さないだろ？

いや、また。俊也の話では既に地球には管理局が来ている。俊也が親友、確かユーノと師になる女、クロノと共に解決した事件がある。ならばタイミングはその時か……。俊也と同時期に魔法に触れたと仮定しても関わった時間は一年にも満たねえ。それでこの強さか？ ありえ……るな。俊也は嘱託試験を受けてランクAAだと聞かされたらしいし。天才というやつか？ いや、この女が管理世界出身という可能性は？ 姓名は日本人のようだけど……）

なのはが起き上がるまでの数秒で頭の中で咀嚼ぐるしく思考するヴィータ。だが、情報が足りない。

「いったあー。いきなり何するの！？」

涙目だが目立つた怪我もないようだ。

ヴィータは気絶させるつもりで放つた一撃を受けてピンポンしてるので警戒を強めた。

「ちやんとお話しよつよー、私は高町なのはー、あなたの名前……」

なのはが喋りきる前にもう一発誘導弾を放つが今度もきつちつとシールドで受けられた。

(不意打ちだつたけど……受けられたか)

「危ないなあ……もう、ちやんとお話ししてよ

当たり前だが怒氣を含んだ声でそう言つとなのははペンダント状にして首からぶら下げていた宝石を手に取る。

その宝石を見て、ヴィータは一度田の驚愕をする。

あまりにも見慣れたその宝石。

いつも俊也の周りをふよふよと浮かんでいる、俊也が「」の半身とも言つたデバイス。

「レイジングハート……セットアップー！」

【オーライマスター。セットアップ】

暴風のようになれる桜色の魔力。

そしてなのははバリアジャケットを身に纏つていく。

(レイハ！ レイジングハートー！ どうしてこの女が持つている！

? あれは俊也のデバイスだ。一機あった？ たまたま名称が同じ?  
? 違う、あれは正真正銘のレイハだ。家族は見間違わねえ。だけ  
どどうしてそこにある？ どうして俊也以外をマスターと呼ぶんだ  
!? わからねえ。もう然つぜんわけがわからねえ…)

白を基調としたどこか制服を連想するバリアジャケット。

なのに良く似合っていたが、ヴィータはそれどころじゃない。

理解の範疇を超えていた。

「くそつどつどつなつてやがんだー。」

「それはこいつちのセリフなのー。」

なのはの放つた二つの誘導弾を避け上空へ飛ぶ。

(誘導弾の扱いもそれなりに上手いー。)

賞賛すべきだがこの場合はずやつかいでしかない。

「 うわ

一いつをシールドで受け何とか体制を整えようとしていたが……。

「なつー もう一つー?」

さつきまでは確認できていなかつた桜色の誘導弾がヴィータに向かって飛んできていた。

(計三つー。こいつ、背中にもう一つ隠してやがったなー。)

まんまと引っかかったヴィータだが、これしきの事で後れをとるような事はない。

グラ ファイゼンで誘導弾を叩き壊し、こいつらも誘導弾で応戦しよじとした最中眼を見開いた。

「デイベイーン……バスターー!ー。」

なのはから放たれる桜色の光。一直線上のヴィータ目がけその美

しかも暴力的な魔力が襲いかかる。

「砲撃……！ くつそ！」

歯を噛みしめる。

誘導弾で気を逸らした所で本命を叩きつける。

近接、遠距離と違いはあるが先ほどヴィータの取った戦法と同じだ。

シールドを全開にして受け止める。シールドが割られはしないが、軽視できない威力だ。ヴィータは認識を改める。

(素人じゃねえ！ あたしと”戦闘”できるだけの戦士だ！)

悔っていた。可愛い見た目に騙されていた。

砲撃の威力は軽視できないものがあった。これほどの砲撃、少なくともヴォルケンリッターは持ち合わせてはいない。直撃を受けるとやつかいだ。この小さな魔導士はヴォルケンリッターの脅威になり得る。敵として認識できる。

「舐めるなよつ！」

「にやつ！」

ディバインバスターを完全に受け切った。なのはは少し驚いているようだ。

「悔らねえ！ お前はあたしと対等に戦えるすべを持ち合わせている！ 手を抜くなどといった非礼はもうしねえ！ ……全力だ。この鉄槌の騎士、全力でお前の相手になつてやる」

グラ ファイゼンを構える。

雰囲気も変わりなのはは少しだけひるんだ。

「現状の把握はこの際後回しだ。あたしからけしかけた喧嘩だ。非  
はあたしにある。恨んでくれていい」

「え？ 恨んでいいって何？」

「現状を把握できていないのはも同じ。いや、むしろなのはの

ほうが混乱してこむだろ？  
なのははおどおどするばかり。  
現状を把握できていないのはも同じ。いや、むしろなのはの

「どつかのおっぱいほどバトルジャンキーのつもりはねえけど、あ  
たしも騎士だ。強いものと戦う時の高揚感は否定できねえ。そして  
わっさの砲撃を受けて高揚したのもまた事実」

ガチャーンガチャーンと機械音。

グラ ファイゼンにカートリッジがロードされた音だ。

「いくぜ。耐えろよ高町なのは  
「ちょっと……うわっ！」

全力飛行し屋上にいるなのはに迫る。

(認める。遠距離ではあたしの負けだ。近接を主体とするベルカの  
騎士でもあたしは万能型、どの距離でもそれなりに戦えるがミッテ  
式と真っ向からの撃ち合には一歩及ばない。

ならどうする？ 簡単、ミッテが苦手な接近戦に持ち込めばいい。  
思いのほか防御は固い。ならばその防御を上回る攻撃をすればいい。  
時間をかけるのは避けたい。一撃で決める……。)

今度はなのはが眼を見開く番だ。

「……おつきいね」

【呆けている場合ではありません！　全力で防御します！】

レイジングハートはバリアジャケットに回していた魔力すら惜し  
みそれを解除。

なのはの全魔力をシールドへと注ぎこんだ。  
その判断は正しい。

「ギガント……シュラーグッ！」

ありえないほど巨大化したハンマーが降りおろされた。  
たとえば巨人に踏みつぶされるようなもの。圧倒的質量からくる  
攻撃は単純で分かりやすい。シールドが保つかどうかも正直怪し  
いが、持たせなければ確実に死ぬ。

「きやあああああっ！」

悲鳴を上げた所でなのはは気を失った。

誰でも分かる事だ。あの鉄の塊に押しつぶされたら死ぬ。シール  
ドは巨大化していない状態でも破られた。防ぎるのは難しいだろ  
う。

「……まあしかたねえか」

しかし、巨大な鉄槌はシールドに当たる事は無かつた。  
寸止めではないが当たる直前にデバイスを強制的に待機モードに  
したのだ。

【どうして止めたのです?】

「愚問だぞレイハ。あたしは別に命が欲しいってわけじゃない」

改めてデバイスを起動する。

「正直手こぼつた。だけど目的は果たす」

ニギモ蒐集しようとした刹那、ヴィータに向かつて誘導弾が放たれた。

「ちつ……新手か! 障壁つー!」

どうも面倒事が多く起る。

放たれた金色の魔力弾を防ぎ、放つたであろう者を睨みつける。

(三人……少し不味いか?)

「なのはにそれ以上近づくな!」

射殺さんばかりの視線でヴィータを睨みつける少女。

長い金髪をツインテールにし、黒いバリアジャケットに黒いマン

ト。年齢はなのはと同じくらいか。

「管理局かー?」

「そうだ。そしてその子の友達だ!」

明確な敵意を向けてくる少女。ヴィータの焦りは大きくなる。

(ここで管理局に見つかったか。しくじったな……。それには

の友達？ 繫がりがある？ 何故だ、ここは管理外世界。何故現地住人と管理局に繫がりがある！）

「目的を教えてもらつよ。どうしてなのはを襲つたんだ？」  
「これ以上その子に手出しだと容赦しないよ！」

残り一人もヴィータに敵意を向けてくる。それほどなのはが大事なのだろう。

（犬耳の女……守護獣、いや使い魔か。そしてこっち……女顔だが男だな。金髪に翠の瞳、そしてどびつきりの美少女に見えるが男……！）

三人を睨みつけながらヴィータは背中に冷たいものを感じた。三人の内一人が俊也の話す親友にして師の特徴に一致する。

「……質問だ管理局。高町俊也、この名前に聞き覚えは？」

知らないでいてくれ、違つていてくれとヴィータは内心願う。

「高町？ ……知らない。なのはの家族にそんな名前の人はない」

少女がデバイスを構えながら答える。

「次だ。ユーノ・スクライア、この名前に聞き覚えは？」  
「……ユーノは僕だ」

外れていて欲しかった。違つていて欲しかった。  
しかし、自らをユーノと名乗る者が目の前にいる。

「まじか……。リース、という名前に聞き覚えは？」  
「どうしてあんたがリースを知っているんだい！？」

驚く使い魔。こちらも当たり。

「なんてこった。ますます意味がわからねえ」

顔が引きつっているのが分かる。

俊也を知らない？ あり得ない。少なくとコーノ・スクライアは俊也に魔法を教えた張本人なのだから。

（駄目だ、あたしの理解の範疇を超えている。皆で相談しねえと…今は逃げに徹するしかねえか）

「最後の質問だ。そこの使い魔と黒いの、名前は？」

「……フェイト・テスター」

「アルフだよ。大人しくお縄につきな」

名前を知つて更に動搖。

俊也の相棒、リースのマスターにして娘のような存在。任務に失敗して命を落とした少女と姓が同じ。

「これで正真正銘最後だ。アリシア、この名前に聞き覚えは？」

その名を口にしたとたん、明らかに三人の顔つきが変わった。

「どうしてアリシアを知つている！」

驚愕の表情でフェイトが叫ぶ。

アルフは犬歯をむき出しにしてヴィータを睨みつける。

「くつそ、ますますわけわかんねえ」

なにか、なにかおかしい。

俊也とコースの言つことと何故いつも食い違つ。

（信じていいんだよな二人とも……）

現状を打破するためヴィータはカートリッジをロードする。

（現状はあたしの不利、魔力蒐集もできていない）

「質問は終わりだ。当然だが大人しく捕まるつもりはねえぞ」

（残りカートリッジは一つ。心もとないが、なんとかするしかねえ）

長い夜はまだ終わらない。

高町なのは（後書き）

なのはを対等の敵として認めたが故の全力全開。  
もちろんギガントシユラーカはあのまま直撃すればオーバーキル。  
なのはさんぺつたんじ。

## 新たな疑問

（さて、どうしたものかね……）

敵は三人。対するこちらは一人。

戦力は未知数。戦況は圧倒的不利。

（最良はこいつらからも蒐集する事。でもさすがにそれは無理か）

アイゼンを構える。三人はなのはを庇うようにヴィータと対峙し、もちろん隙はない。

（ユーノは結界特化と俊也から聞いている。アルフと言つた使い魔はデバイスなどの装備はなく無手。おそらくザフィーラと同じ前衛接近戦タイプ。金髪……フェイトは一般的なミッド魔導士なら後衛、砲台。でもデバイスの形状は……鎌？斧？ともかく、接近戦を想定していると考えられるな。接近戦……一対一なら負けるつもりはねえが……）

鉄球を取り出し放り投げ、アイゼンで打ち出す。

（四人から蒐集することは無理。次点の最優はこの邪魔な三人を戦闘不能にすること。最悪はここであたしが捕まる事。……リスクは侵せねえ、今は逃げに徹する！）

「へりえつ！」

球は三発。本来は誘導弾だが細かい演算をする時間が惜しいので一直線上に進むだけのものだ。

「下がつて！」

「ユーノがシールドを展開し、残り一人は動けない。外道だが、ヴィータはいまだ昏倒しているなのはに向けて撃つた。無論、誰かしらがしつかりと防ぐと見越しての事だが。

ここを戦場としてみればなのはは明らかに足手まとい。このチムの弱点はなのはを守りながら立ちまわらないといけない事。その弱点をつかなければ勝機は無い。

(この隙に……)

先手を取った。読み通りに防御。

ヴィータは予定通りに離脱する。先ほどの攻撃から一転、背を向けて逃げ出すヴィータに呆気にとられる三人。

「ちょっ！ 逃げんな！」

「なのはは僕が。フェイトとアルフは追つて！」

「分かった。バルディッシュュ！」

【サー・ソニックムーブ】

フェイトが駆ける。その姿は正に金色の閃光と呼ばれるに相応しい。閃光のごとく駆ける様は見惚れてしまうほど美しい。が、それを確認する暇などヴィータにはなかつた。

一気に加速したフェイトは逃げるヴィータの横を通り越し正面に回り込む。それにはさすがのヴィータも眼を剥いた。

「……おー、マジかよ」

「逃がさない。なのはを狙つた理由、吐いてもらひ」

フェイトが睨みヴィータが冷や汗をかく。

(なんつー高機動！ 予想外だ！)

逃走に失敗したヴィータは焦る焦る。

「逃がしゃしないよ！ …… よくもあの優しい子に手を出してくれたね！」

アルフは犬歯をむき出しにして唸る。

その表情からは憤怒の様子が分かりやすく伝わってくる。

(前後で囲まれた。なのはにはコーノが付いている)

状況は既に詰み。だが、機はまだ残されている。

「……分かったよ、あたしの負けだ」

アイゼンを待機モードに戻し両手を上げる。

「やけに潔いじゃないのさ」

「ふん、勝てねえ勝負はしない主義だ。それに今は命を張るような時じゃねえ」

フェイトとアルフの警戒は解かれない。

元々警戒を解くのが目的ではない。この場で警戒を解くような三流以下の大間抜けだ。

「で、あたしはお前に投降するわけだが……お前の所属はどこだ？」

「……時空管理局巡航」級八番艦アースラ」

「艦長の名前は？」

「艦長はリンディ・ハラオウンだ」

「ふうん。お前は正規の局員なのか？」

「……囑託魔導士だ」

「なるほど、ひよっこか。船には執務官はいないのか？」

「クロノ・ハラオウン執務官がいる」

問答が続く。

あからさまなヴィータの時間稼ぎ。

しかし、その事にフェイトとアルフは気がつかない。

仮にヴィータの目の前にいるのがクロノ執務官であつたとするならヴィータ思惑はすぐに気づかれただろう。しかし、相手は囑託。年齢もまだ幼い。ヴィータの考えに気が付けるほど経験を積んでいるわけではなかつた。

「アルフってのは誰かの使い魔か？」

「あたしはフェイトの使い魔だよ」

「アリシアと聞いて驚いていたけど、アリシアとはどういう関係だ？」

？

アリシアという言葉で顔を歪める一人。

その一人の表情にヴィータは首をかしげるばかりだ。

「アリシアは……私は……。私は、私はアリシアの妹だ！」

「フェイト……」

その言葉にはどんな感情がどれほど込められていたらうか。正も負も、ひっくるめてぐちゃぐちゃにかき混ざつて……。自らをアリシアの妹と言つたフェイト。色々な思いが彼女の中にはあつ

たが、そつ名乗った事に後悔はない。

「……っ！ 妹……なるほどな」

「だからなんであんたがアリシアを知っているんだい！」

憤るアルフを無視して考える。無論両手を挙げた状態でだ。

「……考えれば考えるほどわけわからんねえな」

俊也の話とやはり違つところが多くある。

(艦長はクライドといったはずだけだ。姓は合っているけど。アリシアに妹……これはたまたま話題に出なかつたといつ可能性もある。……しかし、一番解せねえのは俊也を知らないところだけど)

「何を言つてゐるんだい！ それより話が長すぎやるよー。フュイト、いいかげん連行しよう。なのはも早く医者に見せた方がいいと思うんだ」

「！ そうだね。あなた……名前は？」

「名前か……いや、止めとくよ。名前を知られたらいいからアーマットが多いからな？」

そう言つてやつと笑うヴィータ。

「なのはっ！」

「っ！ ューーー！」

「じつしたんだい！？」

ユーノの叫び声を聞き返るフュイトとアルフ。

そしてその信じられない光景に眼を凝つ。

「な……ななな」

「どうこうこと……！？」

気絶しているなのはの胸から腕が生えていた。

そうとしか表現できない。確かに生えている。ただし出血などはないため物理的に生えているわけではないようだ。

「これは……一体

なのはの隣にいたユーノは突然のホラーに腰を抜かしていた。が、冷静さは失わない。

「……まさかリンカー コア！？」

良く見れば手は小さな桜色の球体を包み込むようにしている。腕はその球体を狙つて生えたと見て間違いない。

それをリンカーコアだと判断したユーノ。その判断は正しい。だからこそユーノは迂闊に動けない。もしリンカーコアを傷つけたら取り返しがつかないからだ。

「形勢逆転だな管理局。嘱託のお前で助かったよ。お前じやなくてクロノちゃんだったらあたしの負けだった」

ヴィータはアイゼンの待機モードを解除し、構える。

フュイトとアルフは己の迂闊さを呪い、新たに現れた援軍と思われる男と女を睨みつけた。

深夜零時を回り日付は既に次の日。

すやすやと寝息をたてるはやてを起こさないように俊也とリースはそっとベッドを抜け出した。

誰もいない真っ暗なリビングのソファーに腰掛け俊也は愛機に語りかける。

「レイハ……画像データを」

【了解ですマスター】

レイハが記録している膨大な画像データを映し出す。

「  
[...]」

俊也とリースはそれを無言で見つめる。もう一度と会う事が出来ない大切な人達。一度と触れ合つ事が出来ない大切な人達……。レイハと出会い八年間。その軌跡とも言つべきデータ。

「懐かしいな……」の頃は本当に小さいな俺  
「今と同じ姿ではありますけどね」

クスリとリースが笑う。

二人が見てている画像は小さな男の子一人が肩を組んでピースしているという微笑ましいものだ。

幼い俊也とユーノ。親友、師弟、最高の親友と胸を張つて言える二人。

「「」」ちは一人して顔を赤くして可愛いですね

「言つてくれるなよ。子供ながらに照れてたんだから。クロノさん  
つてばあの顔、あの姿で胸はすごいんだ」

「俊也のエッチ」

次の画像は先ほどの画像のすぐ後に撮られたものだ。  
クロノが肩を組んでいる一人に後ろから抱きついて満面の笑みを  
浮かべている。

「クロノも桃子やルシエ少将と同じ人種で見た目が変わりませんも  
いんね」

「今になつてから分かるけどアレはロリ巨乳つていうんだよね。い  
や、年上だけど。見た目小学生で姉ちゃんより胸があるつてどうい  
うことだよ?」

「俊也のスケベ。でもその気持ちは分かります」

次の画像はアースラで撮つたもの。

「クライド提督、ハイミィさん……」

親身になつて世話をしてくれたクライド提督。からかわれてばつ  
かりだつたハイミィさん。

「あ、次は私とアリシアも映つてますね。懐かしいです……」

俊也、ユーノ、アリシア、リニスと高町家の面々が映つている。

「食事中ですね。この頃はお箸に悪戦苦闘していた記憶があります」

家族団欒と言つた風景。

アリシアとリースと出会った事件が収束して、魔法の事を家族に話して……もちろんコーンの正体も暴露して……。

「コーンの正体を知った姉ちゃんはむしろ興奮していたな」

次の画像は管理局の制服を着た俊也と母桃子の[写真]。

「入学式みたいですね」

「うん、なんだかんだって母さんは応援してくれたからね」

次の画像。病室での一枚。

「プレシア母ちゃん……」

「プレシア……」

はかなげに笑うプレシアがそこには映っていた。

俊也とコニースは次々に画像データを確認していく。

レジアス中将とその娘であるオーリスちゃんと撮つたもの。ランスター提督と共に撮つたもの。

コーンとティーダと共に撮つたもの。

「あ、この画像つてば結構な激レアですね」

「そういえばそうだね。思えばすごい大物と知り合いだよなあ」

やや緊張した面持ちの俊也。その隣に立つ女性は緊張など一切見えない笑顔だが。

セミロングの金髪、服装は管理局の制服ではなく私服である」とからプライベートであることが分かる。

その見惚れるよつたな美しさはもちろんだが更に田を引くのはそのまま瞳だ。

虹彩異色の瞳。その意味は次元世界の多くの人間が知ることだらう。

オリヴィア・ゼーゲブレヒト。

歩く理不尽と畏れられる聖王家の二女。俊也の直属の上司だ。  
そして一人の後ろに立つ初老の男性こそがまじつとなき聖王陛下である。

「思えば天皇陛下と写真を撮つてゐるよつたものだもんない」

確かにリースが言ひよつに激レアであることは間違いない。

次の画像は出向先でのもの。

「カンナ三佐にトレーナーか。結局トレーナーには負け越してゐるな……」

苦笑する。

椅子に座つてコーヒーを飲んでいる桜色の長髪が特徴的な美人が出向先、地上75部隊の部隊長であるカンナ・セット三佐。

その隣でオレンジジュースを飲んでいる綺麗な銀髪の少女が出向先の相棒であるトレーナー・サンク一尉。

ちなみにこの正しく小さな少女であるトレーナー尉は十一歳でランクはA+。しかし模擬戦でランクSの後也を真正面から下した猛者だ。

「これは……あああの悪夢の後ですね」  
「そうだね。一人とも良い顔してる」

ボロボロになつたオリヴィアと同じく、ボロボロになつてゐる少女が笑いながら抱き合つてゐる。

ピンク色の髪にまだ幼い顔。将来間違ひなく美人になると確信で  
きる可愛い女の子だ。いや、実は少女ではないのだが。

このピンクの髪の女性の名はキヤロ・ル・ルシエ。階級は少将。  
ミッドの抑止力と言われるミッドの最高戦力。『怪獣総進撃』『怪  
獣大戦争』などと呼ばれる色々ぶつ飛んだ魔導士だ。

ちなみにこ画像はオリヴィアとキヤロが本気の模擬戦をして無人  
島を一つ海に沈めた後なのだ。

「この一人の模擬戦中継されましたよね」

「うん、下手な映画より迫力あつたよね。サイヤ人と怪獣軍団の戦  
いだもん」

感概深げに画像を見るが一人がベッドを抜け出した理由はこれで  
はない。

いや、『画像データを見る事が目的なのがミッドで撮つたもので  
はなく地球で撮つたものを見るために抜け出したのだ。

「……アリサ」

映し出された画像には勝氣そうな金髪の少女と苦笑した俊也が映  
つていた。

アリサ・バニングス。掛けがえのない親友。友情だと恋愛感情  
だとかを通り越して肉親にも近い感情を持っていた。親友にして恩  
人。失つてしまつた大切な大切な人。

「俊也……」

「……ありがとうリース」

顔が強張つていいくのが分かつたがリースが手を握つてくれたので少し落ち着いた。

「……雪」

心が乱され、逃げるよつに次の画像を開く。  
そこには俊也に抱つこされ笑つている愛しい姪。

「兄ちゃん……」

優しい笑みを浮かべている兄、恭也。

「忍義姉さん……」

兄嫁である月村忍。兄と同じよつに優しい笑みを浮かべている。  
……そして。

「……すずか義姉さん」

紫がかつた長く艶やかな黒髪には随分と前に誕生日プレゼントとして贈つたヘアバンドをしている。

抜群のプロポーションを誇る姉の親友にして兄嫁の妹にして夜の一族の盟約を交わし生涯の友となつた特別な人。

孤独になるはずだつた幼少期。この人が常にかまつてくれていたから孤独に泣かずに捻くれずに育つたと思う。

「紫がかつた長い黒髪、大きな瞳。すずかの特徴に一致します」

「だけはやはては同じ年と言つた。はやはてと同い年と言つ事は俺と同い年という事。学校に月村姓はいなかつた。同姓同名とも考えられるけど、月村と言つ名字から考へるとその線も無いと思つていい。月村は普通の家系じゃないから」

「すずかは美由希と同じ年。この時代では高校生です。はやはてが自分と同い年と言うには無理があります」

「……わからないな。姉ちゃんとすずか義姉さんは図書館によく行つていたからはち合わせる事はわかる。でも。年齢がどうしても合わない」

「確認するためには接觸するのは危険すぎますし……」

「傍観……するしかないのかな？ なんだろう、何か大事な事を見落としている……そんな気がする」

「どうしたものか……あつ帰つてきましたね」

二人の出した結論は分からぬといつものだ。  
サーチャーを飛ばすにしても確実にコーンに気づかれる。

「どうしたものか……あつ帰つてきましたね」

玄関からドアを開ける音が聞こえた。  
案の定シグナム、ヴィータ、シャマル、ザファイーラの四人が帰宅シリビングに入ってきた。

「おかえり。ご飯温めよつか？」

「それともお風呂にしますか？」

詮索しない事に決めている二人は何もない風に語りかける。  
が、騎士達四人の表情がいつもと違つてゐる事に気が付き首をかしげる。

「どうした……おつとー。」

突然ヴィータが俊也に抱きついてきた。  
胸に顔を埋めているため表情は分からぬ。

「あらあら……こつになく積極的ですね」

リニースが笑う。

ヴィータはあの祝いの日以来俊也を意識するようになつた。  
一緒に風呂に入るのも恥ずかしがり行動の一一つが初心な乙女  
という風になりとても微笑ましい限りだつた。

俊也は気が付いていないが人生経験豊富なリニースはヴィータの恋  
心に気が付いていた。そのためこの抱きつくという行為にテンション  
を上げた。いつになつても女は恋の話が大好物なのだ。

「俊也、リニース……お前らはあたし達のはやての味方だよな?」

絞り出すよつなヴィータの声にさらば首をかしげる。

「今さら何言つてるんだよ。俺達はみんなの味方だよ

ヴィータの頭を撫でながら幼子に言つて聞かせるよつな優しい声で  
俊也は嘘いつわりのない本心を言つ。

「……すまないな、戯言だ。忘れてくれ

シグナムはそつ言い束ねていた髪をほどき床に座つた。どうやら  
ひどく疲れているようだ。

「俊也君、リニース……高町なのはって名前に聞き覚えあるかしら?」

シャマルの問い。緊張した騎士の面々。

対する一人は今度は別の方向に首をかしげた。

「聞き覚えは無いけど。家族になのはって名前はいないし。高町の親戚に子供はいないし」

「…………そうですか。では次です、アルフと叫う名前は?」

「いえ、聞き覚えはありませんね」

「最後です。フェイド、フェイドといつ名前は?」

シャマルの顔は真剣そのもの。シグナムも同じだ。狼形態で表情が読みにくいザフィーラも顔が見えないヴィータも同じだろう。

「人物名ですか? 私達の携わっているプロジェクト名はフェイドですけど、人物名なら知らないですね」

「俺もリニースと同じだよ。…………どうしたの皆?」

シグナム達は驚愕の表情を浮かべている。

生睡を飲み込んだのはヴィータだ。抱き合っている俊也にはわかつた。

しかし、騎士達の質問の意図も驚愕の訳もわからない。

「…………俊也、リニース。私達はお前達を信じている。ただ……もし、もしもだが……。いや、いい。忘れてくれ」

どこか居心地の悪い空氣の中俊也はヴィータの頭を撫で続けていた。

新たな疑問（後書き）

俊也世界最強の魔導士はキヤロ。

## 動き出す管理団（前書き）

今更ながらバイクスに写真撮影機能と動画撮影機能はあるのだろうか・・・・。

次元航行艦アースラのミーティングルーム。

ここに集まつた者は皆険しい顔をして映像を眺めていた。視点はレイジングハート。機転を利かせた彼女は襲われてからアースラに保護されるまでの間を映像に収めていたのだ。

「……分からないな」

黒髪の小柄な少年、クロノ・ハラオウンは顎に手をあて考え込む。場面は丁度ヴィータがなのはに向かつてギガントシミュラークを叩き込もうとしている所だ。結局寸止めと言う器用なまねをして当たる事はなかつたのだが。

「ユーノ、どう思う？ 君ならあの攻撃防げたか？」

「……難しいと思つ。時間をかけて障壁を練れば可能性はあるかもしれない、ほんの少しだけど。でも、とっさに防ぐつとするなら無理だと思つ」

「僕も同意見だ。あれは僕だつて防げない」

場面が切り替わる。

なのはの胸から生えていた腕は既に消え失せ、ユーノのどうしたものかという困惑した表情もしつかりと映つている。

遠くでは増援で現れた剣型のデバイスを持つ騎士とおそらく使い魔であるう犬耳の男がフェイトとアルフと激しい攻防を繰り返している。

そして先ほどなのはを襲つた鉄槌の騎士と名乗る少女、即ちヴィータがユーノの前に降り立つ。

『くつ……』

なのはを庇うように前に立っているためユーノの顔は見えないが、おそらくこの危機的状況に強張つているだろうことが想像できる。しかし、ヴィータの行動は予想外のものだった。

『そう身構えるなよ。あたしに攻撃の意思はねえよ』

『信じるとでも?』

『そりゃあそудだな。別に信じてもらおうなんて思っちゃいねえ。だから今から言う言葉を信じなくてもいい』

画面に映るヴィータは小さく笑う。

『いいか、安静にしていれば一週間もしないうちに全快する。それまで魔法行使はよせ。バリアジャケットを開けるのも駄目だ。なるべくリンカー・コアを刺激しないように安静にしてろ。それから、激しい運動もあまりお勧めしない。リンカー・コアも内蔵の一部だ。臓器に負担をかける事は止めた方がいい。それから煙草と酒も……いや、これはガキには関係ねえな』

『え? 君は何を言つているんだ!?』

驚くのも無理は無い。ヴィータの口から語られるのはなのはを気遣つたものだ。一日でも早く回復できるよう的にアドバイスを言う。そのアドバイスを襲つた張本人が言つものだから訳がわからない。

『うるせえ黙つて聞いてろ。レイハ、お前の御主人は大事ない。軽いショック症状はあるかもしれないけどな。気絶したのは恐怖からだろうが……まあ漏らさなかつただけ優秀だな』

【……意図が分かりかねます】

『あたしだつて現状把握できていないんだからじょうがな……！  
ちっ！』

ヴィータは急に表情を変え先ほど放った鉄球を取り出す。

それに身構え覚悟を決めるコーノだがその鉄球はコーノにも向かわず、フェイトにもアルフにも向かわずに真っ直ぐにシグナムに向かい飛んで行つた。

『え？』

『くつ……！ どういづつもりだ！？』

フェイトは呆気にとられた顔でヴィータとシグナムを見比べる。  
九死に一生を得たのはフェイトだ。

シグナムの必殺技ともいえる紫電一閃でバルディッシュを碎かた。  
次のシグナムの攻撃で勝負が決まる、そして剣が降り下されようとしている正にその時、ヴィータの誘導弾がシグナムの攻撃からフェイトを救つたのだ。

『お前……何故管理局の味方をするー。』

怒気を孕んだ声が映像から響く。

『うつせえぞバトルおっぱいが！ いいか、そこの金髪の名前はフェイト・テスタークッサ。アリシアの妹だそうだ！』

ヴィータの声でシグナムが動搖している事がわかる。映像には映つていながらザフィーラも同様だ。

『……どういふ事だ？』

『知るか！ こつちか説明してほしいくらいだよー。』

シグナムは追撃を止める。

『……潮時だな。引くぞ。貴様フェイトと言つたか……金髪、赤い瞳……確かにあいつの言つていた特徴に符合する。そつか……妹がいたのか』

シグナムが考へ込むよつた顔をしてから数秒もせずに封鎖結界が解かれる。

『じゃあな。最後に本当に俊也を知らないんだな？』

ユーノは無言で首を横に振る。

ヴィータはユーノの返答を確認すると飛び立つて行つた。そこで映像は途切れている。

「さて、本当に分からぬわね」

難しい顔で考へ込んでいるのはアースラの艦長であるリンディ・ハラオウン提督。彼女もこの映像の不可解さ、正確には敵の不可解さに悩む。

敵の正体は見当がつく。彼女が夫を失つた事件の元凶である闇の書。結界が解かれたときに確認できた映像で書は確認できている。ならば敵対した者たちは闇の書の騎士、ヴォルケンリッターであると見て間違いないだろう。しかし、管理局がつかんでいる情報で

は騎士達は感情が乏しく、命令を着々とこなす人形のようであると記されている。

しかしどうだろう？ 実際の騎士達はどうみても感情豊かだ。

「リニースやアリシアの事も知ってるし……訳がわからんないよ……」

アルフの言う事はもつともだ。

リニースとはフレシア・テスタークサの使い魔。その存在を知るのはフェイトとアルフ、虚数空間に落ちたフレシア、そして事件に関わったなのは、ユーノとアースラクルーしか知らないはずだ。

極めつけはアリシア。彼女の存在はフェイトとアルフすら知らなかつた。それをヴォルケンリッターが知っているはずが無いのだ。

「私は妹と名乗つた。でも、本当の意味で妹じゃない。正しくはクローンだから……。でも、あのハンマーの子も剣の女の人も私が妹だと言つたら納得した。……これはおかしいとおもう」

フェイトの言う事も正しい。

本来アリシアに妹はない。フェイトは違法技術によって生み出された人造魔導士、クローンだ。その事実を知る者は限られているが……。

騎士達の言葉からアリシアとリニースを知つていると仮定する。ならば妹など存在しない事も当然知つていいはずなのだ。

「なのはを気遣う言葉の意味も分からないな。あの赤い騎士、殺そ  
うと思えば殺せたはず。でも表情は辛そうに見えるんだが……。そ  
れに明らかにフェイトの危機を救つている。理由は……多分、アリ  
シアの妹だと聞いたからだ」

騎士達にしても不本意な命令だったという事だろうか？

何故アリシアの妹を庇う必用があるのか？ アリシアとの関係は？

「一番分からるのは？ 高町俊也 ね。こればっかりはなのはさんが起きてから聞くしかないか……」

闇の書はリンディにとつても因縁のあるロストロギア。なるべく迅速に事を片づけたい。……被害を大きくしないために。

「……人手が足りないわね」

嘆いてもしょうが無い。魔導士不足は解決しない悩みだ。  
もし人手が足りていたら被害を出さずに収束できるかもしがれない。  
この騎士達は今までとは違うよつでこちらを気遣っている。

騎士達がその気になつていればなのははあのまま潰されて死んでいただろつし、フヨイトだつてあの剣に切り裂かれていたに違いない。そしてユーノもまた同様に無事ではすまなかつただろう。

「……無いものはしょうがないか。一応増援の申請はしてみましょ  
う」

せめて私と同じ思いをする人が出ないように尽力しよう。リンディのできる精いっぱいだった。

「追跡も失敗しちゃつたし・・・・・・  
「氣を落とすなエイミィ。君はよくやつたぞ」

しょんぼりと肩を落としているのはエイミィリ・リミヒタ。アースラのクルーにしてクロノ執務官の補佐官を務めている。

「でもでも、なんであのちびっ子はクロノ君の事ちゃんと付けで呼ん

だんだるうね？

「・・・・・僕に聞くなよ

クロノのため息がやけに響く。  
ヴォルケンリッターとの対峙、闇の書を巡り管理局が本格的に動  
き出した。

## 動き出す管理局（後書き）

当然騎士達はクロノ＝女だと思っています。

## ナシトマツア（前書き）

ナシトマツア三場の一歩手前まで来ました。

## セットアップ

あれから騎士達は妙によそよそしい。

嫌悪などの感情は感じられないが確実に避けられている。いや、どう接して良いのかわからないというのが正しいようだが。ボロボロになって帰ってくる事が多くなつた。何かしら荒事をしている事は間違いないだろう。

深くは詮索しないが……心配である事は変わりは無い。

はやは、ちょっと危うい。

騎士達と触れ合う時間が減つたため俊也とリースに甘えるようになつた。それはいい。

しかし、ちよつと度が過ぎていうように感じる。

食事も風呂に入るのも一緒に、寝るのも三人で。

最初は姉として振舞つていたはやでだが今の姿はどうか……。俊也のついて回るその姿は妹、いや、まるで親鳥の背を必死に追う雛鳥のようだ……。

はやての件も、騎士達の件も重要だが俊也とリースはとある危機に頭を抱えていた。

「……………」  
「……………」  
「……………」

【……………】

はやてから間借りしている部屋で緊急会議だ。

「どう誤魔化せば……」

【リースは猫形態になればいいのでは】

「いや、姿を隠すのははやてが不審がるでしょう。私と俊也を紹介するのを楽しみにしているみたいですし」「どう事は必然的に俺のビーストモードも却下か」

悩む。悩みに悩むが状況はどう考へても詰みだった。

【危険は伴いますが外出するのは】

「それも却下だよレイハ。シグナム達がいないのにここで俺達も出席しなかつたらはやてが悲しむ」

キッチンでははやてが上機嫌で今夜の仕込みをしている最中だろう。

「避けられない……か」

「覚悟を決めるべきです。それで疑問も解けます」

二人はため息を吐く。

今日は八神家に訪問者がある。

はやてが上機嫌なのはそのためだ。なんせ友達を家に招くのは初めての経験なのだから。

今夜、月村すずかが遊びに来る。

時間ももうない。夜も更け始めている。すずかがやつてくるまでもう時間はない。

「さて、吉が出るか凶が出るか……。すずか義姉さんなのか……それとも」

【マスター】

レイハが反応する。

俊也とコースも機敏にそれを感じ取った。

「誰だ？ 魔力を垂れ流して……」

感じ取つたのは魔力反応。

あからさまなそれは挑発とも受け取れる。ここは管理外世界、魔力反応はありえない。

「厄介事ですか……」の時期に。最悪は次元犯罪者。良くて管理局員ですけど……」「

【確認しますか？】

「……見過じせないか。俺に覚えは無いから俺とコーノが来る事はない。うん、確かめてみよう」

方針を決定した三人は頭を切り替える。幼いながら執務官としての俊也がそこにはいた。

部屋を出、鍋の準備をしているはやての元へ。

「はやて、少し家を出でへる」「ほえ？」

俊也の言葉に一瞬呆ける。

「俊也君、なんか理由があつて外出できんのやなかつたの？」

おたまを持ったまま首をかしげるはやて。その仕草がいちいち可愛らしい。

俊也は保護されてから一度も家から出でていない。故にはやての疑問はもつともだ。

「……うん、でもす」ぐ大事な用事なんだ」

「もうちょいですすかちゃんが遊びに来るんやけど」

「それまでには帰るよ。絶対」

ふつと息を吐き苦笑するはやて。

「そりが。うん、分かった。気をつけろんやで? リース、レイハ、ちやんと危なくないうつに後也君を見とくんやで?」

それはやての優しく心配する言葉に頷くと一人と一機は家を出て行つた。

「来たか」

八神家から数分もしない公園にその魔力を垂れ流した者が立つていた。

「怪しさ大爆発ですね」

【こ】まであからさまな不審者はいつも清々しいですね】

そこに立っていたのは仮面を付けた男。どこからどうみても不審者だ。

「こ】は管理外世界だ。次元漂流者ではないな? 田舎はなんだ?」「ほら、それはお前も全く同じではないのか?」

仮面の男が笑う。

それには全く反論できない。身分を証明できないといつ頃で言えばそれは俊也もリースも変わりがない。

「まあいい。本題はそんなことではない。闇の書の守護騎士、貴様らの家族で相違ないな？」

男の意図が分からぬ。

いや、何故ヴォルケンリッターの事を知っている？ 俊也とリースの事をしつている？

(まさか……監視されていた！?)

その一つの可能性に肝が冷える。

いつから？ いつから見られていた？

突然現れた男が一筋縄ではいかない事を悟った。  
すぐに確認して帰るつもりだったが……時間がかかるかも知れない。

「そう警戒するな。目的は同じだ、敵ではないさ。さて、そのヴォルケンリッターだが今管理局と交戦中だ」

「……なに？」

交戦中？ 管理局と？ 何故？

「分からぬ」と言った顔だな。しかし、残念ながら事実なのだ。信用ならないか？ これがただの戯言ならそれでいいが眞実ならどうする？ 状況はヴォルケンリッターに不利だ。このままいけば捕まるぞ？」

「信じるとでも？」

「信じても信じなくてもかまわんぞ。だが、もし彼らが管理局に捕まつたらどうなる？あの悪名高き闇の書の騎士達だ。まず間違いなく捕縛されよくて終身、最悪プログラムの抹消だ」

「悪名高い？」

悪名高い闇の書。闇の書にいわくがあるなんて初耳だった。

「ん？なんだその反応は？まさか知らないとは言わないだろ？まさか別の世界から来たから知らないともいつまじくな？」

しかし俊也とコースは本当に知らない。

今、現在進行中念話で作戦会議中の三人だが会議は紛糾している。

(「この際いわくは置いておいた。ただこの田の前の仮面を信じていののか……）

(怪しさ抜群ですが私達を罠にかけるメリットはないはずです)  
(マスター、リニース、確かに怪しき無限大ですが、万が一話が本當なら不味い事態です)  
(はやてから家族を取り上げるわけにはいかない……)

「……決まったようだな。案内しよう」

信用はできないが見逃せない。何故このタイミングで接觸してきたのかも分からぬ。

「……なにが目的なんだ？」

「そう睨むな。敵ではないと言つただろ？お前達はただ家族を守るために管理局の邪魔をすればいい」

「信用は……うわっ」

そういう俊也を抱きあげる仮面の男。

「暴れるなよ。使い魔、先導する。ついてこい」

「……俊也に何かしたらぐびり殺しますから肝に銘じておきなさい」

「おお怖い。じゃあいくぞ」

仮面の男は大きく跳躍し駆ける。中々のスピードにて心驚くがリ  
ニスは同等のスピードで駆ける。

「ほう早いな」

「黙りなさい。俊也、大丈夫ですか？」

「ああ、中々の乗り心地だよ」

男の目的は分からない。敵ではないと言つたが味方でもないだろ  
う。

（うーん……時間をかけたらほやでが心配する……。いや、それに  
しても……）

俊也は肩に抱きあげられている。そのため比較的男の顔に近い。  
だから、妙に香る。

（香水？ シャンパー？ それにしても……良い香り……）

最高に乗り心地の悪い道中そんな事を思っていた。

「封鎖結界、……！」

【何かしら起きていた事は事実のようですね】

「嘘は言つていないと言つただろう」

田の前に広がるのは封鎖結界。しかも広域。単身で作り上げるには少々手間がかかる。

管理局ないし、魔法関係者が複数いることは確実らしい。

「さて、簡単な話だ。この封鎖結界をぶち壊し中で戦つている騎士達を助ければいい」

「……何故ここまでするんだ？ お前のメリットはどうある？」

「ふん、ここでヴォルケンリッターが捕まれば都合が悪い。實にシンプルだろ？ 案内はした、家族を守つてやるとい」

仮面の男はそう最後に言い残し転移魔法で消えた。

「……一体なんだつたんでしょうか」

「分からぬ。でも、魔法陣は田形。少なくともベルカの魔導士じゃない」

結界の中の様子は分からぬ。中にシグナム達がいるのかも分からぬ。けれども少しでも可能性があるのなら放つてはおけない。

【結界はどうしましょひ】

「ぶち壊そひ。……最悪、はやての所には帰れないな

悲しい事実だが結界をぶち壊すのだ、管理局に姿が見られない訳がない。

管理局と交戦しているのが事実ならその敵を逃がす事になる。犯

罪だ。

しかし、俊也達が捕まるよりも最悪この時代の自分達と顔を合わせる事にならうともはやてから家族を引き離す事はできない。

「……こんな事はなかつたはずだけどな。」J.J.まで大規模な結界を張られたらさすがに俺もコーノも氣づくと思つただけど

コニースの手を握る。もう片方の手にはレイハ。

(闇の書の事も分からぬ。……詳しく述べておくれべきだった)

今さら悔やんでも後の祭り。今はこの事態を乗り切る事を考える。

(別の世界から来たから分からぬ。……か)

あの仮面の男に言われた言葉がリフレインする。

(確かに別の世界から来た。……別の世界?)

J.J.にきてふと思いつく。

俊也達が体験しているのはタイムトラベル。

にわかには信じがたいがこうして体験しているのだから事実だ。この時代の自分にはち合せないよう動いてきた。その方針は間違つていないと思つ。

だがそれ以前に根本的に認識が間違つていたらどうだろ?

漫画や映画などで見られる時間旅行は一つに分けられる。

過去に干渉したら未来が変化するもの。この考えが一般的だろ?。漫画などもそういう設定のものが大半だと思つ。

ネコ型ロボットのお話や過去に飛ぶ車の映画もこの類だ。  
しかし、それだけではない。

例えば国民的人気な七つの球を巡る物語。あのお話のタイムトラベルは過去に干渉しても元いた未来は変わらない。

そう、未来が荒廃する原因を取り除いてもあの男性下着の名を冠する青年の未来は何の変化もなかつた。彼が干渉した過去は既に並行世界として彼の未来とかけ離れてしまつていた。

(並行……世界)

ドクンと大きく心臓が鼓動した。

(並行世界、パラレルワールド＝F世界。色々な漫画を読んだ、アニメも見てるしゲームもした。それを題材にするものも数多くあつた。まさか……まさか……)

「顔色が悪いですよ？ どうかしました？」

(年齢の合わないすずか義姉さん、感知するはずのこの大規模結界、考えれば色々不審なところがある………)

「俊也！ 俊也！ どうしたんですかー？」

リニースの声で我に返りる。

考えるのは後だ。今はこの結界をぶち破るのを優先させないといけない。

「アレで壊します。詠唱を頼みますね」

「分かったよ。あれの直撃を受けたら壊れるだろうしね」

そうして俊也は考え付いた一つの可能性を頭の隅に追いやりリースに合わせて詠唱する。

「アルカス・クルタス・エイギアス 煌めきたる天神よ 今導きのもと降り来たれ」

「バルエル・ザルエル・ブラウゼル」

二人の魔力がうねる。

天候操作の儀式魔法。その大規模魔法は威力も大きい。

「「撃つは雷 響くは轟雷 アルカス・クルタス・エイギアス！」」

集められた雷雲から結界目がけて雷が落ちる。

サンダーフォールという名の儀式魔法。

天候を操り本物の雷を落とす魔法だ。

自然の脅威、雷の力を甘く見てはいけない。  
魔導士が放つ砲撃など比較にならないとんでもない破壊力を秘めている。

故に、いかな強度を誇る結界だろうとその大半は耐えられず、砕け散る。

目の前の結界も例外ではなく。

轟音とともに砕け雲散する結界。

そして俊也は見た結界の中にいた者たちを。

(シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ！ そして……)  
息をのむ。隣でリースが硬直しているのも分かる。それほどまで  
の驚愕に襲われている。

(何故今まで考え付かなかつた！ くつそ……！)

二人が釘付けになつてゐるのは一人の少女。

煌めく長い金髪、赤い瞳、幼いがその姿はあまりにも似ていたの  
だ。二人の、大切な少女に。

「……なるほど。リース、ビツやラロストロギアを過少評価してた  
みたいだよ」「な……ん」

リースに声は届いていないようだ。

だが、目的は変わらない。

先ほど考え至つた事が真実であるとしても関係ない。  
ここに来た目的はなんだ？ ……家族を救つためだ。

「レイハ

【驚いてはいます。しかし、問題ありません】  
「うん……いくよ」

愛機の言葉に笑顔で答え声高らかに言い放つ。

「我使命を受けしものなり」

動搖しているのは結界内にいた者たちも同じ。

「契約のもとその力を解き放て」

第三者の介入に驚き、戦闘は中止している。

「風は空に 星は天に そして不屈の心はこの胸に 」

我に戻ったリニースは己の目的を思い出す。しかし、どうしてもあの愛娘に似た少女が気になってしまつ。

「Jの手に魔法を レイジングハート、セットアップ!」

吹き荒れる桜色の魔力。

ヴォルケンリッターは純粋に助けに来てくれた事を驚き。

「嘘……」

「そんなことって……」

「レイジングハート？ 何故……！」

「くつどうなつているんだ！？」

「あり得ない……！」

【……理解の範疇を超えていきます】

管理局側は突然のありえない来訪者に完全に思考を書き乱され打ちのめされていた。

## セットアップ（後書き）

出会つてそろそろにガチバトルに突入ですよ。

家族のために（前書き）

俊也のバリアジャケットは劇場版仕様。

## 家族のために

信じられないものを見ている。

結界を壊された事に驚いた。何者かの攻撃に警戒した。  
そして見たのだ、この攻撃を行つた第三者を。

「そん……な」

呟いたのはフェイトだ。

新たにカートリッジシステムを搭載した愛機、バルディッシュ・  
アサルトを持つ手が震える。

新たな敵は一人。そのうち一人を見て眼を見開く。

「リ……ニス」

アルフもお化けを見たような顔で硬直している。

そこにはかつての教育係、もう一人の母とも呼べる人が立つてい  
たから。

「え？　え？　どうして？」

対するなのはは混乱の極みにあつた。  
信じられないものを見たのはなのはも同じだ。

同じく大混乱の極みにあるのはヨーノとクロノも同じ。

フェイトとアルフと違い、彼女らが釘付けになつてゐる女の子…

…？ 男の子……？

いや、性別はこの際どうでもいい。問題はその容姿とデバイス。

詠唱の声は聞こえた。結界内にいた者とモニターしていたアースラのクルーも聞いていた。

だからこそ信じられない。あの子供はデバイスの名前を何と言った？ 詠唱の言葉をどこかで聞いた事はないか？

戦場に乱入した二人はふわりと飛びあがる。  
戦場はまだ硬直したままだ。

「おい……お前、何で？」

驚いているのはシグナム、ここは俺とリニス達も同じ。上手く言葉が発せないようだ。

<シグナム、ここは俺とリニスが受け持つ。騎士達ははやての所へ戻つて>

<……援護は感謝する。しかし、お前達を残して撤退できるわけないだろう！？>

<大丈夫だよ、俺とリニスはこうみえて強い。特にリニスは頭一つ抜けてる。……俺ははやてが好きだ、みんないるあの家が好き。……帰らないつもりはないから>

<しかし……！>

＼信用してくれ。シグナム達の深い事情は知らない。けど、管理局に捕まるわけにはいかないだろう＼

＼ぐつ……＼

＼もう一度言づ。信用してくれ……それでももし俺とリースが明日まで戻らないようなはやてに伝えてほしい……＼

しばしの沈黙。この戦場の誰もが動けない。

フェイトとアルフはまだ我に返っていないし、騎士達も俊也と念話をしているシグナムを除きまだ混乱している。

そしてなのはとクロノとユーノの三人は俊也の事を食い入るように見つめていた。

（レイジングハート……形状は似ているけど細部は違う。でも、二機あるはずがない！　なのはに僕があげた一機だけのはずなのに何故……）

（隣の女は使い魔だろうか？　ここにきて守護騎士の仲間……協力者がいたというのか。それにしてもあの子供……）

（ふえ……なんでのあの子もレイジングハートを持つてるの…？　それに……それに……）

白を基調としたバリアジャケット。どこかの制服を連想させるそれは、なのはの通う私立聖祥大学付属小学校の男子の制服によく似ていた。

栗色の髪の毛、顔立ち、なのはによく似ていた。

双子と言つたら誰もが信用する。それほどまでに一人はそつくりだつた。

だからこその大混乱。もっとも、俊也は目の前の自分によく似る少女を見て先ほど至つた推測が間違いないものだと悟る。

「……引くぞっ！ 俊也、リース……」武運を一

悔しさにゆがむシグナムに笑顔で頷き、離脱していくヴォルケンリッターを見送る。

シグナムは俊也の提案を受け入れる事にした。

反発はあった。特にヴィータは最後まで反対したが結局は俊也に説き伏せられた。

「必ず帰つてこい。主も、俺達も待つてこい」

「また一緒にお風呂に入りましょうね……」

「俊也、リース……帰つてこなかつたらぶつ飛ばすからな。だから、絶対に帰つてこいよ……」

騎士達が全員離れた頃、俊也とリースは結界を張りなおす。無論管理局の足止めの為。

「まさか、管理局と対立する日がくるとは……」

「俊也、状況は飲み込めませんが私は貴方に従います」

呆けている間に騎士達を取り逃がすという致命的な失敗を犯した管理局側。

苦虫を噛み潰したような顔のクロノは俊也達と一緒にメートルほど距離を空けて問う。

「……僕は時空管理局の執務官、クロノ・ハラオウン。……何が目的で騎士達を逃がしたのかは知らないが、抵抗しないなら君達には弁護の機会が与えられる」

クロノという言葉に一人が反応する。

リースは必死に現状把握をしようと頭をフル回転させ、俊也もまたこの場を乗り切りはやでの元に帰る事を考える。どう乗り切るか……。

「クロノさん……残念ながら無抵抗と言つわけにはいかないかな」「あ、あのー」

会話に割り込んできたのはなのはだ。

必死で声を上げ、どこか緊張した面持ちで俊也に話しかける。

「わ、私は高町なのは！　あ、あなたは…………？」

（高町なのは…………確か、シャマルが知っているかと聞いてきた事が  
あつたような。…………なるほど、この子が、”俺”か）

「執務官の会話に割り込むのは感心しないよ。ほら、クロノさんも困つてゐる」

「こやー？　い、いめんクロノ君…………」

「よんぱりとかの姿は中々可愛らしい。皿画皿贅と云つわけではないが。

「こんな時はどう挨拶するのが正解だろ？　初めまして、もう一人のボク、とでも言おうか。うん、母さんによつくりだ。将来は母さんに似て美人になるね」

「え？　お母さん？　え？」

「俊也……よもや」こは私達の過去ではないのですか？」  
さすがリース。多分そうだと思う。あの人人がこの世界のクロノさ

んで、この俺にソックリなのがこの世界の俺だらう。レイハ持つて  
るし、

険しい顔のリース。俊也と同じ結論に至り心中で愕然としている。

「俺の名前は高町俊也。初めてまして、なのは」

俊也の自己紹介で管理局側に動搖が走る。

今まで調べても調べても分からなかつた謎の人物高町俊也が突如  
目の前に現れたからだ。

クロノ達からしたら先ほどからの急展開についていけないという  
のが現状だらう。

<敵はクロノさん、なのは、ユーノ、それに犬耳のお姉さんに……  
この世界のアリシア。どうみる?>

<なのは……はこの時期の俊也の実力と=と仮定します。これは脅  
威になり得ません>

<この時期の俺はシールド、砲撃、誘導弾くらいしかできなかつた  
から。戦力として見なくていいだらうね>

<未知数はアリシアと使い魔です。アリシアはフルバッケでしたが  
……この世界のあの子はデバイスの形状からおそらく前衛。使い魔  
は……徒手空拳ですから同じく前衛でしょう>

<そしてクロノさん。俺はクロノさんに一度も勝った事が無い……  
エターナルコフインを撃たれたらこちらの負けだ>

<前衛、前衛、独立汎用、後衛、補助。中々にやりにくい相手です  
……でも、一番やつかいな人は変わりないですな>

「でも、捕まるわけにはいかないんだ。抵抗させてもひいきょクロノさん」

そう言いレイハを振るひ。俊也の足もとに魔法陣が広がり、黒いマントが具現化される。風になびくそのマントはフロイトのマントにそっくりだった。

「どう? 」のマントかっこいいでしょ? 「

「……なら、僕は仕事をしないといけないか

背中のマントを見ながら言ひ俊也。ビックリ気の抜けた俊也と対照的にクロノは臨戦態勢をとる。

そのクロノ動きを見て、まだ若干混乱しながらも他の壁も身構える。

「リース」

「はい」

左手に小さな魔力球を造る俊也。

(……誘導弾? でも数が一つでは……)

それを誘導弾と判断したクロノ。しかし、その判断は大きな間違いだった。

それをぽいつと後ろに投げ捨てる。

その不可解な行動に眉根を寄せたクロノだが刹那に口の辻闇さを呪つた。

「フラッシュスフィア ブレイク！」

突如としてその魔力球が碎け散り眼が眩むほどの閃光が結界内を包む。

真っ白な世界。皆視界を奪われる。そう、背を向けている俊也とリニースの二人以外の全員が。

「レイハ！ リニース！ いくぞ、チームライトニングスターズ、アリシアがいなくとも勝利をもぎ取つて見せる！」

「もちろんです俊也！」

【了解ですマスター】

完全に頭を切り替える。

管理局最強と名高い使い魔と管理局の白い魔獣と呼ばれる執務官は久しく離れていた戦場に降り立つた。

「レイハ！」

【了解です。ソニックムーブ】

「ソニックムーブ！」

状況は圧倒的不利。

しかし、優しい彼女の待つ家に帰るため、桜色と金色の閃光は戦場を駆ける。

家族のために（後書き）

先手必勝太陽拳！

## 激突（前書き）

クロノの扱いが酷い小説を結構見ますけど作者はクロノ好きです。

## 激突

俊也は言つ、師が優秀だつたからこそ自分は魔導士として大成できたと。

技術者としてではなく魔導士として俊也を鍛えた人物は大きく四人。

クロノ・ハラオウン執務官、ティアナ・ランスター提督、オリヴィア姫殿下、ユーノスクライア司書長の四人。

この大物四人の中で最も戦いに弱いのは誰か？

氷結能力を持つデバイス、デュランダルを持ちバリバリの一線で活躍する執務官であるクロノ。

提督であるため一線は退いているが、まだまだ実力は衰えずクロノを軽くあしらうほどの強者であるティアナ。

魔導士としての活動はしていなく無限書庫の司書長兼考古学者として活躍するユーノ。

オリヴィア姫殿下は人外なので除外する。

誰と戦いたくないかというと俊也とリースはユーノと答える。

あまり華やかな能力は持っていないがユーノの力は脅威の一言だ。

結界魔導士という珍しい能力を持つユーノ。ランクは九歳時点でのAと優秀だ。そして結界魔導士としてユーノより優秀な魔導士を見たことが無い。

防御という一点に関してはまさに鉄壁。Sランク同士が全力で戦つても壊れない結界を張れるなど稀有だ。

派手な能力ではないためどうしても陰に隠れてしまうが十分に最

高位の魔導士である。まあオリヴィアが全力で殴つたら結界は砕け散つたが。

全力で守りに回られたら厄介なことこの上ない。

防御を突破するのに結構な力を要するし、更にその間は敵の攻撃もさばかなければいけない。これはかなりキツイ。

故に戦いたくない、戦いにくい相手はユーノなのだ。

（俺の世界、ユーノは司書長。魔導士としての活動はしていない。  
だからユーノの全盛期は今！）

二人はユーノの前に降り立つ。

「……くつ！」

まだ視界がぼやけてるユーノは眼を擦りながらも身構える。立派だがここが本物の戦場で、俊也とリースが犯罪者ならユーノの命は既に無い。

「……久しぶり、親友。相変わらず可愛い顔してるね  
「可愛さなら負けてませんよ俊也」

ユーノの顔を見て思わず顔が綻ぶ。

魔法との出会いは同時にユーノとの出会いでもある。

親友にして師匠。最初俊也の事を女の子と勘違いしていた、可愛い顔した男の子。

だが、容赦はしない。

「リングバインド！ チェーンバインド！ ストラグルバインド！  
「ライトニングバインド！ チェーンバインド！ ストラグルバイ

ンド！」

「え？ うわわっ！ うわっ！」

まさに雁字搦め。

襲いかかるバインドの嵐になすすべもないユーノ。

「クリスタルケージ」

トドメといわんばかりに一重のクリスタルケージ。もうユーノはピクリとも動けない。

「一番の懸念はこれでクリアです」

「奇襲成功だね。……そろそろ視力が戻る頃、クロノさんにだけは十分に気をつけて……」

先手を取られたクロノ達はよつやく動き出す。

数秒もしないうちにユーノがやられて焦つているようだ。

「ユーノ君！ もうついきなり攻撃してきて……お話を聞かせてもらうから！」

なのはがレイジングハートを構える。

「リニス、次の一手である子は落ちる。できれば未知数のアリシアと使い魔をなんとかして……」

「二人がかりでクロノですね。確実にいきましょう」

作戦を確認すると俊也もレイハを構える。

「レイハ、カノンモード」

## 【オーライマスター。カノンモード】

砲撃用に姿を変えるレイハ。俊也はトリガーに指をかけ同じくレジングバートをこちらに向けるなのはと対峙する。

「ディバイーン……バスター！」

「ディバイン……バスター！」

二つの桜色の光が激突する。

バスターが放たれると同時にリースは未だ上手く動けないフェイントとアルフの元へ飛ぶ。

作戦ではすぐに俊也もリースに追いつき、連携して一人を倒してからクロノに挑む予定だった。目くらましが効いているうちに迅速に終わらせる必要がある。時間がたてばたつほどに俊也とリースは不利になるのだから。

しかし、思うようにいかないのが戦場の常か……。俊也はすぐに驚愕に眼を剥くこととなる。

「いやっ……くう~互角……かな？　でもあの子もディバインバスターなんだね」

【拮抗します。全への互角ですマスター】

片目を閉じ負けないように必死に魔力を込める。  
自分と同じ技に驚く余裕もないようだ。

対して焦るのは俊也だ。なのはの砲撃と拮抗してしまっている。  
ありえない。

この時期の俊也はまだまだ魔導士としては未熟だ。もちろん術式の練りも甘いし魔力の運用も下手だ。  
故にバスター拮抗する事なく俊也が圧倒するはずだった。

俊也は体は小さくなつたが能力も九歳当時に戻つたわけではない。もちろん身体能力などは九歳の子供と同じだが、培つた経験や知識が消えたわけではない。

俊也のディバインバスターは九歳当時よりもより洗練されている。威力、発動時間、体にかかる負担の軽減、その全てがなのはのバスターより上回つてしかるべきなのだ。

しかし、結果はどうだ？ 俊也が手加減しているわけではない。管理局の花形、高町俊也執務官のバスターと全く同じである。なのにこの結果、予想外だ。想定外にもほどがある事態だった。

「馬鹿なつ！ 拮抗！？ 我のバスターと同じ威力！？」

【全くの互角です。驚きました】

打ち合いでは決着がつかない。  
互いに砲撃を止める。

「いくよつ！ アクセルシューター！」  
「読み違えた……！ クロスファイア……ショートー！」

次の一手はお互いに誘導弾。

（なのはを上方に修正。実力未知数。バスターが拮抗なんて笑えない「冗談だ……」）

なのはの誘導弾を回避しつつ近づく。おそらく近接でならこいつらに分があるであろうという予想からだ。  
遠距離での打ち合いで決着はつかない。ならば近づいて叩くしかないが……そう上手くはいかないみたいだ。

「……クロノさん」

「なのは、君は下がつて僕の援護をお願いする

立ちはだかるのはクロノ執務官。

性別の違いなどあるが、クロノの実力は身にしみて知っている。正直真正面から戦いたくない相手だ。

「さて、僕が相手になる。闇の書との関係、吐いてもらひついで……捕まる気はないと言つたはずですよ」

クロスレンジで対峙してから確認できた。これは嬉しい誤算だ。

(デュランダルじゃ……ない!)

デバイスが違ったのだ。俊也の師であるクロノとデバイスが違う。ならば、少しは勝機が見えてくる。

(出し惜しみはできない……!)

「レイハ、フルドライブ。……エクセリオン!」

【オーライ。エクセリオン】

クロノと対峙するや否やすぐさまフルドライブ。

レイハは再び形状を変化させる。その姿は杖というより槍に近い。俊也がフルパフォーマンスで戦えるエクセリオンモード。逆に言えば全力全開で挑まなければ負ける相手と言つ事だ。

それに驚愕するクロノとなのは。それはレイジングハートにカートリッジを搭載した際に新しく加えられた機能、いわば奥の手だから。

「な、なんで!?」

「どうして君がそれを……」

動搖する一人、致命的な隙ができた。……見逃す手は無い。

「一撃必倒！ ディバインバスター！」

練り上げた魔力を拳で打ち出す。

遠距離のバスターより威力は劣るが、それでも無視できない威力を持つている。

とつさに練り上げた為術式も甘い。故に……。

「くつ……危なかつた」

「く、クロノ君……」

クロノは完璧に防いだ。想定内。だが、ここからは相手も想像しないだろ渾身の一撃を放つ。

そしてそれは見事にシールドを碎きクロノを殴り飛ばす事に成功する。

「ぐあつ……！」

「きやつ！ クロノ君！」

俊也は真っ直ぐに拳を振りぬいた。いわゆる正拳突きといつやつだ。

大地に足がついていないから本来の威力には一步及ばないが、この正拳は俊也の近接において最高の威力を誇る体術である。無論、ただの正拳突きではない。

「…うちの世界のクロノさん、断空という技術はご存知ですか？」

オリヴィア直伝、地獄の特訓の末に身に付けた。

「御神の才能無くとも、霸王流には本の少しだけ適性があったみたいですね。ま、本当にちょっとだけですが、うん、本当に……」

苦痛に顔を歪めるクロノとクロノを心配するのは。

クロノは相手の力量を大幅に上方修正すると呂めきながらもテバイスを構えた。

「だ、大丈夫なのクロノ君？ すつごくいいの貰っちゃったみたいだけど……」

「心配ない。……もう油断しない」

クロノの眼を見て生睡を飲み込む俊也。どうやら本気にさせてしまつたらしい。

(デュランダル無しにしてもクロノさん相手にどれだけ戦えるか……)

願わくば先ほどの攻撃が程良くクロノの足を引っ張るよつに、と願いながらレイハを構えなおした。

**激突（後書き）**

砲撃でなのはさんに勝てる人はユニークンしたはやてくらいしかいな  
いと思つんだ。

## アルフの勧架

俊也がクロノを本気にさせ焦っているリニースもまた焦っていた。

「リニース……会いたかった」

眼を潤ませるフェイト。

「どうにいってたんだい。すっごく心配したんだからね」

同じくぐずるアルフ。

（うーん……この世界の私と勘違いしているという事でしょうね）

戦うところ雾岡氣ではない。リニースも涙目の女の子一人を殴り倒すほど鬼畜ではないし、愛娘と同じ顔は正直殴れない。

「アリシア……」

思わず声をかけるが、愛娘の名を口にした瞬間一人が凍った。

「リニース？ 何を言っているんだい……？ フェイトとアリシアを間違うなんて……」

「フェイト？ 誰の事を言っているのです？ その子はアリシアでしょ？」

その言葉でフェイトの顔に絶望が張り付く。

「はは……冗談にしては笑えないよ」

「……冗談？ それよりもあなたの名前を聞かせて下さい」

今度はアルフの顔に絶望が張り付く。

「は……なんだい、リース。あたしもフェイトの事も分からぬのかい？」

地の底から響くような暗い声。

アルフは拳を振るわせながら喋る。

「すみません、私はあなたの事を知りませんし、フェイトという子の事も知りません」

その言葉が決定打だつた。

リースは本当に一人の事は知らない。目の前のフェイトもこの世界のアリシアだと勘違いしている。他意は無い。しかし、アルフにはそんなリースの事情など知つた事じやなかつた。

「うわあああ！」

「…………！」

声を張り上げ拳を振るうアルフ。

リースはそれを何なく回避するが、突然のアルフの豹変に驚いた。

「こいつ……リースがフェイトの事知らないわけ無いだろう！ あたしの事を知らないわけ無いだろう！ この偽物っ！ あんなに傷ついてそれでも前に進もうとしているフェイトにこんな仕打ちつてないよつ！ 絶対に許さない……これ以上フェイトを悲しませるような事をするなああああつ！」

魂からの叫び。涙を流しながら拳を振るう蹴りを放つ。型も糞もあつたものじゃない滅茶苦茶なものだったが、妙な迫力にリニースは圧倒された。

フェイトを知らないとリニースに言われた。

これはアルフにとつて見過ぎでない。フェイトも傷ついただろう。彼女は自分の大好きな主人に害なす者を許さない。だが、今回は少しばかり私情も混じる。

群れからはぐれて死にかけているアルフを救つたのはフェイトだ。命の恩人でもあり同時に大好きな主。二人に主従のしがらみは無く姉妹のように育つた。

姉のようで、妹のような……フェイトの為なら躊躇わざ命を捨てられる。それほどまでにアルフの中でフェイトは大きな存在だ。ではリニースとはアルフの中でどういった存在だろうか？

フェイトとアルフに魔法を教え、食事を作り、一緒に風呂に入り、寝るときは本を読んでくれて、朝は優しく起こしてくれる。

悪戯を知れば叱り、良い事をすれば笑顔で褒め、抱きつけば抱きしめ返してくれる。

リニースの食事が好きだった。綺麗な笑顔が好きだった。頭を撫でられたら安心した。抱きしめてくれたときに香る甘い匂いが好きだつた。

今でこそ見た目は成人女性のアルフだが、フェイトの使い魔になつた頃はまだまだ子供だった。

姉妹のようなフェイトと一人して甘えられる優しい存在。

母だ。

リニースはアルフにとつて大好きなお母さんなのだ。

ある日忽然と姿を消したリース。

プレシアは多くは語らない。納得できなかつたが、それでも納得するしかなかつた。

フェイトは凄く落ち込んだ。アルフは何とか慰めていたが自身も寂しかつた。

心配した。心配して心配して……でも、リースは戻つてこなかつた。

だが、突然リースは目の前に現れた。

歓喜した。とても嬉しかつた。

最後に見たときと変わらない姿。

優しげな瞳、薄茶色のショートカット、豊かな胸、トレードマークといつてもいい帽子。そのどれもが変わらない。

成長したため身長はさほど差がなくなつたが、それでも母に甘えたい衝動は抑えられない。

抱きついて胸に顔を埋めたい。抱きしめてほしい。親に甘えるのは子の特権だ。

リースは優しい言葉をかけてくれると思つていた。だが、現実は非常だつた。

「ちっくしょう！ 偽物つ！ 逃げんじやないよ！」

「くつ……落ち着いて……！」

だが、リースは知らないと言つた。

母親にお前なんて知らないと言われたのだ。

その衝撃は計り知れないだろう。

「うるさい！ リースがそんな事言つもんか！」

故にアルフはリースを偽物と断じた。

正解にはアルフの判断は正しい。だが、偽物と断じてもそれを認めたくない。だって、大好きな母が目の前にいるのだから。自分でも感情がぐちゃぐちゃで訳がわからなくなっているのだろう。だから、このアルフの荒れっぷりはある種の現実逃避である。

「ファイト、手伝つておくれよ。この偽物とつ捕まえるんだ。……もしかしたら本物のリースがどこにいるのか知つていいかもしけない」

「う、うん……」

ここで戸惑うばかりだったファイトも参戦する。

「……やつにくいですね」

先ほどからアルフの攻撃はリースにかすりもしない。怒りや悲しみが爆発し、出鱈田な攻撃しか繰り出さないアルフ。そんな幼稚な攻撃を避けるなどリースにとつては容易だ。反撃して潰す事も簡単だが、どうも攻められないでいた。

「偽物……偽物……！ フォトンランサー、ファイアッ！」

ファイトの援護攻撃。

これで一対一と不利な状況に立たされた。

「フォトンランサー……直射射撃」

アルフの蹴りを避け、フォトンランサーはラウンディングシールドで受け止める。

(アリシアは攻撃魔法を使えない。やはり、こっちの世界のアリシアと差異があるようですね)

「……アルフ、勝つよー。」  
「おうともさー！」

バルディッシュを振りリースに接近するフェイト。

突き出される拳、繰り出される蹴り、振り下される刃、襲いかかる魔力弾。

フェイトとアルフはすさまじいコンビネーションを見せた。傍から見ると圧巻の一言。息の合った攻撃の嵐はまるで演武のようで圧倒される。

しかし、そのどれもがリースに当たらない、かすりもしない。ヒーローの異常さが際立つ。

(なんで当たらないんだよ！？ これだけ攻撃しているのにー)  
(上手い……！ 全部、ギリギリの所で避けられる。シールドのタイミングも完璧だ)

二人は焦る。

リースに戦闘技術を教わった。リースがとても優れている事は知っている。

でも、ここまで強かつただろうか？ まがりなりにも経験を積んだ。ある種の修羅場もぐぐりぬけてきた。そう、成長しているはずなのだ、格段に。

なのにこの結果はどうだ？ リースは顔色一つえていない。対

する自分達はスタミナを消耗し息も徐々に上がりきっている。

強い。ただただその一言がフェイトとアルフの頭の中を支配する。

(使い魔はだいぶ落ち着いてきたようですね。荒さが無くなっています。アリシア……ここまで接近戦ができるとは驚きです。…

…ですけど)

「まだまだ甘いですね」

「くつ……！ 離せつ！」

「アルフ！」

リニスはアルフの蹴りを受け止めた。

それだけで驚異の一言なのだがリニスはだ止まらない。

「筋はいい。ですが、喧嘩殺法には限界があります」

受け止めた刹那にアルフの足首にチョーンバインドが絡みつく。

「くつ……フォトン……」

「遅いです。フォトンランサー！」

フェイトよりも早くフォトンランサーを放つ。

それを見て驚くフェイトだが持ち前の高機動で避ける。しかし牽制に成功したリニスの次の行動はフェイトの予想外のもので、次の一手は避けられなかつた。

「しつかりと受け止めなさい。いきますよつー」

「え？ うあつー！」

チヨーンバインドはアルフの足首とリースの右手を繋いでいる。リースはソニックムーブで距離とり、鎖の長さがそれなりに長くなつたところで行動に移る。

アルフを鉄球に見たて、フェイトに向かつてぶん投げたのだ。さながらモーニングスターか。鎖と同じような特性を持つチヨーンバインドだからこそといえる活用方法だ。ただ拘束しかできないと思いつ込んでいたら考え付かない使用法。鎖を魔法で作りだしていると考える事が出来ればこういった鞭のように使用するという応用もできる。もつとも、鎖事態に攻撃力は無いのだが。

「アルフっ！」

そしてぶん投げられたアルフはリースの思惑通りにフェイトに受け止められる。

「はい、もう一本です」「え？」

一人が密着している状態。こんな好機は無い。  
左手から延びる新たなチヨーンバインドは一人をぐるぐるに巻き身動きが取れない状態にする。

そしてアルフの足首に絡みついたままのチヨーンバインドを一端解除し、新たにもう一本作り上げ同じように巻きつける。

二人は二重のチヨーンバインドに縛られた。見動きは……できな  
い。

「ふう、何とかなりましたね」

チヨーンを両手から切り離したら終了だ。勝負はついた。  
雁字搦めで空中に浮かぶフェイトとアルフ。そしてそれを見小さ

く息を吐くリース。

「くつそ……なんで、なんでなんだよ……」

「アルフ……」

とめどなく涙を流すアルフ。後ろから抱きとめている形になるため顔は見えないが、悲しみに顔を歪ませているであろう使い魔を心配する。

(それにしても……この偽リース、強い………)

とんでもない相手だ。フェイトは心底そう思つ。

二人がかりで攻撃しても一撃も入れられず、一転攻撃に移ればあつという間に捕縛されてしまった。

どこか複雑そうな顔をしているリースの偽物……もしかしたら本物のリースより強いのではとフェイトは考えていた。

「さて、後は俊也の援護を。……まずは後衛を落とすのが必定ですね」

「くつ！ なのはに手を出さないで！」

友人を心配するフェイトにリースは優しく答える。

「安心なさいなアリシア。怪我はさせません。ユーノやあなた達と同じように捕縛して……クロノも捕縛して私達は帰ります」

手のひらに魔力を集める。砲撃で落とす。仮にディバインバスターを撃つても、未熟であろうこの平行世界の俊也の攻撃では勝負にならない。そう当然のようリースは思つていた。

「帰るつて……どこにだよ？ 閣の書の主の所かい？」  
「優しい寂しがりやな女の子の所にですよ」

術式が完成。魔法陣が空中に描かれる。

「トライデント……スマッシュジャー！」

そして放たれる金色の光。

三本に枝分かれした直射砲撃。この時代の俊也のディバインバスターを大きく上回る攻撃。

その大きな脅威になる砲撃がクロノを援護しているのはに襲いかかる。

## アルフの勧喫（後書き）

うちのリースさんは鬼強いです。

手札は多数（前書き）

リニースさんの魔法の元ネタをわかる人はいるだろうか……。

## 手札は多数

一瞬の隙も許されない。

一番のやつかいな能力を持つのはユーノだが、次にやつかいなのは間違いなくクロノだ。

彼の戦闘スタイルは独立汎用型。ポジションでいえばオールラウンダー。苦手な距離は無い。

それは俊也も同じだがそれは当然だ。ユーノに基礎を教わったが、さらにそれを突き詰めた応用や戦闘技術はクロノから学んだのだから。

現在戦っているクロノは厳密には師匠ではないのだが、戦闘スタイルは全く同じだった。男女の違いはあるが背丈や体格などはほぼ同じなのでそのまま師匠と戦っていると言つて間違いではないだろう。

先ほどのヴォルケンリッターとの戦闘による消耗、俊也の入れた一撃が効いているのか、万全の状態とは言いにくいクロノだが、それでも強敵なのは変わりがない。

体格ではクロノに負けている俊也。接近戦ではやはり体格差は大きい。互いにデバイスを用いた棒術や拳や蹴りで戦っている。が、子供の姿ではリーチも短いし力もない。

フルドライブ状態で何とか互角にまで持つていけど、長時間フルドライブを維持するのは体にかかる負担が大きい。時間をかけるほど勝機は失せていく。

クロノと戦うときは常に神経を研ぎ澄まさなければいけない。

戦闘技術もさることながら恐ろしくバインドの扱い方が上手いのだ。

クロノが得意とするディレイバインドは空間設置型、設置された空間に侵入したら発動する仕組みだ。不可視なので不用意に動き回

るとすぐに捕まってしまう。

瞬間的な機動力はソニックムーブを習得している俊也の方が上だろつ。しかし、小回りが利かず接近戦で使用するには無理がある。かといって距離を空けるとクロノ、なのは両者の砲撃にさらされる。現在ほぼクロノと密着状態であるためなのはは砲撃を撃てない。クロノを巻き込む可能性があるためだ。

「くつ……中々やるな君は！」

「あまり褒めないで下さいよつー」

現在俊也とクロノは互角。

手負いのクロノとフルドライブ状態の俊也が……だ。

そもそもエクセリオンモードはこの時代ではなくもつと後の時代に搭載されるものだ。体の出来上がっていない子供では負担が大きすぎる。現在は問題なくとも後々体にダメージが残る可能性が大だ。早めに勝負を決めたいが、決められない。

俊也とクロノ、共に攻撃型ではなく技巧派。両社とも攻撃型であつたならどちらかの攻撃が上回ればすぐに決着はつく。

しかしどちらとも技巧派なら勝負が長引くのは必然。攻撃力はフルドライブ状態の俊也が上回るだろうが、攻撃が当たらなければ全く意味がない。

だが、転機は突然として訪れた。

「ははっ！　さすがリースだ！」

「……何っ！　なのはっ！」

「にやっ！　わわっ！　レイジングハート、お願い！」

【ディバインバスター】

後方で攻撃の機会をうかがっていたなのはに金色の砲撃が襲いかかる。

リニースのトライデントスマッシュだ。

こちらに攻撃が来ると言う事はフェイトとアルフが倒されたという事実に他ならない。あの一人を相手にしながら更に援護攻撃をするとなると俊也にもクロノにも難しい。

「馬鹿な……フェイトとアルフがこんな短時間でやられるなんて……」

「ふふ……リニースを甘く見ていましたね。俺は模擬戦で一度もリニスに勝った事がないんですよ」

クロノと俊也は睨みあつたまま動かない。動けない。

すぐにでもなのはの援護に回りたいクロノだが、ここで背を向けるほど愚かではない。背を向けた瞬間に勝負が決するためだ。即ち己の敗北。

ディバインバスターで迎え撃つのは。

桜色と金色の光のぶつかり合い。

俊也とクロノは一端手を休め行く末を見守る。

なのはのは砲撃の天才だ。負ける事はそつそつないと考えているクロノ。

対する俊也は先ほどバスターが拮抗したためなのが撃ち負けると確信していた。フルドライブ状態で撃ちこんだなら負けはしないが、通常の状態で撃つたならリニースのトライデントスマッシュは俊也のディバインバスターを上回る威力を持っているからだ。当然、なのははここで墮ちる。そしてやっと当初の目的通り一人でクロノに当たれると思っていたが……ことごとく俊也の思い通りにはなら

ない。

「すゞい砲撃……！」のままじややられちゃう……！」

事実、少しずつだがなのはの砲撃が押されている。必死に力を込めているが状況は覆らない。

「レイジングハート、絶対に負けないよ。……！」

【その意気ですマスター。カートリッジロード】

ガチャンという機械音がライジングハートから聞こえた刹那、なのはの魔力が跳ね上がり必然的にディバインバスターの威力も上がる。

押されていたなのはの砲撃はカートリッジの効果で今やリースの砲撃と拮抗している。

それに驚いたのは一人と一機。

「カートリッジ！ こっちのレイハにはそんなのも仕込んでるの！？ ミッド式とは、それに加えてインテリジェントデバイスとは相性が悪いのに！」

俊也のレイハにはカートリッジシステムは非搭載だ。故にその違に驚く。これは完全に俊也の読み違い。インテリジェントデバイスにカートリッジは搭載されていないとの思い込みによるミスだ。

「……あのなのはの砲撃と撃ち合えるのか」

クロノは敵ながら感心していた。クロノは砲撃勝負ではなのはに勝てない。いや、そもそも砲撃でなのはに勝てる者は少ないと確信

していたからだ。

「これで互角……あの人強いよ。でも……ここで負けるわけにはいかないから！」

### 【カートリッジロード】

再度ロード。合計二つ。

俊也に言わせてみれば無茶苦茶だ。カートリッジは体にかかる負担が大きい。故に連續で使用するなど言語道断、ある程度鍛えられた大人ならまだしもなのはは子供、絶対に後々体に影響がある。子供のころからこんな負担ばかりかけていたら体もリンカー「コア」も壊れかねない。何故このような危険を容認したのかと俊也は憤慨する。

そしてカートリッジで力を上げたディバンバスターはここで完全にトライデントスマッシュヤ を上回った。

桜色の光は金色の光の飲み込み進む。そして爆音と共にリースをも飲み込んだ。

「リースっ！」

あせる俊也。ここでカートリッジとは完全に予想外。そしてリースの砲撃を上回る事も予想外。

認めよう、高町なのは九歳時の俊也を完全に上回る力を持つている。

「……君の使い魔はこれで戦闘不能だろう。大人しく投降する事を進めるが」

「クロノさん、あなたは完全にリースを見誤つてます。彼女がこれ

くらいで墮ちるなら管理局最強の使い魔は名乗れません

「……何？」

管理局といつ言葉に反応するクロノ。対し俊也は思わず出てしまった失言に舌打ちをする。

「状況が悪すぎます。作戦変更と行きますか」「何を……！」

戦闘続行と思っていたクロノは慌てて顔を腕で覆う。  
なぜなら俊也の左手に先ほどのフラッシュユースファイアがあったからだ。そのスフィアの効力も知っている。故に眼を潰されないようこしたのだが……。

「戦場で眼を閉じるとは余裕ですね」

【ラウンドシールド】

そんな無防備な姿を見逃すわけもない。俊也は通常の大きさよりも一回りほど小さく圧縮したラウンドシールドを開、それをクロノに叩きつける。物理的な痛みは無いが……。

「シールドブレイク！」「何つ……！ うあっ！」

叩きつけた瞬間に自らのシールドを破壊。その時生じた衝撃でクロノを吹き飛ばす事に成功する。

「クロスファイアっ！」

「わわわっ！」

クロスファイアでなのはを牽制し、ソニックムーブでリースの元へ駆ける。個人で戦うよりリースと連携を取った方が得策だと考えた。あのままクロノとなのはを相手にしていたら俊也が負けていた可能性が高い。

「……大丈夫そうだね」

「ええ、しかし驚きました。まさか撃ち負けるとは……」

バスターの直撃を受けたリースだが思いのほかけろりとしている。衝撃で帽子は吹っ飛んだようだが、ダメージは少ないようだ。

「……あんたよくあれで無事だったね」

「私だつたらやられてた」

縛りあげられているフェイトとアルフが半分あきれるような声で言つ。

「リースの強さは知つているだろアリシア……」

そして俊也は色々感情の混じつた今にも泣き出しそうな田代フェイトに言つ。が、やはりアリシアという言葉に反応してアルフは怒りフェイトは悲しそうに俯く。

「リース、あの子はやばい。事、砲撃に関しては完全に俺を上回っている」「ですね。今しがた痛感した所です」

時間はあまりかけられない。クロノもなのはも体制を整えつつある。

ここまで距離が離れていると主だった攻撃は砲撃メインとなる。  
一見俊也達が不利のように思われる……が。

「でも弱点は俺と同じだと思つ。あの子は女の子だから俺より効果はあると思うよ」

「…………そうですね。そうなると接近しなければ。……勝負はある子がバスターを撃つてきたとき」

「砲撃で俺に勝つっていても、それだけ。俺にはあの子が知らない技がある」

師から学んだもの、そして魔法研究開発課で開発したもの。

とくに後者は絶対に相手は知らない。なぜならその魔法は数年後に俊也達が作り上げるオリジナル魔法に分類される新魔法なのだから。

相手からしてみれば未知の魔法だ。かなりの脅威になるだろ？。

「札の多さならクロノさんにも負けない自信がある…………」

「そうですね、名誉課員の名は伊達ではありませんからね」「…………きた。準備はいい？」

「問題ありません。流石にカートリッジの乱発はしないでしょう。まあ使つても問題ありませんが」

「流石リニス。食べきれる？」

「問題ありません、御馳走です」

すぐ隣で身動きがとれないフェイトとアルフは何か戦力を分析しようと俊也とリニスを見続ける。

しかし残念な事にこれといって弱点らしい弱点は見つけられないでいた。

「プラズマグレネイド、セット

リースが一言呟くと突き出した右の掌を中心に魔法陣が浮かび上がる。

(一重……?)

魔法陣が一重になつていてる事に気がついたフェイト。だが、展開された魔法陣が何を意味するのかは分からない。

(シールド? 攻撃をする様子はないし……何だろう?)

しかしすぐにその意味を知る事になる。

「さあ撃つべきなさい。砲撃メインのミッドチルダ魔導士の天敵は総じて私ですよ?」

## 手札は多数（後書き）

次からクロス技が多数でできます。

クロスした技そのものではなく、それを元ネタにして俊也たちがミッド式の魔法を開発した、というのが正しいです。ですので、一部クロス元の技と違う部分などもあります。

クロス技の詳細なども俊也達の設定とともに掲載したいです。

## 異世界の師弟の決着

俊也とコースを除く一同は驚愕に眼を剥く。

なのはは予想通りディバインバスターを撃ちこんできた。

決して軽視できない威力を持つ砲撃だ、防御するにしても気を抜くとシールド」とやられてしまつ。

だが、その砲撃をリースは防いだ。いや、防いだだけではここまで驚かない。

「ふふふ……しっかりといただきましたよ」

なのはの攻撃は二重の魔法陣に吸い込まれた。ディバインバスターを取り込んだのだ。

「まさか……吸収！？」

声を上げたのはフェイト。咄嗟に思いついたが信じられないという顔をしていた。

単純に防ぐのではなく相手の砲撃を取り込む。それが魔力による攻撃なら理論上は可能かもしれない。ただ、それがどんなにもなく難しい技術だということは言われなくとも理解できる。

「そのまさかですよアリシア。防御でも反射でもなく吸収。砲撃、誘導弾、それが純粋な魔力によるものならこうして魔法陣内に取り込む事ができるのです。無論限界はありますが」

制限は純粋な魔力である」と。レアスキルによつて変換されたものや質量兵器は吸収できない。なのはのディバインバスターは吸収可能でもフェイトのサンダー・レイジなどは吸収は不可能だ。故にク

口ノのデバイスがデュランダルではない事が俊也達の有利に働く。

「そしてこの魔法は吸収するだけではありますん」

二重の魔法陣、前の陣から桜色の光が、後ろの陣から金色の光が溢れる。

「お返しますっ！」

そしてリースは吸収したディバインバスターをなのはに向かって放つた。

ただそのまま返したのではない。ディバインバスターに加えて自らの砲撃を上乗せしたものを作ったのだ。

つまりディバインバスター + トライデントスマッシュジャー。その二つの力を合わせた威力がある。

証拠に砲撃の色は桜と金が混じりあつたものをしている。

相手の攻撃を吸収し、自らの力を上乗せして相手に返す。

俊也が開発したものだ。似たような効力を持つ魔法はあるかもしないが、この魔法は紛れもなくオリジナル。初見で見破られる事はまず無い。

「嘘！？ すごい……」

「呆けるななのは！ 逃げないと不味い！」

迷わず回避するクロノとなのは。リースの放つた複合砲撃は見るからに威力があるものだ。回避を選んだのは正解だ。

全力で回避したため当たりはしなかつたが複合砲撃はそのまま真っ直ぐに進みビルを何棟か破壊していった。当たつたら一たまりも無かつただろう。

「さて、次は俺の番ですね……」

レイハを掲げスフィアを作る。しかし、ただのスフィアじゃない。すぐ横で様子を見ているフェイトとアルフの顔が恐怖に歪む。

「嘘……大きすぎる！」

「こ、こんなものぶつ放そうってのかい！？」

俊也のスフィアはどんどん大きくなっていく。

一メートル、三メートル、ハメートル、十、十五、二十一、二十八……その直径およそ三十メートル。規格外に大きすぎた。

「さあどうします？ ゆうにこの街を一瞬で消し飛ばすほどの魔力は集まっています」

「……正氣か？ 本気でそんなものを放とうとしているのか？」

なのはを後ろに庇うように立つクロノ。その顔は青い。見た事もないほどの巨大な魔力球。直撃すれば戦艦すら落とせそうなほどだ。防ぐ事は……絶望的。

後ろのなのはは恐怖からかかたかたと震えている。無知な子供でもあの巨大な魔力球が当たれば無事に済まない事は分かるだろう。

「避けてもいいですよ？ でも避けた場合は結界ごと街が吹っ飛ぶ。非殺傷設定でも無機物は破壊できますからね」

「く、くそ……」

見誤っていたのか。

確かに一筋縄ではいかない相手ではなかつた。仮にも執務官であるクロノと渡り合つたのだ。ただものであるはずがない。

だが、ここまででは予想外だ。あんな巨大な魔力球は見た事がない。ランクに表すとS越えは軽いだろう。いや、Sランクでは済まないかもしない。

「なのは……全力で防御する、君もそつしてくれ。……正直防ぐ事は難しいけどほんの少しでも街の被害は減らせるだろう。……幸い非殺傷設定らしいから死ぬ事はない」

「わ、わかったの……レイジングハート、全力で防御だよ！」

覚悟を決めたクロノとのは。

止める止めると騒ぎ立てるフェイトとアルフに軽く笑顔を見せ無情にも俊也はレイハを振り下す。

「リース……」

「了解です。あの子の相手は私が」

「いくよ……ファイアッ！」

規格外な魔力球が解き放たれる。

「なのはっ！ クロノっ！」

「ちつくしょう！ なのはと同じ顔して何てえげつないんだい！」

叫びもがくが、チエーンバインドによる拘束から抜け出せない二人は成すすべがない。

「…………くつそ…………！」  
「クロノ君…………！」

ガチガチに防御を固めるフェイトとのはだが今悠然と迫ってきたる巨大な魔力の塊を見るとその努力も徒労に終わると悟る。

(「いらっしゃんでもでかすぎる……！」)

奥歯を噛みしめ悔しきに顔を歪めるクロノ。

思わず口を閉じてしまつるのは。

バインドをどうにかしようともがくフェイトとアルフ。

ほくそ笑む俊也。

次の行動の準備を整えるリース。

結界内は爆音と光に支配された。

鼓膜が破れるのではないかと思つほどの大轟音、一瞬で視界を奪われる閃光。

音の衝撃に耐える。

そう、音の衝撃に。

「引っかかりましたね！」

「え？ きやあああああああ……」

ソニックムーブで突っ込んできたりースはそのままなのはを搔つ攫うように抱き上げ大きく距離を取つた。

「なのは！？」

「隙がないのなら相手の隙を作りだせばいいってマサルさんが言つていました」

「くつ……そ……！」

眼前に現れた俊也に対しデバイスを構えようとするクロノだが、

やはりその拳動は遅い。

クロノが構える前に俊也の攻撃が決まった。

レイハをクロノのデバイス、S2Uにあてがい一言。

「ブレイクインパルス」

「なつ！？」

ブレイクインパルス。その効果は知っている。クロノも使える魔法だ。

かつてクロノが時の庭園で傀儡兵を倒したのもこの魔法。一定の振動を相手に送り内側から爆散させるという魔法である。

事、精密機械相手だつたら絶大な威力を誇るであろう。

デバイスは言わずもがな精密機械。そんなデバイス相手にこの魔法を使えばもちろん……。

「…………そうくるか…………予想外だったよ」

「執務官の戦闘は相手を倒す事が目的ではない。あくまで逮捕、捕縛が目的です」

「そうだな…………そう考えれば武器破壊はとても効果的だ。肉弾戦に心得があるベルカの騎士ならまだしも僕らミッドの魔導士はデバイスが無くなつたら途端に弱体化する」

SU2は爆発を伴い碎けた。

バリアジャケットは解除されないが、魔法も今までのような高速処理や精密操作などはもう無理だろう。

クロノの勝機は完全に失せた。

「…………なぜ早くこの魔法を使わなかつたんだ？」

「知つているでしよう？ 一瞬の接触だつたらこの魔法は成立しません。あの攻防の中にそんな隙はなかつた。あつたなら俺のレイハがクロノさんに壊されていた可能性だつてあります」

「そうだな……。ならさつきの巨大スフィアは？」

「ふふ……フェイクシリエットって知っています?」

「幻影魔法……！」

そう、先ほどの巨大なスフィアは幻影。そもそもあんな巨大なスフィアを作りだす事など俊也にはできない。

「また珍しいものを……」

「師の一人に幻影魔法使いがいましてね。そして幻影に気を取られている隙に……」

「一番最初の田ぐらましか。今回は音も備わっていたな……。そうか、油断した」

デバイスを持っていないクロノは俊也には勝てない。  
もう状況は覆らない。

「では拘束させてもらいます」

「しかたないか……。でも、あの子達を甘く見ない方がいいぞ?」

チヨーンバインドで拘束されたクロノだがその眼にあきらめの色は窺えない。

「もちろんですよ。油断しません。あなたのように拘束して俺達は家に帰ります」

やつとの事でクロノを拘束する事に成功した俊也だが時間をかけすぎていた。

遠くリニースとなのはの方を見る。

そしてクロノが笑みを浮かべていることには気がつかなかつた。



異世界の師弟の決着（後書き）

デバイス壊されたらいいしょりにもないと想つ。

## 油断大敵

「さて、大人しくしていなさい」

「は、離してなの……」

現在なのははリースの腕の中にいる。抱きかかえられて身動きが取れない状態だ。

「抱き心地もあの子にそつくりですね。本当によく似てる」

「あ、あの、リースさん？」

戦闘という空氣では無くなっていた。なのはに現状を打破するすべは無い。意外と力が強いリースの拘束からは抜け出せない。

「なんですか？」

「ど、どうしてこんな事するの？ リースさんの事はフロイトちゃんから聞いたことがあるの。だからどうしてフロイトちゃんと戦うような事したのか分からぬの……」

「フロイト？」

フロイト、おそらく人物名。しかしリースには心当たりがない名前だ。

「そうだよ、それにあの私にそつくりな子は誰なの？ 俊也君って名前らしいけど。名字は私と同じだから家族に聞いてみても誰も知らないって言つてたの。お母さんもお父さんもお兄ちゃんもお姉ちゃんも」

「……待つて下さー。お父さんと言いましたね？ ……この世界ではあなたのお父さんは生きてくるのですか？」

「？ お父さんは元気だよ」

なのはの答えに息をのむリース。

（平行世界……性別の逆転は先ほどの田で確認しましたが……）

俊也に父親はない。周りの手助けもあつたが母親である桃子が女手一つで育て上げた。

父親である高町士郎は俊也が生まれて間もなく仕事中にテロにあい帰らぬ人となっている。

（この世界では土郎氏が生きている……）

胸が締め付けられる思いだ。

俊也は父親に関する記憶がない。顔も写真でしか知らない。家族の話を聞き自分の父親に誇りを持つているが、寂しかった事には変わりがないだろう。

兄である恭也が父親役を勤めようとしていたみたいだが、それも不十分だったようだ。兄は兄でしかなく決して父ではない。

（……どうすれば）

会わせてあげたい。

だがこうして明確に管理局と敵対した今では難しいだろう。

なのはを抱きかかえたまま思い悩む。

だがそれは決定的な隙となつた。

戦場で動きを止めるなど愚か者がする事。ほんの一瞬の隙でも命取りになってしまつ。

「なのはを離しな！」

突然の大声に驚き振り返る。

そこには先ほど拘束した使い魔、アルフが拳を振り上げていた。

「なっ！ いつのまに・・・・・！」

驚いた。チエーンバインド一本での拘束はそれなりに強固だ。短時間で抜けられるものではないのだが・・・・・現にアルフは拘束を抜け出している。

（まさかバインドブレイク？ 見誤りましたか・・・・・かなり優秀なようです）

ラウンドシールドを展開し拳を受け止めるが・・・・・。

「シールドブレイクッ！  
「なっ！」

アルフの拳は止まらずシールドを碎きリースに直撃する。

「ぐう……！」

思わず体制を崩してしまった。なのはも腕から抜け出してしまった。アルフが初めてリースに一撃を入れた瞬間、戦局は大きく傾く。

「なのは！ クロノの指示通りだよ！  
「分かつてゐるの！」

なのははレイジングハートを構えリースに狙いを定める。

「デイベイーン……バスター！」

「くつ……シールド！」

体制を崩しつつも再度シールドを展開する。プラズマグレネイドを展開する暇は無い。バスターの威力は並ではなく少しでも集中が乱れたらシールドごとやられてしまう。リースの得意とする砲撃であるトライデントスマッシュヤーなら押し勝つこともできるが撃つタイミングなどあるはずもなくどうしても防御に徹してしまう。

しかしこの場にいる敵はなのはだけでない。シールドを殴り壊したアルフはまだ攻撃の手を緩めない。

「ランサー！ ファイアッ！」

「厄介な！」

アルフの放つフォトンランサーを防ぐためにもう片方の手でシールドを展開。状況はかなり厳しい。

「いくよっレイジングハート！」

【カートリッジロード】

「！ こつむほんほんと使って……！」

いらっしゃがも更にシールドに魔力をつぎ込む。カートリッジは体にとても負担がかかる。まだ体が出来上がっていない子供が使用すれば後々どんな後遺症が出てくるか分かったものではない。

(どうしてこいつらの管理局は子供のデバイスにこんなものを組み込んでいるのですか？ 使用を許可しているのですか！)

歯を食いしばる。なのはのバスターは予想以上。シールドもガリ

ガリと削られていく。

「いいかげんっ！ 観念しなっ！」

「くつ！ しくじりましたね……っ」

やはり二人同時相手にするのは難しい。

リニースはあくまで拘束を目的に動いている。全力は出していない。上手く手加減しながら立ちまわっていたのが仇となつた。

戦闘不能にするならわりかし簡単だ。逆に怪我をさせないようこ拘束する方が難しい。

フェイトとアルフは完全に拘束されていた。手際良く事は運べた。だが相手が二重のバインドを碎く術を持ち合わせていたのが誤算だった。

魔法での拘束は時間があれば自力で解除する事ができる。

物理的な拘束具を持ち合わせていない俊也とリニースはだからこそ素早く事を済ませたかった。

タイムリミットはユーノの拘束が解ける時。さすがにあのバインドの雁字搦めを解くには時間がかかるだろうが、決して解除できなわけではない。

二重のバインドを解除するのにも時間がかかる。これだけの短時間でバインドを解除する事が優秀であるという証と言える。

俊也とリニースは敵の戦力を見誤るというシンプルなミスを犯した。決してやつてはならない重大なミスだ。

正直クロノとユーノ以外は戦力として数えていなかつた。だがその戦力外が思いのほか強力だった。

なのはの砲撃は通常の状態の俊也を上回り、フェイトとアルフはリニースと真正面から戦えるほどのコンビネーションを見せた。

現在のリースの魔導士ランクはおそらくA A AからS前後。

これはマスターが俊也になつたためランクがあがつたと予想されるからだ。

マスターがアリシアの時はAランク。プレシアがマスターの時はS + ランクあつた。

ランクが違つてくるのは供給される魔力などが違つてくる。使い魔の強さは主によつて左右されるし、優秀な魔導士か判断するにはまず使い魔を見るとまで言われている。最盛期ははやりプレシアの使い魔であつた時。俊也ほどの魔導士でもプレシアには敵わない。

現状Sランク程度と予想されるリースと戦えるフェイトとアルフ。その彼女らを戦力外と認識するほどリースは逸脱してはいな。

そして……戦力分析を誤つた結果がこれだ。

「捕まえたよ……絶対に離さない」

結局二人の攻撃を完全に捌く事が出来ずにアルフに背後から抱き締められる形で捕まつてしまつ。

なのはがカートリッジをロードしなければ捕まる事はなかつたはずだ。

また、リースが全力を出していれば捕まる事もなかつた。いや、ただの腕力だけの拘束ならすぐにでも解ける。そして単純なバインドでの拘束でもすぐに解ける。術も持つてゐる。

しかし……。

「考えましたね・・・・・・これはやっかいです」

アルフはリースにしがみついたまま自分」とチーンバインドで拘束した。

「頼むよなのは！」

「うん！ レストリクトロック！」

「収束系の上位魔法！？」

更になのはのバインドがリースとアルフを拘束する。

収束系の上位に位置する強固なバインド。俊也とリースの持つど  
のバインドよりも強固で解除は難しい。まさか魔法に出会ったばかり  
の人間がこのような上位魔法を使用してくるとは思わないだろう。

じつしてリースは完全に拘束されてしまった。

「なのは！ 絶対にこの偽リースは離さない！ 早くフェイトの援  
護についておくれよ！」

「わかったの！ 絶対に勝つから少しの間まつてね！」

拘束されたリースとアルフを残してなのはは飛び去っていった。  
おそらくフェイトは俊也と交戦中なのだろう。俊也は一対一の不  
利な状態で戦わなければならなくなつた。

「・・・・・クロノの指示通りと言いましたね。あの子、拘束さ  
れながらもあなたたちに念話で指示を出していたのですか？」

「その通りだよ。こうも言っていた。拘束に至るまでは見事だけど  
詰めが甘かつたってね。こちらに出来るだけ怪我を負わせないよう  
に動いたことがミスだと言つていたよ」

「そうですね・・・・・意識を刈り取るかスタンバレットでも打  
ち込んでいたら結果は別でしたか

悔やんでも襲い。手心を加えたのが命取りになつた。

さすがのリースもこの状態を脱するのは厳しい。レストリクトロ

ツクがなければだいぶ違つてくるのだが……上位魔法の名は伊達ではない。

「私は詰みましたか…………衰えましたね…………」

あまりに不甲斐ない結末に顔を歪める。

優しい俊也の事だからリニスを見捨てて逃げるという選択は絶対にない。そしてそれはリニスにも全く同じ事が言える。

俊也とリニス、どちらか一人が捕まればそれで負けだった。

「あまり無茶しなければいいのですが…………」

孤立奮闘しているであろう俊也を心配しつつこれから自分たちがどう動くのが最善か考える。

(リ)のよつなお別れになつて残念ですはやて…………

おそらくもうあの優しい家には帰れない。

俊也と自分が居なくなつて悲しむであろう少女を想いリニスは心を痛めた。

## 油断大敵（後書き）

わざとあつたり捕まりました。

収束系上位魔法なんだから拘束力ははんぱないはず。

フォイトは焦っていた。  
油断ならない相手だと分かつてはいても相手は自分よりもなお小さい男の子だ。

(攻めきれない……！)

だが、決定打を与えられない。  
上手く避け、捌き、隙を窺つて攻撃してくる。

(それどころか逆に攻められてる……！)

ソニックムーブで距離を詰めれば同じくソニックムーブで逃げられる。

フォトンランサーはクロスファイアで相殺。かといって大きく距離を取ればティバインスターの餌食になる。

「速いなっ！　くつそ……！」

俊也もまた焦っていた。

予想以上の高機動。俊也の知るアリシアとは似ても似つかない戦闘スタイル。

(く……速度を削がなきや……)

スピードは完全に負けている。ヒットアンドアウェイを繰り返されたら俊也のスタミナが先に尽きる。

(フルドライブを維持するのもきつくなつてきた……)

俊也は今現在フェイトと同じ戦法をとつている。

近づいてはデバイス振るい、ソニックムーブで距離を取りスフィアで牽制しつつ遠距離では砲撃。

全く同じ戦法なため戦闘は均衡してどんどん長引いていく。どんどん俊也の不利になつていく。

(クロノさんを無力化できたのはよかつた。なのはもリースが引き離してくれた。でも、このアリシアは予想外すぎるー。)

デバイス同士をぶつけ合ひ、離れ、また近づきぶつけ合ひ。

「君、強いね……攻めきれないよ

「それはこっちのセリフだよアリシア。いつかの君はやんちゃがすがれるー。」

マントの中に隠していたスフィアを放つがフェイトはソニックムーブで逃げて当たらない。

「バスター！」

「くつ……！」

ディバインバスターで追い打ちをかけ体制を崩す事に成功する。疲れてきているのはフェイトも同じ事。完全に防ぐ事に失敗したその隙を俊也は見逃さない。

「ディバインスフィア多重展開！ 包囲弾！」

「なっ！ 多すぎる！？」

体制を崩したフェイントを囮むよつて多重展開されたディバインス  
ファイア。

フェイクシルエットで造り出した偽物も多く混じっているのだが、  
全部が全部偽物というわけではない。

その数たるやうに百以上を超えている。

スファイアに囮まれたフェイントは下手に身動きとれない状態だ。

（魔力の消費が激しいから使いたくなかったけど、出し惜しみしてたら負ける！）

幻影魔法は決して少なくない魔力を使用する。いかに魔力量が常人より多い俊也といえど限界はある。

クロノとなのはを騙すのに使ったあの巨大スファイアにもかなりの魔力をつぎ込んだ。エクセリオンモードの維持にも結構な魔力を使つていてる為に残りの魔力が心もとなくなってきた。

「はあ……はあ……アリシア、ノーマークだつたからかなりきつかった。今のうちにバインド……つと…」

俊也はソニックムーブで距離を取る。刹那のタイミングで先ほど俊也のいた場所を砲撃が通り過ぎる。いわずもがな、なのはのディビングバスターだ。

「むう……避けられちやつた。今度はしつかり当てるよ… レイジングハート！」

【オーライマスター】

次を撃つためにレイジングハートを構えなおすなのは。もちろんカートリッジのロードも忘れない。

「アリシアの動きを封じたと思ったら……！ リースは何をやってるのー？」

思わず毒づいてしまう。フロイト一人でも厄介なのにそこになのはが加わるとなると押し負けてしまう。

フロイトは今気づいていないようだが、別にスフィアに囲まれていても砲撃はできる。だから多くのスフィアに囲まれ焦っているうちに、バンドをかけておきたかった。

「出し惜しみは無しか……よし、俺も札を一枚切るか

レイハをフロイトの方に付きつけたままマントに手をかける。

「いっくよー！ テイバーン……バスター！」

再び俊也に向かう桜色の砲撃。

しかし、俊也は避ける様子も相殺させる様子も見せない。

ただ、背中で風になびいていたマントを砲撃の方向に向ける。

「アリシア、このマントがバリアジャケットの一部だと思ったかい？」

「…………バリアジャケットじゃない？」

「そう、分からなかつたかもしれないけどこのマントはバリアジャケットを纏つた後に作り出したもの。このマントを出す前に俺の足もとに魔法陣が浮かび上がつたの気がつかなかつた？」

「そりいえば……」

そう、確かに最初に姿を見せた時はマントなどなかつた。俊也のいう通りマントは後々作り出したもの。

「ふふふ……俺の札の一ツ。コニースのプラズマグレネイドにはまる  
性能だけど」

バスターはもう才前まで迫っている。しかし、俊也はシールドの一つも張らない。

なのはのバスターは俊也のバスターと互角、カートリッジを使えば威力は上回る。直撃すればそのまま戦闘不能に陥るレベルの攻撃だ。そんな砲撃を目の当たりにして直立不動など考えられない。

しかし、フェイトが見たものは攻撃を受ける俊也でも攻撃を防ぐ俊也でもなく……。

「 ひらり！ つてね

マントでティバインバスターを受けると信じられない事にそのまま反射してなのはの方へ向かっていった。

「リフレクト！？」

フェイトが驚愕に目を剥く。先ほどコニースも使用していたが反射魔法など本来はそぞろおおにかかるものではない。

「 いや！？ うつそおおおおー！？  
「 なのはーー！」

まさかの展開に対処しきれなかつたなのはは己の放つたティバインバスターを受けてしまう。

爆発音と共に煙に包まれるのはを呆然と見つめるフェイト。さすがに反射されるなど予想できなかつた。

「マントは壊れたか。ふう、でも良しとしよう。俺の勝ちだなアリシア」

「驚いた……でも、君はなのはを過小評価しているよ

フロイトは確信している。なのははこの程度では墮ちない。なんせディバインバスターより威力が上であるフォトンランサー・ファランクスシフトを受け切ったのだ。そしてあの頃より魔法の運用も技術も向上している。

「……いや、でもバスターの直撃を受けて……」

ゾクリと悪寒が走る。

フロイトに向けていた視線をなのはに戻す。

「まじか……！？」

あなどっていた。なのはをまだ侮っていた。

「固いな！？ くつそー！」

焦る。完全になのはを下したものと思い込んでいた。

(あの奇襲の反射から咄嗟に防御が間に合つたのか…?)

焦る焦る。完全に、幼少期の俊也を完全に超えている。実力もA+どころでは済まないだろ？。

「本物の天才かっ！」

「マントの再展開は間に合わない。シールドの展開は……。

「ひら マント……実在していたなんてびっくりなの。でも、負けない！」

機械音が合計四回。つまり四回のカートリッジのロード。

「どれだけロードしてるんだよ。くつそ、無茶が過ぎるだわ！」

俊也のレイハにはカートリッジ機能は付いていない。

シールドを張るにしてもあれだけ威力を高めたバスターを受け切る自信は無い。相殺しようにも威力が足りない、魔力も足りない。フェイトの動きを封じ込めているディバインスファアの包囲弾を維持しているために現在進行形でガリガリと魔力は削られていって。もう、後は無い。

「全力つ！ 全開つ！ ディバイン……バスター！」「くつそ……バスター！」

ぶつかり合う桜色の砲撃。しかし、今回は目に見えてなのはのスターが押している。

「一気に押し切るよレイジングハート！」

【オーライマスター】

「きつついな……レイハ、持ちそうか？」

【厳しいですね。あのディバインバスターは完全にこちらを上回っています】

消耗がある、そして十全の力を發揮できない子供の姿でもフルドライブ状態だ。

砲撃という一点のみだが完全に自分を上回る平行世界の自分に恐怖の念を抱く。

しかし、俊也にも意地がある。いくら子供の姿にならうとも培つた経験は変わらない。

特訓もつんだ、修羅場もぐぐつた。努力を重ねて手に入れた今が強さだ。いくら全力が出せなくとも……。

「魔法を知つて一年にも満たないひよつこに負けてたまるかっ！ 意地があるんだよつ！ レイハッ！」

【マスター、しかし……】

もはや俊也と以心伝心の関係であるレイハは己が主がやろうとしている事に感づくが……。

「レイハッ！」

【……了解しました】

しぶしぶといった感じではあるが了承する。  
世界が変わつても根元は同じ。負けず嫌いなところも一人に共通していた。

「コミッタ 解除つ！ ブラスターワンつ！」

刹那膨れ上がる俊也の魔力。

それはカートリッジ四本で強化されたなのはの魔力を凌いだ。

「こや！？ 急に……強くつ！」

完全に押していたディバインバスターを押し返していく。

俊也の戦いも決着が近づいていた。

## 限定解除（後書き）

俊也のマントはシールド魔法の一種。効果はドラえもんのあれ。ディバインスファアの包囲弾はペッコロさんのアレです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7305p/>

白き不屈の魔導士

2011年9月28日18時15分発行